

# 魔法少女リリカルなのは～無限転生者の記憶～

No. 7 8

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

無限に転生を繰り返すこと1万2000年以上……  
数えるのも呆れるくらい転生の末、主人公はある世界に転生し、ある少女たちと出会う。

この出会いは、少女たちの運命にどう関わってくるのか  
主人公は待ち受ける試練にどう立ち向かうのか

色々おかしい部分がありますが、面白ければヨシ！の精神で続けます。  
います。

それでもよろしければ、お付き合いよろしくお願ひします。  
評価の程よろしくお願ひします。

# 目次

ZERO Memory 始まりの記憶

Memory 1 誕生 | 1

Memory 2 海鳴市 | 3

Memory 3 乱闘のち交通事故 | 5

Memory 4 W・D・D・O | 8

Memory 5 自己紹介 | 10

Memory 6 新たな真実 | 12

Memory 7 ヒント | 15

Memory 8 少女との再会 | 19

Last Memory 車椅子の少女 | 22

First Memory 白と金と無限転生者の記憶

Memory 1 新装備『MMA』前編 | 27

Memory 2 新装備『MMA』後編 | 31

Memory 3 訓練 | 34

Memory 4 改造 | 37

Other Memory MMAについて | 41

Memory 5 夢の狂気と謎の念話 | 44

Memory 6 非日常への一歩 | 48

Memory 7 第1班、出動！ | 51

Memory 8 なのはとフェレット | 55

Memory 9 白い魔導師の少女 | 59

Memory 10 初めての魔法 | 62

Memory 11 事情聴取 | 66

Memory 12 今後の方針 | 69

Memory 36	異変	179
Memory 35	模擬戦	174
subMemory	設定&プロフィール	170
Memory 34	協力	165
Memory 33	管理局	160
Memory 32	接触	157
Memory 31	反動	152
Memory 30	改修案	149
Memory 29	暗雲	145
Memory 28	勝負の行方	141
Memory 27	始まる戦い	138
Memory 26	旅行	133
Memory 25	オーツーの決意、なのはの思い	128
Memory 24	始まる悪夢	125
Memory 23	なのはとフェイトと破壊魔	120
Memory 22	謎の少年（フェイト視点）	115
Memory 21	金色の少女との出会い	111
Memory 20	なのはの必殺技と二人の来訪者	107
Memory 19	リーネの決断	100
Memory 18	襲撃者の正体	96
Memory 17	襲撃	91
Memory 16	新たなる決意	87
Memory 15	久しぶりの休日	83
Memory 14	励ましと強制休暇	79
Memory 13	二つ目のジュエルシード	73

M	M	M	M	i	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M	M
e	e	e	e	d	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e	e
m	m	m	m	e	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
o	o	o	o		o	o	o	o	o	o	o	o	o	o	o
r	r	r	r		r	r	r	r	r	r	r	r	r	r	r
y	y	y	y		y	y	y	y	y	y	y	y	y	y	y
5	5	4	4		4	4	4	4	4	4	4	3	3	3	3
1	0	9	8		7	6	5	4	3	2	1	0	9	8	7
新	再	崩	リ		迷	迷	調	記	休	目	目	不	移	撃	交
装	契	落	ニ		宮	宮	査	憶	息	的	的	安	動	破	戦
備	約		ス					処		2					
					な	0		理							
					の	0									
					は	s									
					&	i									
					フ	d									
					ェ	e									
					イト										
					ユ										
					ー										
					ノ										
					&										
					ア										
					アル										
					フ										
					s										
251	247	243	237	232	s	228	220	215	211	207	202	195	190	186	182

Z E R O M e m o r y      始まりの記憶  
M e m o r y 1    誕生

黒、ただただ真っ黒の空間………  
何回、何千回、何万回と見てきた空間………

「(またここに来たか………)」

その空間に漂っている『僕』は疲れたように呟いた。  
僕は身動き一つしないが、僕の身体は水に流されているように、  
真っ黒の空間の先にある白い光に向かって流れていた。

「(今度は、どんな世界なんだろうか………出来れば)」

平和で明るい世界がいいな………と呟くと同時に、僕は真っ黒の  
空間に出来た

白い光の中に消えていった

瞼の隙間から光が差し込む………眩しい

「(………また、朝が来た)」

やあ、僕は………名前は無い、いや、名前はあった。しかし、この  
世界での名前はない。

僕は、ある種の呪いを持って生まれた。その呪いは………

『無限転生』

『無限』の名前の通り、死んでも、また新しい世界で新しい身体で甦る。  
僕は輪廻から外れた存在なのだ。

別にこのことについてはどうも思っていない。

ただ………

「(何で、転生すると決まってネコ何だろう………)」

何故か基本形態がネコなのだ。色は黒。一応、ネコ形態から人型形  
態になれるけど

僕は断然ネコの身体がいい。

「まあ、他にもいろいろな能力があるし、気にしていないけど」  
僕の持っている能力をまとめると

- ・変身能力（ネコ⇔人間・・・断然、ネコ派）
- ・念動話術能力（離れた相手との意識間会話能力のこと・・・使った経験数回）

- ・解読能力（異種族の文字、言葉を理解できる能力・・・勉強いらず）

- ・空間転移（離れた場所、または異空間に転移する能力・・・ほぼ逃走用）

- ・記憶継承（前の世界の記憶や経験を受け継ぎ、身体に覚えさせ本にして保存する・・・）

クリアデータを受け継いで再スタート？）

の5つとなる。どれも、転生した世界に対応するためのものばかりでとても重宝する。

「さて、また放浪ネコらしく色んなところに行こうかな」

そうして僕は、歩き始めた。

道の途中の標識には、

『海鳴市まであと1.2km』

この後ついた街で僕は、数えるのも億劫になるほどの転生で初めてこの世界に留まっていたいと思う出会いに会った。

だけど、それは同時に、これから起こる様々な事件に巻き込み、巻き込まれる事への

始まりであることに、僕は気付くはずも無く、標識の方向へ向かって歩き始めた。

それが、戦いに塗れた茨の道であることに、

でも、例え分かっていたとしても、僕は止まる気はない。

茨の道を吹き飛ばし、地獄への道を捻じ曲げる。それが、僕が無限に転生する

理由のような気がするからだ。

## Memory 2 海鳴市

海鳴市に着いた。いや、遠かった……。

「何が2.5 kmだよ！明らかに5 kmはあったぞ！」

文句を言いつつ（と言つても、周りからはただネコが鳴いているだけ）公園にやってきた。

「日向ぼっこでもしよう……。あのベンチ、暖かそうだし……」  
そう言つて、僕は陽の光の当たるベンチの上で眠りについた。

「おい……」

「……ん？……誰？」

突然、寝てるときに声をかけられた。

不機嫌そうに目をあけると……。うわあ……。いかにも『ボス』的なネコがいた。

「(何?)」

「(何?じゃねえよ。ここは俺の領地だ。他所モンが勝手に入ってきていい場所じゃねえ。)」

……。見た目どおりの奴でした。でも、寝起きの僕は機嫌が悪い。無視しよう。

「(ふーん。あつそ)」

「(テメエ……。痛い目見ないと分からないようだな……)」

しよーもない殺気を垂らしながらボス的なネコが近づいてきた。

……。ちよつと脅かしてみようか

「……(キツ)!!」

「(うひい……!?)」

僕が目の中のネコに向けて殺気を含めて睨みつけるとネコは怯えて金縛りにあつたように固まった。

「(……ひい……。覚えてろー！)」

ボスネコは脇目も振らず逃げていった。と言うか



「あんな在り来たりな捨て台詞を言いながら逃げる奴初めて見た……」

ともあれ、再びお昼寝タイム

「あつーネコー!」

「(ん?今度は誰?)」

誰かが近づいてくる足音が聞こえたので、うつすら目を開けると茶色い髪のツインテール少女が目の前でしゃがんでいた

ランドセルを背負っているところから小学生。恐らく、1, 2年生くらいかな?

「な、撫でてもいいかな?」

いやいや、ネコに話しかけるのはおかしいでしょ? まあいいや

適当に「にゃ〜」と鳴いておこう

「いいのかな……?じゃ、じゃあ撫でるよ?」

恐る恐るといった感じで僕の頭に触れて撫で始めた。

「(ん?この子、どつかで会ったような……と言うより誰かと似ているような……)」

まさか。僕と違う世界で会えるなんてありえない。

「君、野良猫?でも、綺麗な毛……(ナデナデ)」

「フニユウ~~~~」

……今まで何回も触られたけど、今回は……何というか、懐かしいというか、不思議な感じがした。

不思議な感じがした。

5分ほど撫でると、少女は立ち上がり

「あつ、そろそろ帰らないと。じゃあね。」

といって、走り去っていった。

「(ふう……なんか久々に触られた……。あの子、また来るかな?)」

少し、明日が楽しみ。

## Memory 3 乱闘のち交通事故

次の日は……災難だった。

僕は、昨日であった女の子に今日も会えるかな、と思いつつ今日は何をしようか考えていた。

「あの子とここでまた会えるとは限らないし、この世界を知るために町を探検してみよう」

そう言うことで、僕は町の中心部に向かって歩き出した。

町の中心部の人気のない裏道を歩いていると、

「おい！昨日はよくもやってくれたな！」

昨日脅かした、ボスネコと会ってしまった。

かなり昨日のことが頭に來ているみたい。

メンドイ……

「何？文句を言いに來ただけなら帰ってくれないかな。僕は世界を知るのに忙しいんだ」

「(テメエ……もう許さん。二度とその生意気な口を聞けないようにしてやる……

おい、お前ら、やっちまえ)」

すると、裏道のあちこちから子分のネコが現れた。数にして大体10匹くらい。

そして、一斉に襲い掛かってきた

「はぁ……痛いのは嫌なんだけどなあ……」

そう言つて、全員を返り討ちにすることにした。

しかし、この乱闘騒ぎが僕のこの世界での生活を大きく変えるきっかけとなると言うことを

この時は知るはずなかった。

時間にして約数分。

勝負は殆ど着いた感じになっていた。

「くそっ……よそ者のくせになんてデタラメな強さなんだ……」

子分が全員倒され、ボスネコと一対一で戦っていたが正直、弱すぎて相手にならない。

そりゃ・・・こっちは軽く見積もって1万以上生きているんだから経験や場数が違いすぎる。

「(どうする？降参するなら、攻撃しないけど?)」

「(ふぎけるな！降参なんかするか!!)」

といって、また攻撃しようと尖った爪を光らせながら飛び掛ってきた。

僕は、それを避け横から体当たりを食らわした

「(グッ・・・くそ・・・)」

この時、僕はこの乱闘はネコの視点から見れば本気の喧嘩だが、人の視点から見るとただの野良猫同士の喧嘩で、迷惑なだけだという事に気付いていなかった、

「(もう一度・・・ん？ゲッ！ヤバイ、おいお前ら起きろ、保健所のやつらが来たぞ、逃げろ!)」

そう言うと、ボスネコとその子分はフラフラしながらも逃げていった。

「(ん？ほけんじよ？何だろう?)」

後ろを振り向くと、網を持った人が2, 3人こっちにやってくるのが見えた。

「(これは・・・逃げよう。)」

空間転移を使おうと思ったが、逃げ切るのは余裕だろうと思って走って逃げた。

「あつー！こら待てー!!」

「(待てといわれて待つ奴はいない!!)」

僕は、人が入れないような細い道に入り、そのまま大きな通りに出たが・・・

ドガンツ!!

飛び出したせいで、車に跳ねられてしまった

しかも、無意識のうちに受身を取ろうと人型になってしまい、強烈な痛みで意識を失った。

# Memory 4 W.D.D.O

「う……………」

痛みで目が覚めると、病院にいた。

いや……………ここは病院じゃない。

「(違う世界かな？さっきいた世界には空中に浮かぶディスプレイなんて無かったし)」

それにしても、いつもと目覚め方がちがうなー、と不思議に思っている

「あら？目が覚めたようね。」

扉が開き、銀色の髪をした超がつくほど美人な女性が入ってきた。

「驚いたわよ。いきなり逃げ出して拳句には車に跳ねられて、しかもネコから人になれるなんて。」

「……………」

あれ？ほけんじよって言うところの人じゃなかったの？

「あなたも異世界人なのね。どこから来たの？」

「……………」

『も』？と言うことは、この人も……………いや違う、この人は転生者じゃない。

言葉通り、別次元から来たんだろう

「と、言うか。さすがにそこまで黙り込まれると結構悲しいんだけど、喋れるでしょ？」

「えっ？あつ……………」

今更だけど、人型のままだったという事に気がついた僕。

「すみません、人の身体は久しぶりなんで……………」

「それにしても、あなた凄いわね。魔力の量が計測器を拭き振り切っちゃうなんて。」

「……………そうなんですか。あつ、それよりあなたは誰ですか、そしてここは？」

「そうね、まずは自己紹介ね。私はリーネ・アイリス。」

……………この司令官でさっき言ったとおり、異世界人よ。

そしてここは、海鳴市の地下にある『世界次元防衛機構』通称『W.D.D.O』と言う組織の基地。

主に超常現象の研究や次元犯罪者の逮捕、ロストログアの回収保管、

そしてこの世界の人々を次元犯罪から守るのが仕事よ」

「まさか・・・管理局の支部か何かですか？」

もし管理局絡みなら、僕はここを破壊してでも逃げなければ……  
「安心して、違おうよ。あんな自分の欲求だけを追い求めてる奴らが組織している

ところと組まなきゃならないのよ」

・・・嘘は言ってなさそう。一応、信用してもいいかな？

「その証拠に、この組織にいる異世界人は私だけ、あとの職員はみんなこの世界の人のよ。」

実は、世間には知られてないけど裏では世界各国が認めているちゃんとした組織なの。」

それが本当なら、物凄い特権や権限を有する組織という事になる。

こんな組織は簡単には作れない……………

「どうしてこんな組織を？」

「え〜つと、私がこっちの世界に引っ越してきたときにね、その……何と言うか……」

リーネさんはバツが悪そうに、ポソポソ話し始めた

「うっかり向こうの技術を使っちゃって、で色々バレちゃって……………」

今に至ると……結構省略されているけど気にしない。

「だいたい分かりました。」

「うん、じゃあ、今度はあなたの番ね。」

さて、どうやって説明しようか……………

## Memory5 自己紹介

「僕は……クロヤです。下の名前やファミリーネームとかはありません。親もいません」

これが一番まともな名前だと思う。僕の名前って番号とかコードネームが多かったし

「え？どういふこと？もしかして親が死んじゃったとかそんなのじゃないよね？」

「いいえ。僕は今は子供に見えますが、今まで生きてきた時間を足すと1万歳は超えます」

リーネさんが啞然としている、着ていた白衣が肩からずり落ちるほど驚いたみたい。

「僕は『無限転生』という一種の能力と言うか呪いをもっています。その力は言葉通り、

無限に転生して様々な世界を生きる力です。」

「転生……輪廻転生とかそういう類なのかな？」

「似たようなものですよ。ただ、それまで生きて見たり体験してきた世界の情報は

持ったままですし、力の副産物なのか分かりませんが言語解析能力とか空間転移、

念動会話といった能力も持っています。」

「歩く無限書庫ね……忘れてたりしないの？」

「忘れませんね。それに……あれ？僕、本を持ってませんでした？」  
あれがないと非常に困る。

「これのこと？表紙は真っ黒、書いてある文字は殆ど解読できないし、これって？」

「そうそれ。これが僕の今までの記憶……生きてきた世界で僕自身が体験してきたことを

纏めた本……『記憶の書』って呼んでますけど。」

これが、僕が無限に転生していると言う証。

「日記とか歴史書とは違うのよね？」

「まあ、僕が体験してきたことしか載りませんから・・・その時代その世界の技術や技の他に

僕が関わってきた人物、出来事とかが載ってますよ。」

「もう、これは無限書庫通り越してロストロギアね・・・」

ロストロギアね・・・あれに近い・・・のかな？

「まあ、僕についてはざっとこんな感じですよ。もし、この話を誰かに話したり、

戦いの為に利用するならば、僕はここを破壊します。」

「絶対しないわ、約束する。ところで、クロヤ君はどうするの?」

「え?ネコの姿で野宿とかですけど?」

「ちよつ!それはダメ!いくら1万歳超えていようと、今は子供なんだから私が許さないわ!」

.....あつそうだ、いつそ私の養子になっちゃいなさい!」

ええつ!うくん・・・確かにこんなに美人な人が親というのもいいけどなあー

「.....迷惑じゃありませんか?」

「全然!むしろ大歓迎!」

.....なら

「よろしくお願いします。リーネさん。」

「こちらこそ!よろしくクロヤ君!」

と言っことで、僕はリーネさんの養子になることになりました。



## Memory 6 新たな真実

家族になって一ヶ月、今は地上にある母さん……リーネさんの家で暮らしています。

しかし、僕にはある問題が発生した。

「うつ……く、苦しい……いた……い」

身体に締め付けるような痛みと息苦しさが襲ってきた。

「ど、どうしたの!?!」

母さんが慌てて僕に話しかけてきた。

「母さん……た、多分、原因は……か、身体の中……今、すぐ……基地……に」

母さんは僕を抱きかかえると、急いで基地に向かった。

『W. D. D. O』基地内メディカルセンター

リーネSIDE

「うそ……なんで気付かなかったの……」

私は、自分の不注意を呪った。

自分の子供の身体の管理すらまともにできないなんて……

『母さんのせいじゃないよ。僕がずっと隠してたんだから』

クロヤがモニター越しに力なく笑っていた。

今、クロヤは隣の部屋のメディカルマシンのカプセル内にいる。

クロヤが隠してきたこと……それはクロヤの内臓は機械が探知できないほど

精密に造られた人工内臓であること……ううん違う。

内臓から筋肉、骨に至るまで身体の殆どが改造されていると言うこと……

『ごめん母さん。僕の力に記憶の書があるでしょ、

あれって体験したこと全てを記録して僕に反映させるんだ、

だから今までで習得してきた技、覚えた技術、そして、身体の改造もね」

「……いつ、改造されたの……」  
『うーんと、この世界に来る2,3個前。僕の無駄に多い魔力に気付いた人たちが、

僕を拉致して改造したんだよ…… N I S 開発計画っていう計画の為にね』

『N I S 開発計画』?』

ろくでもないものなのは確かね。

『高い魔力とか身体能力が高い子供を拉致して、機械とナノマシンを入れて改造するんだ。』

そうするとそれに応じた体の機能が強化されるんだ。僕以外にも4人、被験者がいたよ』

「……何よ、それって人が出来ることなの!? そんなの人のやることじゃない……!」

人を人と思わない……そんなの許されるわけがない!

『大丈夫ですよ。その人たち、時空管理局によって捕まりましたから』  
「えっ? そこって、管理世界?」

そんな事件なら私も知っているはず……何で知らないの?

『知るはずもないよ。だって、僕たちがその人たちの基地を壊してデータを消して逃げたんですから』

それほどの力を持っていたなんて……一体、どれほどの改造をしたというのよ……

でも、何でそんな危険を冒してまで脱走を?

「何で管理局に保護されなかったの? 少なくとも普通の暮らしは保障されるはずよ」

『……彼ら、兵器としてはもう完成体だったんだよ……あとはいらぬ感情を消すだけの状態で。』

そんな状態で捕まったら間違いなく戦力として使われてたし、僕たちと同じような存在を生むかもしれないってみんなで判断したんですから。』

『そんなことはない』って言い切りたいけど……出来ない……  
「身体の不調は……何が原因なの?」

強引に話を切り替え、不調の原因を探った。

『うくん。多分、身体と機械とナノマシンの拒絶反応。僕は色々違うからね。もう治らないよ。一生』

そんなこと……ない

「……おす」

『え？』

「治す！治してあげるわ！絶対、絶対！だから……だから治らない……なんて言わないでよ……」

私の目からは涙があふれていた。同情したんじゃない……そんなつらいことを背負っていたクロヤに

気がつかなかった自分に腹が立って悔しかっただけ。

「もつと一緒に過ごしたいよ、だから治させて……お願い」

『母さん……僕ももつと母さんといたい！だから、お願いします！僕の身体、治してください！』

ええ、もちろんよ！

## Memory 7 ヒント

僕の身体が悪化して一週間。

母さんは寝る間も惜しんで僕の身体の解析をしている。

僕は今、基地の医務室で身体に負担をかけないように行動を制限されながら生活しています。

「母さん、無理しないでね。」

「うん。あと少しなんだよ．．．あと身体とナノマシンの拒絶反応をどうにかすれば解決なの．．．」

「ごめんね時間かかっちゃって」

「かかってなんかいるもんか．．．」

僕を改造した人たちですら諦めていた問題を一週間で殆ど解決しちやっただのに．．．

「でも、今日はだめ。今日くらい休んで僕と一緒に居てほしいよ．．．僕、寂しかったんだよ．．．」

「ごめんね。じゃあ、今日はずっと一緒に居てあげる。」

今日は、うんと母さんに甘えよう．．．

リーネSIDE

今日は、今までの疲れが吹き飛ぶような一日だった。

一日中ついてあげたお陰か、クロ君は安心したように眠っている。

「今日は休むって約束したんだし、私も寝ようかしら．．．」

時計を見ると、もう午後九時．．．時間って経つの早いな．．．

「って、あら？いつの間にか」

いつの間にかクロ君が私の服を掴んでいた。

そっと、手を外しても、掴もうとまた掴んでくる

「ふふ．．．まるで磁石みたい」

離してもくっついて来るS極とN極みたいに．．．

．．．  
ん？

「磁石．．．？．．．もしかしたら！」

私は、クロ君の手を外すと、大急ぎで研究室に戻った。

「クロ君の身体とナノマシンが拒絶反応を示すのは、マシンの電気信号と身体の電気信号が

違うのと体内の成分にナノマシンが対応してないからだから……」

「ということは、ナノマシンの電気信号を変換して、マシンの成分対応能力を底上げすれば……」

「やっと思つたけど、

「だめだわ……いくら電気信号を解析してもどうやって体中にあるマシンを直せばいいのよ……」

「それに、能力を底上げしてもまた故障する……」

「またループ思考に入ってしまった……」

「ナノマシンという、ミッドチルダでも未完成のものを入れたせいでこんなに苦しんでるのに……」

「いつそ、ナノマシンが身体から無くなればいいのに……」

「ん？なくなる……なくすのは無理だから……そうよ！

新しい身体にあったマシンを入れればいいのよ！今の技術なら出来る！」

「前のナノマシンは……磁石の要領で身体の一箇所に集めて取り除けば……できる！」

「私は大急ぎで、プランを練った。」

## クロヤSIDE

「つまり……僕の身体の中かのナノマシンをそっくり丸ごと入れ替えるって事？」

「うん……だから、少し手術をしないとイケないんだけど、我慢できる？」

「朝起きると、母さんが解決方法が見つかったといって、その方法について聞いた。」

そして、最終的な判断を僕に聞いてきた

「お願いします」

即答しかない。

「じゃあ、準備するわね、それまで待っていてね」

母さんはそう言うのと、部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・もしかしたら、今まで生きてきた中で一番いいかも・・・・・・・・」

それから一時間後、手術が始まった。

五ヶ月がたった。僕がこの世界に来てはや半年。

あの手術以来、身体の不調が嘘のように消え、前と変わらない生活を送っている。

ただし、改造によって得た異常な身体能力は新しいナノマシンを入れたあと

必要最低限の出力を残して二重の封印がされている。

どちらの封印も自分で解除できるが解除する必要はないし、解除する気もない。

そんなある日

「魔法かぁ・・・・・・・・」

「どうしたのクロ君？」

クロ君・・・母さんがつけた僕の呼び名。ネコみたい・・・実際ネコにもなれるけど。

「僕、魔法が使えないんだよ。」

「何で？リンカーコアはあったよ？」

「一応使えるんだよ？記憶の書の記録をロードすれば。あれはそう言

う使い方もあるんだ。

でも・・・使うと使った魔法の分の反動が来て痛いんだよ。」

「どういこと?」

僕は母さんに簡単に説明した。

まず、攻撃魔法を使うと使った後、威力の分のダメージが自分に来ること、

補助系魔法を使うと全身がマヒして動けなくなること

回復系魔法を使うと回復じゃなくダメージが自分に来ること。

「ちよつと調べてみるわ。」

母さんが頭に手を置き魔方陣を展開した。

「調べるから動かないでね」

少しの間、母さんは目を瞑っていた

そして、目を開けて結果を言った

「・・・分らないわ。でも、どうも魔力はあるのに濃度・・・かしら?それが薄いね。

・・・多分、改造されたせいで魔力が機械に邪魔されて薄まっているんだと思うわ。」

「それって、つまり・・・僕の魔力は水増しなだけってこと?」

「それは違うわ。魔力の量はクロ君自身のものだけど、濃度が薄いだけ。」

量の多いけど味が薄いスープみたいな感じかな?

「でも、これは直接的な原因じゃないわ。」

「・・・まあいいや。今僕と母さんと一緒に開発しているものが完成すれば問題ないし。」

「そうね。完成を急ぎましょう。」

## Memory 8 少女との再会

半年たって、ある重要な問題に気付いた

「ねえ母さん。この世界に『ぎむきよういく』って言うものがあるんですよ。」

「ええ。一定年齢に達した子供は必ず学校に行かなければいけないっていうものよ。」

「それがどうしたの?」

「僕、行かなくてもいいの?」

「……………」

母さんは「しまった」という顔をしていた。

「あ……………忘れてたわ……………。学年……………どうしようかしら」

学年? どういうことかな

「何で学年なんか気にするの?」

「クロ君ってさ今何歳?」

「こつちに来たのが半年前だから……………0歳と六ヶ月、

実年齢だと……………1万2413……………無理、だよな……………」

「う……………よし! 私が何とかするわ。」

何とかって一体母さんは何を考えてるんだろう……………

### 次の日

「クロ君、やったよ! お偉いさんがクロ君の戸籍、何とかするって!」

「え? 本当に? 早くない?」

早すぎると思うなあ……………今までも身辺情報を何とかするのに

苦労したんだけどなあ……………

「何の何の、『色々バラされなくなかったら言うとおりにしてね』ってお願いしたら

快くオーケーだったよ!」

震えるお偉いさん方の姿が目には浮かぶ……………

「それじゃあ、一週間後に学校ね」

「うん分かった。楽しみにしてるよ」



一週間後・・・私立聖祥大附属小学校にて

「(・・・・・・・・学校か。何回目だろう・・・・・・・・。どうか楽しく過ごせますように)」

僕はそう祈りつつ学校の中に入った

なのはSIDE

高町なのはです。今日、私たちのクラスに転校生がやってくるらしいです

「なのは、聞いた、転校生の話？」

考えていると喧嘩して仲良くなったばかりの私の友達、アリサ・バニングス、

アリサちゃんが話しかけてきました

「うん聞いたよ。どんな人なんだろう？」

「友達になれるような優しい人がいいですね」

もう一人の同じ喧嘩していた場所に居て仲良くなった友達、月村すずか・・・すずかちゃんが

楽しみにしているような声で言ってきた

「席についてください。HRを始めます」

先生が入ってきたので、私たちは自分の席に戻りました

「えー、昨日お知らせしたように、今日、転校生がやってきます。

みなさん仲良くしてくださいね。それじゃ、クロヤ君入ってきてください」

先生がそう言うと、一人の男の子が入ってきました

「えーっと、クロヤ・アイリスです。よろしくお願いします」

そう言うと、ペコリとお辞儀をしました。が、外国人なのに結構、文化慣れしてるね・・・・・・・・

「クロヤ君は・・・・・・・・高町さんの隣の席に座ってくださいね。」

「はい」

クロヤ君は、そのまま隣の席に座りました

挨拶しておかないと

「始めまして、私は高町なのは。よろしくね」

「ツ!!あ、うん。これからよろしく」

一瞬、クロヤ君は驚いたような気がしたけど、ちゃんと返事をしてくれた。

・・・仲良くなれるといいな

## Last Memory 車椅子の少女

クロヤ・・・SIDE

「ふー・・・酷い目に遭った」

授業が終わり、僕は今、屋上のベンチで寝そべっている。

少し時間も早いので屋上には誰もいない

まさか、休み時間に囲まれて質問攻めに遭うとは・・・

「まあ・・・嫌じゃないけどね・・・」

起き上がったとき、入り口から声がした。

「あれ？クロヤ君だっけ？」

「あ、高町さんと・・・そっちの二人は？」

誰だっけ・・・？

「自己紹介がまだだったわね。あたしはアリサ・バニングス」

「私は月村すずかです、よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします。ところで、三人はここに何をしに？」

「お昼を食べに。いつも私たちは屋上で食べているの」

「そっか、じゃあ、僕はお邪魔かな？」

「あ、待って」

邪魔しないように、教室に戻ろうとすると、高町さんに呼び止められた

「教室じゃ、お話できなかつたでしょ？だから、色々聞かせてほしいな」

「うくん、邪魔じゃないなら、いくらでも」

その後、高町さんはなのはって呼んでほしいとこのことでそう呼ぶようになった、

アリサさんとすずかさんも同じように下の名前で呼ぶようになった。

そんな楽しい、学校生活なんだけど……6月の後半に転校してきたのがいけなかったのか、

すぐに夏休みに入ってしまった。

別に夏休みが嫌いじゃないんだけど……恐らく全世界の子供が嫌うであろう、

夏休みの宿題の最大の難関が待っていた

「何でどこの世界の学校でも『読書感想文』があるんだよー」

そう、僕は報告書などの書類を書くのが大嫌いである。

あればっかりは何回の転生を重ねても好きになれない。

「文句言わないの。早めに片付けないとあとあと苦しいわよ。」

「そういう母さんは、どうだったの?」

「それは……私もよく最後まで残っちゃって苦しんでたわ……」

(遠い目)

うん、母さんが苦しんでたんだ、早めに終わられちゃおう!

「早めに終わらせるために急いで図書館に行って本借りてくる!」

「うん、いってらっしゃい。」

図書館にて

「どの本にしようかな……」

課題図書もいいけど……やっぱり自由図書かな

「別の本に……あれ?」

本を戻そうとしたとき、向かいの棚で本を取ろうと苦労している車椅子の女の子が見えた

(危ないな……倒れるぞあれ)

案の定倒れた。僕は倒れた女の子の所に行って起こしてあげた

「大丈夫?」

「え?あ、ありがとうな、ついでで悪いんやけど、あの本をとってくれへんか?」

「この本？はい」

本を取って渡してあげた。

しかし、この女の子の話しかたは変わってるな……訛りなのかな？

「ありがとうな。あつ、うちの名前は八神はやて。はやてでええよ。そっちの名前は？」

「僕はクロヤ・アイリス。クロヤでいいよ。ところで、はやては何をしにここへ？」

「うち、見ての通り足が不自由でな。両親はおらんし、家にいても暇なだけやから

ようここに来て本を読んでもるんや。クロヤは？」

「……あつ、ぼ、僕は、読書感想文の本を探しに来たんだ。

でも、なかなか良いのがなくて……」

このままじゃ、休みの最後の方に涙する羽目になる……

「そんなら、うちのおすすめの本を紹介してあげよか？」

「うん。お願い。それってどこにあるの？」

「ここじゃないから、案内してあげるわ」

僕は車椅子を押しながら、はやての案内に沿って目的の本の場所に行った。

「その棚の……そうそれ」

『星の王子様』？ 童話みたいなもの？」

「ちやうちやう。恋愛モノなんやけど……少し悲しいけど最後はハッピーエンドな感じの本や。

うちのには好きなんやけどな」

「恋愛モノか……うん、はやてが薦めてくれたんだしこれにしてみるよ」

僕たちは、エントランスの受付で本の貸し出しを済ませて一息ついていた。

「意外にあっさり決まっちゃったし……どうしようかな」

「なら……うちとお話せえへんか。こんな状態やから話し相手もえんくてな」

寂しいだろうな……。そんな経験は僕にもあるからよく分かる  
「もちろん、喜んで！」

「ほんとにありがとうな！そなら……何から話そうか……」

僕たちは1, 2時間ほど色々なことを話した。

といっても、僕は今まで生きてきた世界のことを織り交ぜながら  
だっただけ……

「あ……もうこんな時間だ。時間って経つの早いな……、じゃあねはやて。」

毎日は無理だけど週に3, 4回は来るよ。その時、またお話ししよう  
「うん、楽しみに待つとるよ。ほな、おおきになクロヤ！」

また一人、この世界での友達が増えました。一段と楽しくなってきたなあ……

それにしても……………  
「はやての脚に纏わり付いていた黒い魔力……………『夜天の書』  
と似てるけど違う……………」  
……………何なのだろう?」  
ちよつとした不安が僕の中に残った。

# First Memory 白と金と無限転生者の記憶

## Memory 1 新装備『MMA』前編

僕がこの世界に来て3年が経ちました

僕はいつもと変わらず楽しく暮らしています。

変わったところといえば……

まず、一年生の夏に出会ったはやてをなのは達に紹介して会っても  
らつたらすぐに打ち解けて、

今では、よく遊びに行く仲間になっているということ。

後は……僕は二年生の途中、母さんが司令を務める  
『世界次元防衛機構』の

特別隊員になったことぐらいかな

入隊した理由はたった一つ

『この世界や友達を守りたい』

母さんは最初は反対したが、僕の願いに最後には折れた。

但し、条件として僕の安全や部隊の装備強化のため、『記憶の書』を  
貸してほしいとの事。

『記憶の書』は僕を介してなおかつ、魔力をページごとに一定量与えな  
いと読めないのです、

僕も一緒に立ち会って今までの武器、デバイスの情報を探した。

僕が入隊して一年、

「おっ？クロヤ君じゃないか、リーネさんのお手伝いかい？」

『W・D・D・O』の通路を歩いていると後ろから、がっちりした体  
格の男の人に話しかけられた

「あ、新島さん。」

新島俊一さん。



僕が所属する『W・D・D・O』の行動部隊、通称『第1班』の隊長です。階級は大尉

部隊は全部で2つあって簡単に説明すると、

第1班は犯罪者の逮捕や追放、ロストロギアの回収、魔法系の危険物の処理を担当

第2班は事件後の処理やロストロギアの保管、解析や、新装備の開発を担当

といった感じで、1班は10+1（僕）11人で、2班は15人で構成されている

（但し、2班は3人オペレーターが別にいるので実質18人）

世界中から集められた人たちでWDDOは構成されているため、どの班も人種は様々

「母さんが1、2班みんなを大会議室に集めてって言われてきたんです。」

「というと、新しい武装が完成したみたいだな。分かった、すぐに部隊のみんなを呼ぶよ。」

「お願いしまーす。じゃ、僕は先に行って待ってます」

僕は新島さんと別れて大会議室に向かった。

大会議室に着いて5分ぐらい経つと、そろそろと部隊のみんなが集まってきました。

大会議室は司会者を真ん中に、ぐるりと周りを囲む階段状になっているので、

背の小さい僕でもしっかりと見ることが出来る。コロッセウムを想像すると分かりやすいかな？

みんなが集まり終えたくらいに

「はい、皆さん集まりましたか？今から、新武装の発表と解説を行いますーす！」

母さんが現れて楽しそうに宣言しました。

「今回、何とー！今までの装備一式を丸ごと変えちゃいます！」

新武装の詳細を聞かされていないみんなは、かなり驚いているみたい。

僕は、一応、開発と設計に少し関わったのでだいたい分かる。

「はい、お静かに！それで、今回の新武装は私のいた世界『ミッドチルダ』で使われている

デバイスという一種の魔法武器を参考に開発しました。

名前は『マジカルマシーナリーアーマー』略して『MMA』ですー！  
といって、母さんは携帯ほどの大きさをした四角い物が付いた腕輪を見せた。

「それでは、この武装の解説に移ります。この武装は『アーマー・オン』の掛け声で展開します。

では、私が装着します。『アーマー・オン』

すると、母さんが一瞬光に包まれた。光が収まると、アーマーを装着した母さんが出てきた。

姿の説明すると、胴体、肘から手首、肩、足全部に真っ白の装甲が装着されていて、

装甲のない肘から上、手は黒いボディースーツで覆われていて背中と足にスラスターが着いている

「この通りです。重そうに見えますがみんながいつも着ている服と殆ど変わらない重さです。

次に機能の説明に入ります。このアーマーは地上戦を得意とします。

一応、背中と足のスラスターで飛行も可能ですが、あまり速く長くは飛ばません。

しかし、地上の戦闘では一変します。

まず、足の裏の装甲に埋め込まれた『グライディング・ホイール』で自在に動けて

踝の辺りにについている『ターン・ピック』を打ち込んで急速ターンが可能です。」

そう言って、母さんが動いたり、急速ターンを見せたりしています。みんなは驚きっぱなしです。

「次に性能です。このアーマーはこの世界に存在する銃弾は効果がありません。」

また、爆発の衝撃波や破片を目に見えませんが、ある程度防ぐシールドが常に張られています。

でも、過信はしないでください。攻撃を受け続ければ壊れますし、強すぎる衝撃波や破片は

防ぎきれず貫通してしまいます。」

この辺りは、時空管理局の魔導士のバリアジャケットと同じかな？  
バリアジャケットの発想に装甲を付けた、こつちの世界の人の為のパワードスーツ

言うなれば・・・魔導装甲ってところかな？

「他に注意する点は・・・特にありません。では、次に基本武装の解説に入ります。」

説明はそろそろ終わりに近づいてきました。

## Memory 2 新装備『MMA』後編

「はい、では『MMA』の基本武装の説明に入ります。

基本武装はこの『ヘビイマシンガン』と『ブレード』です。

あと、両腕の装甲にはエネルギーシールド発生装置が組み込まれています。

これは敵の攻撃を防ぐためのものです。」

と言つて母さんは、腰の鞆に納まっている剣と弾倉が四角く、銃の側面に付いているのが特徴的な

一丁のマシンガンを見せた。

「この武装は見た目どおりの武器ですが、この世界の武器と最も違う点は、

この武装の弾丸、アーマーの動力源が『魔力』だと言うことです。動力源が魔力だと知ってみんなは驚いているようです。今日一番の驚きようです。

すると、近くにいた新島さんが手を挙げました。

「司令！質問があります。」

「んー、その呼び名、嫌なんだけどなー。まあいいや、はい。何ですか新島さん？」

「すみません、では、リーネさん。貴方は先程、動力源は魔力だと仰いましたね？」

「はい。そうですが？」

「私たち、こちらの世界はリーネさんたちの世界とは違って魔法というものがありません。

だから魔力自体がないと思うのですが？」

あー、それはよくある勘違いなんだよねー

「確かに、この世界の人たちは魔法を使えません。しかし、魔力がないというのは間違いです。

どんな生き物であっても魔力を持っています。

向こうの世界の大前提『リンカーコアは個人によって有無がある』それをこつちに来てからの研究で覆すことが出来ました。」

リンカーコアは魔力の結晶体であることが分かりました。リンカーコアの有無は、自身の魔力を結晶化できるか出来ないかの差なのです。

だから『MMA』にはみんなから出ている微弱な魔力を大幅に増幅、変換し、

コアを形成する機関が組み込まれています。」

これが、母さんが一番苦労した部分であり、最も凄い発明『リンカーコア形成機構』である。

詳しく言うと、胸の真ん中あたりにこの機構が埋め込まれていて、それに体から出る微弱な魔力を取り込み、増幅、変換し、リンカーコアを形成して

アーマー維持やエネルギーシールド、スラスタ<sup>グライディングホイル</sup>やG Hに供給される仕組み。

武装については、ブレードは柄の部分握った時、流れ込んできた魔力を刃に纏わせる

ヘビイマシンガンはトリガーを引いたときに流れる魔力を側面に付いているマガジンと見せかけた

増幅変換機構に取り込み、銃弾の形に変換して発射すると言った感じ。

ブレードについている機構は取替え不要だけど、マシンガンだけは連続使用すると

オーバーヒートを起してしまい、交換が必要になる。

交換用のは両腰に一つずつしかないため、気をつけないといけない。

ブレードに関しては普通の剣に魔力を纏わせ切れ味を上げているといった代物で、

機構がオンオフを切り替えられ、オフの状態では普通の剣だから相手を殺傷してしまう。

「と言う感じです。ちなみに、今説明したのは第1班の装備で、第2班には『MMA』じゃなくて

情報処理能力をアップさせるバイザーを支給するわ。

2班のバイザーを簡単に説明すると、バイザーを掛けると情報処理と並行して状況に対する

最も有効な方法を自動解析して提示するという感じよ。

だから、今まで見たいに情報を聞いて、分析すると言った作業が無くなって、情報を聞いて、

バイザーが自動で解析して最も効果的な手段を提示し、それを伝えるだけになります。

これで、新武装の説明は終わりです。この後、第1班はクロ君と第2班は私と、

実際に練習してみてください。それでは、1班は仮想訓練室、

2班は情報処理室に集合してください。では、解散！」

さて、僕も行こうかな……

「クロ君、ちよつと来て。」

「え、はい」

僕は母さんに呼び止められ、母さんに付いて行った。

そして、母さんの部屋に連れて行かれた。

「はい。これ、クロ君専用の『MMA』」

「あ、え？何で？」

「クロ君は半端ない量の魔力を持っているし、コアもあるから変換機だけでいいでしょ？」

「なるほど……ありがとう母さん。じゃあ、僕は訓練室に行ってくるね。」

「いつてらっしゃい。でも、訓練だからって気を抜いちゃだめだよ。」

母さんの言葉を背に、僕は訓練室に急いだ。

## Memory 3 訓練

仮想訓練室にやってくると、みんな整列して待っていた。

僕が来たのが分かると、新島さんが号令をかけた。

「気をつけー！これから新武装『MMA』の訓練を始める。講師はクロヤ曹長にお任せする」

「皆さん、揃ってますか？では、今から『MMA』の訓練を始めたいと思います。お願いします」

「お願いします!!」

さて、じゃあ、まずは……

「それでは皆さん、『MMA』を起動してください。」

「『アーマーオン!』」

みんなはキーワードを言ってMMAを装備した

「あれ？こんなヘルメットあったか？」

「というか、色が違う?」

「なんかリーネさんのと違うような……?」

ああ、説明してませんでしたね

「あ、母さんのはヘルメットを装備してなかっただけです。色は自分で変更できるので、

訓練のあとやってみてください。

このヘルメットなんですけど。原案はこの世界の戦闘機の物で、右耳側に手を添えて時計回りに回すと……このようにバイザーが降ります。」

みんなは『おおー』と言った感じで、バイザーを上げたり降ろしたりしている

「バイザーはどうやって起動するのですか?」

「バイザーは降ろした瞬間に起動します。映る映像は肉眼で見たものと全く変わりません。」

機能なんですけど、まず、視界右上の四角い枠はレーダー画面です。

青い点は味方で、今は無いですが敵は赤い点で表示されます。

それと敵をロックオンしたりすることも出来ますし、ロックオンし

た敵が視界から消えても、

視界の下に細長い矢印で表示されます。

それと、敵からの攻撃は上下左右の画面端が黄く赤の順に変わります。

黄色はロックオン、赤は攻撃が来たことを表します。とこんな感じ  
です。

ゲーム画面だと思ってくれればいいです。」

と言つても、本当に元のアイディアはゲームなんだけどね……………

「さて、ヘルメット……正式には『H<sup>ヘッド</sup> U<sup>アップ</sup> D<sup>ディスプレイ</sup>』の説明は以上です。

次は基本中の基本、移動をします。

その前に………仮想訓練室を………場所は、広い、屋外に  
セット。」

空中にコントロールパネルを呼び出して操作をすると、無機質だった  
部屋が、広い屋外になった

この仮想訓練室は、パネルを操作することによって様々な場所をホ  
ログラムで再現できる特殊な部屋で、母さんが最も苦勞したトコでも  
ある

「では、移動の説明をします。このMMAは母さんがいた世界『ミッド  
チルダ』の魔道師の飛行魔法の方法と全く同じなんです。

移動するにはイメージすることが必要です。イメージの例です  
が………車を思い出してください。アクセルを踏むと前に行きま  
すよね。

その時感じる前に行くって言う感触をイメージするというのがあ  
ります。イメージは皆さんが一番イメージしやすいものを見つけて  
ください。

じゃあ、1時間、移動の練習を各自行ってください。1時間後、テ  
ストを行います。では、始め。」

さて、じっくり待とうかな。

1時間後

「さて、皆さん集合してください。今から、テストをします。」



セットさせたコースを一周してきてください。えつと・・・場所を、レース場と障害物を組み合わせて・・・

つと、よし。では、位置について・・・よい、スタート！」

みんな一斉に走り出した・・・とはいかず、一番早い人で自転車くらい、遅いと歩くくらいの速度になっている。

うーん、これに慣れるには時間が掛かりそう。

「これから訓練漬けの毎日だなあ・・・」

## Memory 4 改造

ある日、いつものようにDGの訓練室で大分慣れてきた1班に人たちと訓練をしていると

『お知らせです。MMAの追加装備及び、改造パーツウエボンチップ『W T』と『A T』が販売されるようになりました。』

お求めの人は、開発室近くの配給スペースまで』

と言うことは、やっと自由改造が出来るようになったのかな？

「なあクロヤ君。さっきの放送ってどういうことなのだ？」

新島さんが聞いてきた。そっか、説明してないもんね。

「えっと、待機状態MMAで四角い部分があるでしょ？」

そこをスライドさせると内部が見えるはずですよ。」

「こう、か・・・おつ、開いた。中に差込口が5つ並んでるが？」

「今は2つ埋まっていますが、その差込口にさっき言っていたチップを入れると、

入れたチップの武器や追加装備が付くんですよ。」

「へえ〜。ところで、武器って5つが限界なのか？」

「一応、差込口を1つ使って増設も出来ますけど、それだと重量も増えるし消費魔力も増えるので

お勧めできませんね。」

「そっか、3つか4つが妥当だな。よっし、行くか。おーい、訓練中断。行くぞ。」

僕たちは販売スペースに向かった。

「いらっしやい、色んな武器とか追加アーマーあるから見てってねー」  
配給スペースに来ると、一番驚いたのはパーツの種類の高さである。

武器に関しては拳銃から大きなものはバスターカ、ハンドミサイルランチャーなんて物まであるし、

近接武器にはパイロバンカー、ダガー、手裏剣まであった。

追加装備に関しては、脚部小型ブースター、煙幕装置、狙撃スコー

プなどなど……

「凄いな、現代兵器から見たことのないものまである……」

「これの一部はクロヤ君の記憶を読み取って造られたものなのか？」

「はい。といつても、あるのは威力が異常に高い武器以外ですが。」

「威力が異常に高い武器？どんなものなんだ？」

「例えば、戦艦を貫通するレーザー砲とか、直径100km級のクレーターが出来る熱線照射機

という感じの武器ですね」

「それはもう戦略兵器じゃないか……。そんなものが必要にならないことを願うばかりだな。」

「……はい」

なぜ、新島さんが僕のことを知っているかというと、

母さんに一番信頼している人になら話してもいいと言ったところ、

その条件に当てはまったのが新島さんだったというわけ。

「……よし、この話は止め。第一、そんなものを使わせるような状況にならないように

俺たちが頑張ればいいだな。」

「そうですね。僕としても、今までの地獄をみんなには味あわせたくないですし。」

そんなことにならないためにも、思いつ切り改造しようかな……

その後、

「新島さん、改造したんですか？」

「ああ。ランチャーを外して、脚部小型ブースターと脱着式腰部小型バルカン砲を着けてみた。」

それと、マシンガンはバレルを短く切り落としたタイプⅡに変更したのと、

接近用にパイルバンカーをつけたな。あと、カラーは迷彩柄にした」

「へえ・取り回しを良くしつつ火力アップですか。うまいアイディアですね。色はやっぱり?」

「まあな。自衛官だったころの名残だな。」

しかし、他の隊員には武器を一新してバズーカやら二丁拳銃、大きいになるとガトリング砲まで

装備しているものいるし、凄い奴は、射撃一筋にしたのもいる。

全く、自分の魔力をいくら増幅しているとはいえ、困ったものだ。」「二応、全部の武器にはリミッターがあるので魔力がなくなって倒れる事は無いと思いますけどね」

僕には無いけど・・・というより外した。

「クロヤ君はどんなのなんだい?」

僕は・・・ランチャーを脱着式6連肩部ランチャーに変えて、

小型ブースターと肩に取り付けるブレードタイプのレーダーレンジブースターを装備、

あと増設して腕部内蔵型ガトリング砲と連結式ブレードと増えた重量を支えるために出力アップ用の

ジェネレーターを追加といったところです。」

「物凄い火力重視だな・・・でもそれだとクセが強くて上手く動けなくなるんじゃないか?」

「そこは・・・まあ慣れですね。ちなみに重量なんか初期と比べて2倍近くなってますけど、

その分基本性能は3倍くらいに跳ね上がってます」

「そうか・・・でも、無理はするなよ。」

「無理は・・・基本しないように心がけます。」

もつとも、この世界とみんなを守るためなら何だってするけど・・・

「カラーは?」

「・・・全身黒で右肩が紅色をしています。」

「………禍々しいというか不気味というか、とにかく始めに出してくる言葉は『恐怖』だな」

そうだよね………

これはベース機となった『スコープドッグ』が使われている『ギルガメス』に存在した

極悪非道の部隊『R S』のマーキングである。

だけど、僕はこのマーキングをあえて使った。

カラーには『この世界やみんなを守るためには悪魔にも死神にもなる』と言う意味を込めている。

そして同時に、これは僕の決意の現れである。

## O t h e M e m o r y M M A について

マジカルマシーナリーアーマ (MMA)

リーネ・アイリスがクロヤの持っていた『記憶の書』の中の記録を読み取って開発した魔導装甲

読み取った記録は

『アストラギウス銀河』呼ばれる銀河で『ギルガメス』と『バララント』によって行われていた

『百年戦争』と呼ばれる戦争の末期に開発された

アーマードトルーパー

A T という人型兵器の一つで『ギルガメス』の方の主力AT

『ATM—09—ST スコープドッグ』(原作名 装甲騎兵ボトムズ)

別次元の地球で開発された『M S』モビルスーツと呼ばれる人型兵器(陣営問わず)

(原作名 機動戦士ガンダムシリーズ)

であり、スコープドッグをベースにしてMSの武器、推進機器類を搭載させ、

魔導士のバリアジャケットの発想を組み合わせた

まさに世界を超えたハイブリットパワードスーツである。(原作の詳しい情報はウィキで)

ヘッドマウントディスプレイ

H M Dはこちらの地球の戦闘機のパイロットヘルメットを元にしており

ヘルメット内部の表示は分かりやすさ、覚えやすさを考慮しTVゲームの表示を採用している。

スコープドッグの特徴的機能であるG

グライディングホイール

Hはベース機とは異なり、

使用時の場所を選ばない(地上のみ)が、飛行魔法を行うような感覚的技術が

必要となってしまう、魔法を行使できないWDDO隊員には扱いが難しく、

相当の訓練必要になってしまった

平均速度は時速65〜80km、最大速度は時速110km  
魔力消費による戦闘不能状態の回避のために『セーフティロック』がある。

装備者の魔力が危険域まで消費されると発動、MMAを強制解除する。

#### 『ウェポンチップ WT』

・MMAの強化チップの一つで、武装データが入っている

MMAの待機状態である腕輪の時、四角い部分を開けて、中にある差込口に差し込むと

チップに入っている武装データがMMAにインストールされて使用可能にある。

チップを抜き取るとMMAにインストールされた武装データは消える。

インストールする武装によって消費される魔力が違うため、自身の魔力に合った武装を選ばないと

MMAの魔力消費による気絶や怪我を防ぐ『セーフティロック』が発動して、

MMAが解除されてしまうため、注意が必要。

#### 『アーマーチップ AT』

・MMAの強化チップの一つで、MMAに付加機能を与えるデータが入っている

WTと同じように差込口に差し込むと付加機能を与える装備のデータがインストールされる。

使用方法はWTと変わらないが、MMAの性能や機能に作用するものなので、

インストールするデータによって自身のMMAの特性が変わってしまうため、

慎重に選んで装備しないといけない

## 基本武装

### 『ヘビイマシンガン』

・ベース機『スコープドッグ』の武装の一つ。

四角いマガジン（MMAでは変換機）が側面に付いているのが特徴  
銃口の下にグレネードランチャーが付いている。

MMAでは銃弾、グレネードは魔力で精製される。

ストックとバレルを切り詰め、取り回しを良くした『ヘビイマシンガンII』もある

（元の名前はヘビイマシンガン改）

### 『ブレード』

・MSの中でも、陸戦型機に多く採用されていた『ヒートソード』の  
MMA版

刃に魔力を纏わせることで切れ味を格段に上昇させることができる。

機構のオンオフで実体剣としての使用も可能

基本的にブレードの機構オフ状態を除いて、常時非殺傷設定がされている。

しかし、クロヤのみ設定変更が出来る。



## Memory 5 夢の狂気と謎の念話

休日明けの前日の夜、僕は妙な夢を見た。

「(は? 何ここ・・・こんな世界は来たことが無い・・・どこ?)」

見渡す限り火の海。始めに思いついたのは、一世紀近く戦争をしてきた世界だったが

そことは雰囲気が違う。

かといって隕石を人為的に落とすわけでもなさそう。

「(どっちかという・・・これは・・・次元崩壊によるものが一番近いな)」

するとその火の海の中に誰か立っているのに気がついた。

シルエツトからして男の子・・・だろうか? ただ、見るからに異常だった。何故なら

「アハハハハハハハハハハ！ 戦え!! 憎め！ 殺せ！ 壊せ！ 戦いこそ俺の全て！

ハハハハハハハハハハツ!!!」

嗤っていた。それだけでない、姿がやけに

「(僕に似ている。違いは目の色と髪の色と身体に入った紅いラインくらいか・・・)」

でも、あれは僕じゃない。そう断言できる。

確かに一時期、転生のたびに戦火に巻き込まれ戦わせられるのに自棄になっていたこともあったが

あそこまで狂ってはいなかった。

すると、嗤っていた少年が、嗤い疲れたのか、嗤うのをやめた。

「アハハハハハ・・・ハア・・・。これ以上は大きくならなそう

だな．．．なら、

もうこんな世界に用は無い。」

と言つて、ニヤリと笑つた

「今度はどの世界を壊そうかな．．．．．」

と言つて、身体が光り、消えた。だが、僕は見逃さなかつた。

なぜなら

「(僕を．．．．．見ていた．．．．．!）」

消える一瞬だけだが、はつきりと僕を見ていた!

それだけじゃない、

「(あの光は．．．．．それに、あの狂つた考え．．．まさか．．．．．)」

あいつ．．．．．なのか?

僕の心に、不安の種が増えた。

でも、どんなやつが来ても、僕はこの世界を守る。

と言う決意だけは忘れないように心に刻んだ。

次の日、夢のせいであまりよく眠れなかつた。

でも、昨日の夢のことははつきりと覚えている。

母さんと一緒に朝食を食べている時、おもむろに聞いてみた。

「ねえ、母さん。ここ最近、この町とか世界に変わったことつてなかつた?」

「え? そうね．．．．．大きな変化ないけど．．．この町は昨日のあ

たりから状態が変わわ。」

「!! どんな?」

「大気中の魔力濃度が少し濃くなって不安定なの。微弱だから大事に

はならないと思うけど。」

普段なら気にしないけど今はとても心配だ。

ますます、昨日の夢が現実になっていく気がする。

「どうしたの?」

「．．．．．実は．．．．．」

僕は母さんに昨日の夢(かどうかも怪しいが)を話した。

母さんは難しい顔をして何かを考えているようだった。

「．．．．．警戒レベルを引き上げた方が良くないわ。」

「．．．．．警戒レベルを引き上げた方が良くないわ。」

とにかく、何かあれば連絡するけど、出来るだけ私や1，2班の人たちで処理するから

クロ君はなるべくいつも通りの生活をしてね。」

「……うん。」

話を止め、ふと、時計を見たら

「あつ、しまった！こんな時間！遅刻しちゃう………いつてきます！」

「気をつけてね！いつてらっしやい」

僕は学校に急いだ。

「はあ、はあ、……ま……間に合った………」

全力疾走して何とか遅刻ギリギリの時間に教室に入ることが出来た。

「大丈夫ですか？すごい汗ですけど………」

「珍しいわね。あんたがギリギリの時間に来るなんて。」

「週末いろいろあつて疲れたんだ………しかも昨日の夜、変な夢を見て寝不足なんだよ………」

週末の色々は……W・D・D・Oことだけど、秘守義務があるため話せない。

夢は母さんに説明したあのこと。

「ど、どんな夢だったの!?!」

なのはが驚いたように聞いてきた。

「変な内容だったんだけど……あんまり覚えてなくて。なのはも何か変な夢でも見たの？」

「えっ？う、うん。わたしも変な夢を見ちゃつて………」  
「……よくないな。魔法要素を持つなのはにまで同じような夢が見えているのならば、」

本格的に不味い。違う夢だと思いたい、願いたい。

その後、授業が始まったが、なのははどうも上の空だったり、ぼん

やりとしていることが多い

時折、周りをきよろきよろとすることもあった。

やっぱり、なのも聞こえているみたい。

《—————》

断続的に聞こえるこの念話が……

「誰？この声の主は？何のために話しているんだ？」

不安の影が大きくなってきた。

そんな状態だったので、僕となのはは授業があまり耳に入っておらず、

先生に立たされることになったのは言うまでもない。

## Memory 6 非日常への一歩

帰り道、僕はなのは、すずか、アリサたちと一緒に話しながら歩いていた。

「なのはちゃん。具合でも悪いのですか？」

「え？」

「授業中あれだけボーツツとしていたらこっちだって心配になるわよ。」

今日はどうしちゃったのよ？」

「ちよつと、夢のことが気になっちゃって……クロヤ君も変な夢見たって言うし……」

「気にしない方がいいよ。変な夢は見たけどなのはと同じ夢なわけないんだから。」

「……うん。」

ここで会話を打ち切って歩いていると、公園に差し掛かったとき

《—————》

また聞こえた、謎の幻聴が。

「あれ？」

なのにも気付いたみたいで、きよろきよると周りを見回していた。

「どうしたの？」

「なんか聞こえたみたいだけど……空耳みたい」

「そう。ならいいけど。」

また歩き始めたとき、

《—————》

また聞こえた。

「……やっぱり何か聞こえる！」

「え？ちよ、なのは!？」

アリスが驚いて言うと、なのはは公園の中林の中に入っていた。  
「待ちなさいーい！」

「なのはちゃん！」

「追おう。何か様子が変だ。」

僕たちもなのはの後を追って林の中に入っていた。

林の中を探し回ること数分。なのはを見つけた。

なのはは傷ついてぐったりとしている生き物を抱えていた。

「なのは？その子は……？？」

アリスがなのはが抱えている動物を指差して聞いた。

「この子、夢の中で会ったの。朝、夢の話で出てきたのはこの子なの。」

「なんていう動物なの、その子？」

「これは……」

「フェレットかな？」

「フェレット？」

「フェレットっていうのはイタチの仲間の小型肉食動物なんだ。」

最近はずっととかで人気があるらしいんだけど、僕も本物は初めて見るよ。」

「といっても、この知識は図書館の図鑑からの引用だけど。」

「あ……この子怪我してる。どうしよう……」

「確かこの近くに動物病院があったはず……」

「あ、私知ってるよー！」

「すずかのナビに従って、僕たちは動物病院に急いだ。」

病院にて

「怪我の手当ては終わったわ。見た目より衰弱が激しいけど数日すれば元気になるわ。」

「ありがとうございます。」

病院で事情を説明して、フェレットを預けて手当てをしてもらった。  
た。

「どうやら命に別状は無いらしく、僕たちは胸をなでおろした。」

「よかったあ〜」

「先生、それでこのフェレットなんですけど……誰かのペットなんですか?」

アリサの質問に、獣医の先生は困ったような顔をした。

「それがね、見たことないの、こんな種類のフェレット。」

それに、この子が首に付けているのは宝石かしら?」

先生がフェレット?が首から下げている紅い宝石に手を伸ばしたとき、

フェレットがゆっくりと目を開けた。

混乱しているのか周りをゆっくりと見回すと、

「見てる……」

さすががいうように、なのはをじっと見つめていた。

なのはは戸惑いつつも恐る恐る手を伸ばした。すると、フェレットがなのはの指を舐めた。

それを見たなのは喜んでいた。でも、そのフェレットはまた気を失って倒れてしまった。

「とりあえず、数日病院で預かるからまた明日、見に来てね。」

「はい。ありがとうございます。」

病院の時計を見ると結構遅い時間だったので、僕たちはそれぞれの家に帰った。

「何だろう、この胸のざわつきは?……良くないことが起きそう  
だ。」

しかし、あのフェレット……やけに魔力を持っていたな。

……大事にならなければいいけど……」

後に、この胸のざわつきが現実になることを僕は、この時、微塵も思っていないかった。

## Memory 7 第1班、出動!

家に帰ると、誰も居なかった。

リビングにあるテーブルに置手紙が置いてあり、母さんはWDDOの基地にいるらしい。

夕飯を食べて、戸締りをする、玄関で靴を履き、壁に手をやった。すると、壁の一部がスライドし、中からボタンのついたコントロールパネルが出てきた。

僕はいくつか操作して、最後にOKと書かれたボタンを押すと、足元に魔方阵が現れた。

これはWDDOへの移動手段で、基地の転送室に繋がっている。そして僕はまぶしい光に包まれると、基地に転送された。

WDDOにて

基地に着くと、すぐに自分用の部屋に行き、MMAを付けて、訓練室に向かった。

いくらMMAが優秀でも、使う人が下手では意味がない。毎日の訓練は欠かせない。

「お、クロヤ君じゃないか。今日も訓練かい？」

「はい。そういう新島さんは、訓練上がりみたいですね。」

訓練室でばったり新島さんと会った。

新島さんは汗を流していたので、相当訓練していたみたいだ。

「今日は他の隊員たちと一緒にみっちり訓練したからな。」

「そうだ、良ければ、俺と一戦してみないか？」

「うーん、遠慮します。今日はゆっくり休んでください。」

新島さんは「本人に断られたんじゃないか」といって訓練室から出て行った。

その後が続いて、他の隊員の人たちも出て行った。みんな揃って汗だくだった。

「さて、始めようか。」



僕は、MMAを起動し、仮想敵機をセットした

相手は……昨日の僕だ。昨日記録した僕自身のデータで作  
り出された僕が敵だ。

『自分を知り、相手を知れ。その逆もまた然り』って、誰かが言ってい  
たな……。

「さっさと、始めるか。よろしく『僕』」

銃を構え、模擬戦が始まった。

しかし、始まって少なくとも10分は経っていないころ、

突然、緊急アラートが鳴り響いた。

『緊急事態発生！緊急事態発生！海鳴市市街地において大きな魔力反  
応をキャッチ！』

今回は市街地及び狭い路地のため重火器の使用を禁止する！

よって、次のナンバーの1斑メンバーはMMAを装備し、至急転送  
室へ向かえ！

『ナンバー01』『ナンバー03』『ナンバー04』『ナンバー08』ナ  
ンバー00』

『ナンバー00』

繰り返す『ナンバー01』『ナンバー03』『ナンバー04』『ナンバー

08』『ナンバー00』

はMMAを装備し、至急転送室へ向かえ！』

ここでは出勤時、部隊員の人たちは名前で呼び合わず、ナンバーで  
呼び合うことになっている。

そして、MMAにも左胸の所に必ず自分のナンバーが記されてい  
る。

『ナンバー00』それが僕のナンバー。ちなみに新島さんは『ナンバ  
ー01』

「……急ごう！」

転送室に向かっていると、忘れ物に気付き、自分の部屋に戻った。  
「これは持っていないか……」

僕は『記憶の書』を腰の後ろについているホルダーに装着し大急ぎ  
で向かった。

「すみません！ナンバー00、ただいま到着しました！」

「急げ！転送するぞ！」

新島さんが仕事モードに切り替わっていた。

いつもの優しさが消え、厳しい隊長の顔になっていた。

『こちら司令部、ナンバー01、現場に最も近い\*\*\*ゲートへ転送せよ。』

「了解！転送する！着いたらオペレーション頼む！」

『了解。グッドラック。隊の全員帰還を願う。』

通信が終わると、眩しい光に包まれ転送された……………

転送先\*\*\*ゲートにて

「…………よし転送完了！出撃！」

「了解！」

転送が終了すると同時にGグライディングホイールHを回転させ、猛スピードで走っていく。

『こちら司令部。オペレートを開始します。現在、分かっていることを伝えます。』

目標は、高濃度の魔力生命体の可能性が高いです。

現在、そこから700m離れた通りで破壊活動をしています。至急、制圧してください。

あ、訂正します。もう一つ小さい魔力反応と……民間人!?

あつ、すみません。3つの反応を感知しました。

どうやら、小さい反応の方と民間人は高濃度の魔力生命体の方に襲われている模様です。

至急、魔力生命体を制圧、小さい反応の方と民間人を救出してください。』

「了解！聞いたか！民間人が巻き込まれたそうだ！小さい反応のと民間人の救助を最優先しろ！」

二手に分かれる。03、04、08は迂回して攻撃し魔力生命体の気を逸らせ！

俺と00は小さい反応の方と民間人を救助する！」

「了解！」」

「03、04、08迂回します！」

三人が別の道に入って、僕とにいじ・・・01の二人だけになった。  
「気をつけろ・・・・・目の前の通りにいるぞ・・・・・」

その時、僕は目を疑った、目の前に巻き込まれたらしい小さい反応のと民間人がいた。

でも、それは

「なのはとあのフェレット!？」

だったからだ。

しかも、大きな反応・・・・・魔力生命体であろう黒く大きな怪物が  
今まさに、

なのはたちに襲い掛かろうとしていたからだ

無意識だった。

僕は無意識のうちに、小型ブースターを使って、なのはたちの間に  
割って入り、

「彼女に触れるなああつ！シールド最大出力！」

腕のシールド発生器の出力を最大にし、怪物の攻撃を防ぎ、

「食らええええええええ！」

バババババツ！

僕の魔力光である薄い緑の銃弾が怪物を襲った。

「え？・え？」

なのはは何が起こったのかわからず、混乱していた。

## Memory 8 なのはとフェレット

なのはSIDE

病院を出て、家に帰って、お母さんたちに事情を説明して拾ったフェレットを

元の飼い主が見つかるまで預かりたいと言ったところ、私が見つかり面倒を見るのならという条件付でならいいということになりました。

早速、アリサちゃんとすぐかちゃんにメールで連絡したけど、

「あ・・・クロヤ君携帯持ってなかったんだっけ？どうしよう・・・」  
クロヤ君のお家に電話を掛けてみたけど誰も出てきませんでした。  
もう寝ちゃったのかな？

「明日、学校でお話しよう。」

夜が更け、寝ようとしていたとき、またあの夢のときと同じ変な感覚が襲ってきました。

「(な、なに!?!.....  
何か聞こえる)」

落ちて着いて、耳を澄ますと公園で聞いたあの声が聞こえてきた。

『僕の声が聞こえますか？聞こえる人はいませんか？いたら力を貸してください』

えっ.....あのフェレットさんが喋ってるの.....  
？

『お願いします！早く僕の所に.....はや.....く.....き.....  
け.....』

途中から、声が聞こえにくくなり最後には聞こえなくなっていました。

すると、全身の力が抜けベットに倒れてしまった。

「(さっきの声、助けを求めてた.....行かなくちゃ.....)」

私はこっそり家を抜け出し、病院へ向かった。

病院に向かって暗い夜道を走り、病院の近くまで来たとき、またあの変な感覚が襲ってきた。

「ま、また……」

正直、気持ちいいものじゃなく、私は耳を塞いで目を瞑ってしまった。

目を開けたとき、周りの景色が変わり、病院の方から何かの唸り声のようなものと、

何かが壊れる音が聞こえてきた。

病院に着くと、私は言葉を失いました。窓からあのフェレットが飛び出してきました。

そして、黒いよく分からないものに襲われて、こっちに飛んできたのを何とかキャッチしました。

「来て……」

「えっ？ええっ!?しゃ、喋った!?」

びっくりして落としそうになったけど、抱えなおして、見つからないうちに走り出した。

変な景色の中、私はずっと走っていたけど、頭の中は混乱していてもう何がなんだか分からない状態でした。

「さっきの怪物は何!?この変な景色は何!?どうして君が襲われるの!?」

「理由は、後で話すから、お願い、僕に力を貸して、君には素質がある。」  
「素質?」

「僕はある探し物ために、異世界からやってきました。」

でも、僕一人の力じゃ想いを遂げることが出来ないかもしれない。だから……素質を持つ人に協力してもらいたくて……」

走っていると、突然、フェレットさんが飛び降りた。

「お願いです、お礼は必ずしますから、僕の力を君に使ってほしいんです、魔法の力を!」

「魔法の力……?それって」

なに、と言おうとしたとき、さっきの怪物が空を飛んできて上から襲ってきた。

私はフェレットさんを抱え電柱の影に隠れた。

「魔法って・・・どうすればいいの!?!」

「これを!」

そう言っただけで渡してきたのは、首から掛けていた紅い宝石でした。手に取ると不思議な感覚が伝わってきました。

「それを手にして、心を澄まして僕の言うことを後に続いて言っ!」

「う、うん!・・・あ!」

すると、怪物が私たちがいる電柱に向かって突進してきました。

何とか避けられたけど、さっきまでいた電柱が簡単に倒されてしま

い、その光景を見て私は体が凍りついたように動かなくなっていました。

「あ・・・ああ・・・」

そして、チャンスと言わんばかりに怪物が襲い掛かってきた。

私、死んじゃうの?

来るであろう衝撃に目を瞑ったとき、

「彼女に触れるなああっ! シールド最大出力!」

誰かの声が聞こえ、目を開けると、

怪物よりも黒い右肩の紅い鎧を着込んだ誰かが間に割って入って

怪物の攻撃を受け止めて、

「食らえええええええ!」

持つていた銃で怪物を撃ち抜いていた。

「え?..え?」

私はさらに状況が分からなくなり、うまく言葉が言えませんでした。

怪物を撃ったその人はこっちを振り向いた。

「大丈夫? 怪我していない?」

ヘルメットで顔が隠れて表情は見えないけど、聞き覚えのあるとても優しい声だった。

鎧の色で始めは怖い人かと思ったけど、全然違う。

「00！無事か!？」

「はい。巻き込まれた二名と合流したところです。」

すると、今度は同じような緑の鎧を来た別の人が来た。

「00は二人を安全なところへ！03、04、08が攻撃を始めた。俺も加勢する」

すると、他にも同じような鎧の人たちがさっきの怪物と戦っていた。

「二人ともこつちへ！」

「待って！あの怪物は……ジュエルシード・ロストロギアから生まれたものなんです！」

「本当なのか!?まずい……あれがロストロギアならこちらの攻撃は無駄だ。」

「どうすればいいんだ?」

「……………少しの間、あの怪物の気を逸らしてください。」

「……………分かった。詳しくは今は聞かない。頼む！」

そう言うと、00さんは怪物に向かっていった。

「ごめん。大分、話が逸れちゃったけど、さっきも言ったとおり、

僕が今から言う言葉を後に続いて言って。」

「うん！」

続く……………

## Memory 9 白い魔導師の少女

あのフェレットが思っている手段……

恐らく、稀に見るほど高い魔導師としての才能を持つなのはに魔導師になってもらうこと。

僕としては……なってほしくないが、今はそれ以外に方法が無い。ジュエルシードを破壊するのは、僕にとつては簡単だが、

破壊したときの被害は僕が身をもって知っている。

「考えている暇は無い。今はやるべきことをするだけだ……」

余計な考えを振り払い、僕も戦線に参加した。

ドオオオオオオッ!!

戦線に参加したとき、化け物が攻撃を受け飛び散っていた。

「やった!」

「倒したのか?」

01たちが倒したと思ったとき、オペレーターからの声が一気に気を引き締め直させた

『気を付けてください! 反応が消失していません!……復活します!』

すると突然、飛び散った化け物の破片が集まり、再び元の姿に戻ってしまった。

「じよ……冗談だろ……」

03が疲れ切った声で言った。

「はあ……はあ……く……くそ……倒す前に……こつちがバテちまう……」

「ぜえ……ぜえ……だが……ぜえ……食い止めないと……被害が……」

04、08も息絶え絶えだった。

「あ……あきらめるな……今までの訓練を……思い出せ……それに……このようなことを……」

……そ、想定して人々を守るのが……お……俺たちがいる



理由だろうが……！」

O1もみんなを鼓舞するが、自身もフラフラであり喋るのもつらそうだった。

魔力は使う人の精神状態に影響されやすい。ここまでみんなの消費が激しいのは、

初めて魔力生命体と戦うことへの緊張、やっとの思いで倒したのに復活したという絶望感、

周りに被害が増えるということへの焦りがあるからだと思う。

「みんな、僕が相手をする！下がって、出来るだけでいいから援護お願い！」

僕はみんなを下がらせ、化け物の前に出た。

「何としてでも、コイツを食い止める……！」

バババババババツ！

化け物の横を高速で横切りながらヘビイマシンガンを連射し、

怪物の気をこちらに向けさせた。

「まだまだ！」

怪物の横を過ぎると、ターンピックを打ち込み反転し、マシンガンを片手で持ち、

空いた腕を前に突き出した。

すると、ガチャン、と腕の装甲がスライドして中から小型ガトリング砲が顔を出し、

ガガガガガガガガガガガガガガガッ！！

マシンガンとガトリング砲の二重攻撃を浴びせた。

「グガアアアアアアアアアアアアアアッ！」

化け物に攻撃が当たり、化け物が苦し紛れに身体の一部を變形させ鞭のように叩きつけてきた

「甘い！」

両腰に付いている二刀連結式ブレード『トライブレード』に切り替え、鞭を切り落とした

そのまま、ブースターを使って急速接近し切りかかり、化け物に大

量の切り傷を負わせる

「ガ……ガアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！」

しかし、化け物もただやられているだけでなく、鞭を何本も出現させ振るってきた

「ぐっ……ちいっ！」

そのうちの一本を食らってしまい、一度距離をとったとき、

パパパパパパパパツ！！

O1たちが散開して近くの建物の上からや僕がしたように化け物の横を横切りながら、

威力が落ちてしまっているが、それぞれ撃ちながら援護してくれた。

その時オペレーターから緊急の報告が入った

『こ、後方に新たな魔力反応！この反応は一体!?現在交戦中の反応より数倍以上大きいです！』

化け物越しに後ろを見ると、

通っている小学校の服を模して生成したであろうバリアジャケットを纏った

魔導師姿のなののがいた。

## Memory 10 初めての魔法

なのはSIDE

「何者なの……あの人たち……」

私は自然と疑問を口にしていった。

明らかにあの人たちは、警察官とか軍人さんなんかじゃない。

「分からない……でも、今はあの人たちを信じる……」

今のうちに、僕がさつき言ったとおり、今から言うことを後に続いて言うて！」

「う、うん」

「我、使命を受けし者なり」

「わ、我、使命を受けし者なり」

「契約の元、その力を解き放て」

「え、えっと、契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして不屈の心は……」

「そして不屈の心は……」

「この胸に！」

「この手に魔法を！レイジングハート、セットアップ!!」

すると、宝石から光が出てきて空に光の柱ができた

「すごい……なんて魔力……あつ、落ち着いて！」

今度は君の魔法を制御する杖の形と君を守る強い服をイメージして！」

「ええっ！そ、そんなこと急に言われても、えーっと……」

強い服……よし、これなら！

頭の中でイメージを思い浮かべると、桜色の光が私を包んだ……

目を開けて自分の姿をみるとイメージしたとおりの姿になっていた。

「よし！成功！」

喜んでいると、さつきまで00さんと戦っていた化け物がこつちに  
向かって突進してきた

「ッ!!」

思わず目を瞑って杖・・・レイジングハートを前に突き出した。

『Protection』

レイジングハートから声が聞こえて、目を開けると、

桜色のバリアみたいなものに化け物がぶつかって飛び散っていた。

飛び散った破片は近くの塀とか道に穴を開けてしまった。

00さんと01さんたちはみんな、腕を前に出して私と同じように  
バリアを張っていて

怪我はしていなかったみたい。

「僕らの魔法は、発動体に組み込んだプログラムと呼ばれる方式です。

そして、その方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギー  
ギーです。

そしてあれは、忌まわしき力の元に生み出された思念体。

あれを止めるには封印して元の姿に戻さなきゃいけないんです」

「えっと、よく分からないんだけど、どうしたらいいの?」

「さっきのような攻撃、防御などの基本的な魔法は心で念じるだけで  
発動しますが、

もっと威力のある魔法は呪文が必要になります。」

「呪文?でも、私、さつきみたいな呪文知らないよ?」

「心を澄まして。心に浮かぶ呪文があるはずです。その呪文を言うん  
です。」

フェレットさんの言うとおり、心を澄まして呪文を思い浮かべてい  
ると

化け物がまた集まって、こつち向かってきた。

「邪魔は・・・させない!」

すると、00さんが化け物の身体から出ている触手みたいな物を掴  
んで、

「うおおおおりやあああああああああああああ!!」

後ろに振りかぶって、地面に叩きつけた。

私は、口をポカンと開けて、その光景を見ていた。

「今のうちに早く!」

00さんの声ではっ、として呪文を思い浮かべる。

「リリカル・マジカル・・・封印すべきは忌まわしき器! ジュエルシード封印!」

『Sealing Mode Setup』

呪文を言うとレイジングハートの先端の形が変わって、U字型になった。

そして、その先端から桜色の翼が出てきた。さらに、同じ桜色のリボンが出てきて巻きついた。

『Stand By Ready』

「ジュエルシード、シリアル21、封印!」

『Sealing』

すると、さらにリボンが出てきて、化け物を包み込んだ。

そして、青いひし形の宝石が出てきた。

「それがジュエルシードです。レイジングハートで触れてください。」

「う、うん」

レイジングハートでジュエルシードに触ると、ジュエルシードは先端の中に入って消えた。

それと同時に、服装も元に戻った。

「お、終わったの?」

「はい・・・ありがとうございます・・・お陰で・・・被害・・・は・・・」

そう言っつて、フェレットさんはまた気絶してしまいました。

「・・・高町なのはさん」

声がして、振り返ると00さんと01さんたちが立っていました。

あれ? 私、名前を教えたっけ?

「我々も感謝します。あなたのお陰で被害も最小限で食い止められました。」

しかし、少し事情を聞かせて貰います。我々はこれで撤退しますが、

00が残って事情を聞きますので、あったことを全て話してください。

それでは。00、後を頼む」

「了解」

01さんたちはそう言って、走り去っていった。

そして、私と00さんと気絶したままのフレットさんが残された……

## Memory 1 事情聴取

戦闘が終わり、01たちが撤退したのでここにはなのはと僕、  
気絶しているフェレットしかない。

遠くからはサイレンの音が聞こえてくる。

恐らくここでの戦闘を聞きつけ警察が動いたのだろう。

「あわわ……どうしよう……」

「落ち着いて。オペレーター、警察が来ているがどうすればいい？」

『そちらに2班を送ります。彼らに任せてください。』

00は事情を聞いて彼女を家まで護衛してください。」

「了解。では、なのはさん。ここでは話しにくいのでどこか話が出る所に行きましょう。」

……この近くの公園でいいかな？とりあえず、そこ

まで行こう。ちよつと失礼！」

「え？あ、きやつ！」

腕を背中と膝下に入れて抱える、いわゆるお姫様抱っこでなのはを  
持ち上げた。

「うええええ!? な、ななにやにお!?!」

「すみません。時間も遅いし、なのはさんに極度の疲労が見えたので  
最も効率がいいこの方法を、

少しの間だけ我慢してください。しっかり掴まってください。飛  
ばしますので」

「は、はいー」

なのはがしっかりと掴まったのを確認すると、ブースターを点火し近  
くの公園に急いだ。

公園にて

公園に着くと、近くのベンチに真っ赤なのはを降ろした。

「う……ううん」

しばらくすると気絶していたフェレットが目を覚まし、事情を聞け

る状態になったので

事情を聞かせてもらおうことにした

「まずは、自己紹介かな。僕はこの世界の人々を次元犯罪や次元災害から守る組織、

世界次元防衛機構、WDDOに所属するナンバー00。ゼロゼロ

呼びにくいなら、そうだな……………  
オーツって呼んでくれていいよ。」

「私は、高町なのはです。」

「僕は、ユーノ。ユーノ・スクライアです。スクライアは部族名なのでユーノが名前です。」

これでお互いのことが分かった。

でも少し悲しいね。なのはとは友人なのに名乗れないなんて……………

「なのはさんにユーノ君でいいかな?では質問するよ。」

まず、なのはさんは何故、あの場にいたの?」

「えつと、家にいたらこの子……………ユーノ君の声が聞こえたからです……………ガチガチに緊張しちゃってるよ、なのは。何か嫌だな。

よし、情報を少し教えてあげよう。

「敬語はいいよ。僕はなのはさんより年下だし。」

「えええ!?年下なの!」

「うん。だから気軽に話してくれればいいよ……………ちよつと話が逸れたね。」

じゃあ、ユーノ君、何でなのはさんに念話を?」

「えつと、実は……………」

ユーノ君はこれまでの経緯を話してくれた。

「なるほど、つまりジュエルシードの輸送中に事故にあつて、ジュエルシードがこの町に散らばってしまったと、

そして自分一人じゃジュエルシードが暴走しても対処できないから、

この世界で魔法の適正がある人に手伝ってもらおうと、

そして、それがなのはさんだったっていうわけ?」



「はい……………。すみません、なのはさんを巻き込んでしまつて……………」

「なのはでいいよ。それに別に私、気にしてないから。」

ユーノ君が嘘を言っている可能性があったが、ここは1万2000年余りの経験。

嘘を言っているようには感じられなかった。

「で、なのはさんとしてはどうしたいの?」

「私は…………ユーノ君のお手伝いをしたい。せつかく魔法を使えるようになつたんだもん、

誰かの役に立ちたい……………」

「……………。その気持ちに迷いは無いね?」

「うん」

そつか…………。なら、言うことやすることは一つ。

「うん。分かつた。じゃ、決まり。僕たち、WDDOはジュエルシード集めに全面協力する。」

「え!?協力してくれるの(ですか)!?」

ユーノ君となのはが驚いて聞いてきた。

「さつきも言つたとおり、僕たちはこの世界の人々を次元犯罪や次元災害から守るのが仕事。」

今回のようなことのためにいるんだ、

それに…………。女の子一人にそんな重荷を背負わせるわけにはいかないよ。」

「にや!」

なのはは変な声を出して顔を真っ赤にしてみました。

「では、これで質問は終わり。なのはさん、家の近くまで送るよ。」

僕の姿を見られると不味いんでね。」

そう言つて、またお姫様抱っこでなのはを持ち上げ、走り出した。

なのはは終始真っ赤だったけど…………。

## Memory 12 今後の方針

基地に戻ると新島さんたちが転送室で待っていた。

「ナンバー00、ただいま帰還しました。」

「了解……つと、これで全員帰還だな。オペレーター、現時刻をもつて作戦を終了する。」

『了解しました。ご苦労さまです。なお、司令が（ごほん）……』

しばしの沈黙が続き

『……リーネさんが今後の方針を言われるそうなのでそのまま聞いてください』

観念したような声が基地のスピーカーから聞こえてきた。

思っただけで、母さん……フレンドリーすぎない？

『さて、今後の方針を言います。』

1班のみんなは00の通信を聞いていたから知っていると思うんだけど、説明するわね。

今後、この町に散らばったジュエルシードを高町なのはさんたちと協力して

搜索、封印作業を行います。搜索は明日から、二人1チームで搜索すること。

詳しい説明は明日するから今日は休んで頂戴。じゃ、解散』

「ということだそうだ。それじゃ、今日はさっさと休んで明日に備えるぞ。」

新島さんの言葉を聞いた途端、どつと疲れがやってきた。

今日は早く帰って寝よう……

次の日

僕は眠い目を擦りながら学校に登校した。

「おはよ……って、やけに眠そうね。」

「夜更かしでもしたのですか？」

席に着くと、先に着ていたアリサとすずかとなのはがやってきて話しかけてきた。

「昨日の夜にやっていたテレビが面白くて……つい見すぎちゃってさ……ふああ」

「まあ、よくあるわね……あたしも前に同じことあったわ……」

「あつ、それより昨日の夜の事故聞いた？」

「夜の事故？」

「あのフェレットさんを預けた病院の前の道路で車の事故があったらしくて……」

「塀とか近くの電柱とかも倒れちゃって酷かったんだって」

「事故のことを聞いて、なのはがピクリと反応していた。」

「まあ、その事故の当事者が化け物で、それを撃退したなんて言える訳も無いよね……」

「へえ……あのフェレット、大丈夫かな？」

「分からない。建物もかなり酷く壊れてたって……」

「あ、あの……そのね……。そのフェレットのことなんだけど……」

「なのはが気まずそうに、口を開いて昨日の夜、つまり、僕と別れた後のことを説明した。」

「へー、じゃあ今はなのはの家にいるんだ」

「でもすごい偶然だね。逃げ出してきたあの子とたまたま会うなんて」

「うん……。それでね、あのフェレット、どうも誰かのペットじゃないみたい。」

「それで、新しい飼い主が決まるまで家で預かることになったの」  
「どうやら……あのフェレット、ユーノ君はしばらくなのはの家にいるみたいだ。」

「二人も、なのはの家にいることが分かり、安心したようだった。」

「すると、話がフェレットの名前を何にするかに変わった。」

「ねえ、名前は何にするの？もう決めたの？」

「うん、ユーノ君って言うの」

「ユーノ君？」

「うん」

「いい名前だね。」

その後、しばらく話し合っていたが、授業開始のチャイムが鳴り、僕たちはそれぞれの席に着いた。

ユーノSIDE

コンコン

「ん？何の音だろう？」

なのはが学校に行っている間、なのはの部屋で留守番をしていると、物音が聞こえた。

「外から・・・(コンコン) うひゃあ!!」

僕は変な声を出して、後ずさってしまった。

何故なら、窓の外に緑の何かが浮かんで、窓を叩いているからだ

「シー！俺・・・って言っても分からんか。昨日のだ。窓を開けてくれ」

緑の何かが喋った昨日という単語で思い出したのが、

オーツーって人が所属するWDDOという組織だった。

「え？あ、えっと、WDDOの人ですか？」

頷いたので僕は窓を開けて、話を聞くことにした。

「よっと、簡単に自己紹介させてもらう。俺は昨日、君の話を聞いたO Oの上官のO Iだ。」

すまん、このアーマーは空を飛べるようになってないんだ。

長時間ここにいることが出来ないから手短に言うぞ。」

そう言っつてO I？は開いた窓の縁に座りながら言った。

「えっと、何の用ですか？」

「昨日言った、ジュエルシードの捜索の協力についてだ。」

この手紙をなのはさんに見せてやってくれないか？」

といっつて、持っていた紙を渡してきた。

「分かりました。じゃあ、念話で話しておきます。」

「よろしく頼む。俺たちは今から搜索を開始する。

見つけたら、一時的に俺たちが保管しておくから焦らなくていいぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

そう言うと、O1さんは目の前の道路に降りて、走り去っていった。

「……一体、あれほどの物を有するWDDOとはどんな組織なんだろう……?」

疑問を抱きつつも、僕はなのはに手紙の内容を伝えるため念話を飛ばした。

## Memory 13 二つ目のジュエルシード

なのはSIDE

『なのは、聞こえる?』

授業中、突然、ユーノ君の声が頭の中に響いてきた。

『え?何これ?』

『これは念話っていうんだ。話したい相手を思い浮かべて心の中で話すと相手に伝わるよ』

『え、えっと・・・こう?』

『そうそう』

あ、何か楽しい・・・!!

『それで、どうしたのユーノ君?』

『昨日の、オーツーって人の仲間の人なのは宛の手紙を持ってきたんだ。』

なのはに見せてっていったんだけど、ちょうど念話の練習にもあるし聞いてくれる?』

『うん。それで手紙には何て書いてあるの?』

カサカサ、と手紙を取り出す音が聞こえた後、ユーノ君が手紙を読み始めた。

『えーっと、』

『こんにちは、なのはさん。オーツーです。』

昨日言っていたジュエルシードを集めることについて伝えます。

僕たちWDDOはこの手紙を届けた日から搜索を開始します。

なのはさんは無理をせず、出来る日の好きな時間に搜索してください。

また、昨日みたいにジュエルシードが暴走したら念話で僕たちを呼んでください。

もし、僕たちの方で発見したら、後日、念話で伝えます。

僕たちは、日ごとにローテーションして搜索を担当していますので、

その日によって対応してくれる隊員が異なりますが、皆さん、良い人

ばかりですから

怖がらなくて大丈夫ですよ。なお、僕は毎日出るのでまた会うかも  
しれませんね。

長くなっただけど、伝えることはこれだけです。では、また。オー  
ツーより』だって』

『そっか、オーツーさんたち今日から探し始めるんだ。

よーし、じゃあ私も、今日から探そうっと！』

『うん、そうだね。でも、無茶はだめだよ。』

私はユーノ君と念話を切って、今日から始まるジュエルシード探し  
にワクワクしながら

授業を聞いていた。放課後が待ち遠しいな。

## SIDE OUT

### クロヤSIDE

『うん。なのはに手紙の内容が伝わったのを今、確認した。01、そっ  
ちは？』

『まだ見つからない。日中はMMAが使えないからな、頼りになるの  
は自分の足だけだ。』

しかし、骨が折れるぞこれは……』

僕は、なのはとユーノとの念話を盗み聞きして、

極少のイヤホンとマイクで01たちとこっそり連絡を取っていた。

『放課後、僕も探すし、多分なのはも探しに出てくると思うから、日中  
がんばって。』

『了解、とにかく指定された範囲内はキツチリ探す。それじゃ、学校頑  
張れよ。』

「そちらこそ」と言って通信を終了し、授業に耳を傾けた。

放課後、WDDO基地にて

「……………(カチャカチャ)」

僕は、学校から帰るなり基地に行き、自分の部屋に籠っている。僕は今、MMAのWTとATの確認作業と動作点検をしている。使う武器は毎日必ず点検、整備をする。

1万2000年以上の戦闘経験から身に染み付いた行動である。『(ピピッ)こちら01!聞こえるか00!ジュエルシードを発見したが、暴走している!』

至急、こちらに来てくれ!場所は、海鳴市内の神社だ!』  
「了解。今すぐそっちに向かう。」

すぐに点検を終了し、急いでMMAを装備して転送室に向かった。「00です!01から指定された場所に最も近いゲートへ!」

『了解!\*\*\*ゲートに転送します!』  
僕は光に包まれ、転送された。

\*\*\*ゲートにて

「転送完了。目的地に急行する」

『こちら司令部。オペレーションを開始します。00はこちらのナビに従って現場へ』

「了解!」

HUDから聞こえるオペレーターの指示通りに道を進み、現場へ向かった。

人目を避けるためか、道を左へ右へ曲がってばかりで方向感覚がおかしくなりそうだ。

すると、

『聞こえますか?オーツーさん』

なのはの声が頭に響いてきた。

『聞こえるよ。どうしたの?』

『ジュエルシードの反応があるってユーノ君が言ってるの!』

『うん、知ってる。今、01たちが先に現場で対応している。僕もそこに向かってる』

『私も急ぐから神社で会おうね!』





数十メートル吹っ飛ばされ、02は地面に打ち付けられて階段から転落していつてしまった。

「きゃあああああああああああああああ!!」

その転落していつた先から、聞き覚えのある悲鳴が聞こえた。

「高町さんの声か!?!」

「01!回避!回避して!!」

なのはの声に気を取られた01に化け物が肉薄し、その大きな爪で01を引き裂こうとした

「くっ!シールド防御!」

すぐさま、01はシールドを張り攻撃を防いだため引き裂かれることは無かったが、

明らかにシールドの強度が足りてなく、ヒビが入り始めてた、

「お前の相手はこつちだ!!」

僕はブースターを使い、化け物に接近し、トライブレードで切り裂き、蹴飛ばした

「01下がって、02の救出に!」

「わ・・・分かった・・・」

「オーツーさん!これって!!」

01が下がると同時になのはが現れた

「大丈夫です!吹っ飛ばされた人は01が助けに行きました!なのはさん!今すぐ変身を!」

「うん!って、あれ!?ユ一ノ君どうやってすればいいの!?!」

「ええ!?!えっと、昨日言ってたパスワードを言えば起動するけど・・・」

「あんな長い覚えてないよおー!!」

ええ!?!ちよーまずいつて!

「あつ!この、そつちに行くなああああ!」

「え?きやあ?」

化け物がなのはに向かって跳躍し、襲い掛かったときレイジングハートが光り、

『Stand by Ready. Setup』

レイジンググハートが起動したが、肝心のバリアジャケットが展開されていなかった。

「なのは！防護服の展開急いで!!」

ユーノが気付き、なのはに伝えるが、間に合わない

「ッ!!」

『Protection』

なのはに化け物の爪が当たる直前にバリアジャケットが展開され、

レイジンググハートがバリアを張った為、化け物が弾き飛ばされて何

とか無事だった。

「よし！一気に畳み掛ける！」

弾き飛ばされた化け物に狙いを定め、

「全弾発射！食らえ!!」

ガガガガガガガガガガッ!!ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

ランチャー、ヘビイマシンガン、腕部ガトリング砲が一斉に発射さ

れ、派手な爆発を起した。

「グ・ガアアアア・・・・・アアアア」

「今だ！なのはさん！お願いします！」

「うん！レイジンググハートお願い！」

『Yes. My, Master. Sealing Mode Set up』

前に見たように桜色のリボンが現れ、化け物を巻きつけ桜色のリボンで包み込んだ。

「リリカル・マジカル、ジュエルシード、シリアル16封印！」

『Sealing』

そして、出てきたジュエルシードをレイジンググハードで触れ、封印した。

長いようで短かった戦闘が終了した。

## Memory 14 励ましと強制休暇

「ふう、やっと終わった……」

一息ついていると、階段の方からローラーダッシュの音が聞こえてきた。

階下から、01と01に肩を貸された02がやってきた

「どうやら、戦闘は終了したみたいだな」

「はい。ジュエルシードは封印され、暴走体は消失しました。02、大丈夫ですか？」

「ああ、流石、司令が設計しただけある、なんとも無い……と言いたいが、

恐らく肋骨にヒビが入ったな、痛てえ……」

まあ、あんな質量から出された体当たりをまともに食らったんだ、ヒビですんだのはMMAのお陰だろう。

「肋骨にヒビって……大丈夫なんですか!？」

なのはが驚いて言った。

「まあ、ちよいと呼吸がしにくいのが、基地まで帰れる……はず」

「あの、治療しましょうか？一応、僕、治療魔法を使えるんです。」

「あー……お願いしてもいいか。痛みが続くのは正直、つらい」  
「では、座ってください。」

ユーノの指示に従って02が座ると、ユーノは呪文を唱えた。

唱え終わると、淡い緑色の魔方陣が現れ、光り始めた。

「お……痛みが引いていく……」

数分経つと、魔法陣が消え、光も収まった。

「治療は完了しました。もう痛みは無いはずですよ」

「すごい……これが魔法……。怪我したのが嘘みたいだ……」

02は治療魔法の効果に驚いていた。

「礼を言う。お陰で治った。」

「い、いいえ！当然のことをしただけです！」

02が頭を下げて礼を言ったので、ユーノは慌てていた。

「あの……」

「ん？どうしたんですか、なのはさん」

「私、ちゃんと出来たのかなって……」

「十分すぎるくらいですよ」

「でも！私がつと早く来ていれば、02さんも怪我しなかったし、01さんやオーツーさんも」

危険な目に遭わなかったかもしれないのに……」

ああ、なるほど。優しい人だよ、なのはは……」

でも、ちよつと自分を責めすぎだな、だから……」

「てい」

「にやわッー！」

僕はなのはにデコピンをした

「自分を責めすぎだよ。なのはさん。今、僕たちは君を守るために戦っているんだ。」

これくらいの危険は覚悟の上さ。

それに、まだジュエルシード探しは始まったばかりだよ？これから挽回すればいいし、

悔しいけど、僕たちもなのはさんに頼ることも多くなるかもしれない。

だからさ、ね？そんなに自分を責めないで」

「オーツーさん……うん！私、もつと頑張る！」

暗い顔だったなのはが笑顔になり、僕も嬉しくなる。

「その意気だよ、それになのはさんは笑っているほうが素敵だよ。」

「にやっ!!」

なのはは変な声を出して真っ赤になった

あ、あれ？何かマズイことでも言っちゃった!?

「(隊長……これが……)」

「(本人に自覚が無いところが厄介だな……)」

01と02はそんな心の声を発していたとか……」

二つ目のジュエルシードを封印してから4日後。

なのはは、ほぼ毎日捜索に出てきてくれた。しかし、明らかなオー

バーワークのため、

僕と新島さん、ユーノ君で渋るのを何とか休ませることに成功した。

「で、怪しまれないために僕も休めと？」

「それもあるが、今日くらい子供らしく遊んで来い。搜索は俺たちでやっておく」

断れそうな雰囲気でもなかったのでありがたく休ませて貰うことにした。

家にて

家に戻ったが、何をしようか悩んでいた。

「そうだ。久々に図書館行こう。はやてともしばらく会ってないし。」  
早速、準備をして、図書館に向かった。

図書館にて

久々に図書館に来て、早速、はやてを探し始めた。

「つて、だいたいいるところは分かるんだけどなあ……」

僕は恐らくいるであろう場所に足を運ぶと、案の定いた。

「ん……つと、よつと……」

しかも、初めて会ったときと同じ状況と言うオマケ付きで……

「また倒れるよ。よいしょつと、これかなはやて？」

「あっ！クローヤ！久しぶり、しばらく来んかったから忘れられとるんかと思つたわ」

「ごめんね。最近、忙しくて会いに来れなかったんだ」

「まっ、今日会いに来てくれただけでも嬉しいし許してあげるわ。また、お話しよつか？」

「そうだね。とりあえず場所を移そうか」

僕とはやては久しぶりの会話を楽しんだ。

はやてと話をしていると、意外な人物がやってきた。

「あれ？なのはにアリサにすずか？」

入り口から三人の姿が見えた。

手を振ると、向こうも気付いたみたいでこっちにやってきた。

「あつー！　いたいた。こんにちは、クロヤ君、はやてちゃん」

「家にいなかったから、どこかと思ったけど、やっぱりここね」

「どうしたの三人とも？」

「今日、今からなのはのお父さんがコーチをしているサッカーチームの試合があるんです。」

「だから一緒に観戦しようと思って誘いに来たんです」

「サッカーの試合ねえ……………」

「そういえば、この世界に来てからこの世界のスポーツを見た記憶があんまりないな。」

「僕はいいいけど。はやては？」

「うーん……………今日は病院も休みやから、うちも一緒に行くわ」

「二人ともオツケーね？　それじゃ、行きましょう。もう少しで試合始まっちゃうわよ」

「りょーかい」

「僕たちは途中、はやての家に寄ってから試合のある川原に向かった。」

## Memory 15 久しぶりの休日

川原にて

「こんにちは、君たちがクロヤ君にはやてさんだね？私は高町士郎。なのはとよく遊んでもらっているらしいね」

川原に着いてなのはのお父さんを探していると、向こうからやって来てくれた。

なのはのお父さん、士郎さんの第一印象は、一緒に話しているだけでも分かるくらい

すごいオーラを纏っているってことだった。かなり腕の立つ武人であることが伝わってくる。

何となく、なのはが異常な才能を持っているのが分かった気がした。

「いえいえ。こちらこそなのはと遊んでもらってます」

「うちも、足がこんなんですから友達になってくれて遊んだりしてくれる

なのはちゃんたちにはほんま感謝してます」

「そう言ってもらえると、こちらも嬉しいよ。」

そろそろ試合が始まるからなのはたちの所に行ってね」

「はい」

そう言って、僕ははやての車椅子を押しながらなのはたちと合流した。

合流すると、すぐに試合が始まった。

熱気と、闘志が伝わってきて、あまりルールを知らない僕でも思わず応援してしまうくらい

白熱した試合が行われていた。

そんな時、

「っ！（わずかな魔力波の乱れを感じる……）。あれか？」

魔力波の乱れを感じ、かすかな乱れを辿ると、

ゴールの前にいる少年のポケットから発していることに気が付い



た。

「ごめん、ちよつとトイレ行ってくるね」

僕は、連絡を取るためにトイレに向かうふりをした

人気の少ない場所で小型インカムを取り出し、基地に連絡を入れた。

「こちら00。オペレーター、今日検索しているのは？」

「こちらオペレーター。今日、検索しているのは05と06ですが？  
どうかしたのですか？」

「ジュエルシードを発見した。しかも、一般人が所持している」

『っ!!了解しました。05、06に連絡します。対処なのですが、

1班がとっておきの方法があるそうなので、それを試します』

「こちら00、了解した。では、通信終わり」

どうやら、今回は僕の出る幕では無さそうだ。

急いで戻ると試合も終盤に差し掛かっており、ちようど士郎さんのチームがゴールを決めていた。

結果は勝ち。

その後、翠屋という士郎さんとなのはのお母さんが経営する店で祝勝会が開かれるらしく

僕たちにもお誘いが掛かったのでありがたくお受けすることにした。

翠屋にて

「へえ・・・はじめて知ったよ。ここって、そんなに有名なんだね」

「というより、この町じや結構有名なんやけど、

まさかうちでも知ってることをクロヤ君が知らなかったなんて・・・」

僕たちは翠屋で祝勝会に参加していたが、僕がこの店のことを知らなかったことを言うと

はやてに呆れられてしまった。

「このケーキ、とてもおいしいんですよ。」

「そうなんだ。母さんに買って帰ろうかな？」

「いいじゃない。クロヤのお母さんも喜ぶと思うわよ。ねえ、なのは？・・・なのは？」

「・・・えっ？あ、うん。きっと喜んでくれると思うよ。」  
アリスがなのはに話を振ったが、なのはは周りを気にしているのかこつちの会話には半分上の空だった。

「どうしたのなのは？」

「ううん。なんでもない。(ユーノ君、近くに・・・)」

「(うん。ジュエルシードがある)」

どうやら、なのはとユーノ君もジュエルシードの存在に気付いたみたい。

「どうしようかな・・・休みの日までそういうことに意識を向けてほしくないな。」

「あ、ちよつとトイレに行ってくるね」

僕はトイレに入り、インカムを使って01に連絡を取った。

「こちら00。01応答を」

『こちら01。どうした？』

「なのはがジュエルシードに気付き始めた。至急、回収を」

『分かった。作戦を早めるが、ジュエルシードを所持している人が動かないとできない』

「ちよつと待って・・・あー、多分、もう少しで動く。今、祝勝会がお開きになったみたい」

『了解した。では、作戦を実行する。おーい、頼むぞ、05』

と言つて、向こうから通信を切った。一体、何をするつもりなんだろう？

「あ、いけない。お開きになったんだった。戻らないと」

僕は大急ぎでみんなに所に戻った。

「ごめん！遅くなった！」

「本当よ。いつまでトイレに行ってるのよ？なのは、先に帰っちゃったわよ？」

「祝勝会も終わったみたいですし、私たちもお開きにしましょうか」

「そやね。うちもそろそろ帰らんとあかんし」

「うん、そうだね。さてと、お土産を買って家に帰ろうかな。

……

あ、やば」

「どうしたんですか？」

「僕、今日、用事があるんだった、ごめん！僕急ぐからー」

嘘を言いつつ、僕はお土産を買い、なのはを追いかけた。

## Memory 16 新たなる決意

なのはSIDE

みんなと別れた後、私はジュエルシードの反応を追っていると、前を歩いているカップル？の男の子の方のポケットの中から反応を感じた。

「あ、いた！でも、どうしよう……ユーノ君、何か方法は無いの？」

「うーん。普通に『持っている宝石をください』って言うわけにもいかないし……」

「とりあえず、様子を……って、あれ？」

二人はスーツを着た見知らない男の人に話しかけられていました。男の人はポスターみたいなものを二人に見せていました。

あれって……

「ジュエルシードだね？」

「うん。うっすら文字が見える。間違いないと思うけど……」

すると男の子がポケットに入ってたジュエルシードを渡していました……って、ええ!?

「ど、どうしよう……」

ジュエルシードを受け取った男の人は違う色をした宝石を男の子に渡して

歩いていってしまいました。

追いかけると、人気の少ない路地に入りました

「(どうしよう……追いかけたのは良いけど、これからどうやればいいの〜!?)」

肝心なことを考えてなくて、どうしようか物陰で焦っていると、  
「ふう……疲れたな……。それと、もう出てきてもいいですよ。高町さん？」

と、男の人に呼ばれてしまいました……。ば、バレてる!?!  
物陰から出ると、そこにはさっきの男の人……ではなくて

オーツーさんと同じ鎧を着込んだWDDOの人がいました

「え？あなたは……」

「はい。WDDO所属の05です」

良かったあ……WDDOの人なら安心なの

「ジュエルシールドは回収しました。が、封印は後日でいいでしょう。」

「え？今しないんですか？」

「実は言う……」

「それじゃあ、お休みにならないからですよ」

後ろから声が聞こえて振り返ると、オーツーさんが立っていました。

「休ませたのは身体を休めるだけじゃなく、なのはさんの命を守るためでもあったんですよ」

「え？命を守るため？」

「どういうこと……私の身体に何が起こっているの？」

「なのは、本当のことを言うよ……」

なのはの身体には、とてつもない程の負担が掛かっているんだ。

魔法による疲労は運動による疲労と違って溜まりやすく取れにくいんだ。

しかも、なのははまだ成長期だから身体に与える影響も大きい。だから僕たちは休ませたんだ。」

ユーノ君が申し訳なきように言っている……本当なの……？

「ユーノ君……オーツーさん、本当なの？」

「うん。無理してほしくないし、なのはさんに怪我をしてほしくない。だから休ませたんだよ」

「そこまで考えていたなんて……私、まだまだダメだよ……」

自分の身体も管理できないなんて……

『マスター。そんなことはありません』

「レイジングハート？」

『マスターは魔法を自分自身だけじゃなく他人の役に立つために使っ

ています。

マスターのその志は立派です。

むしろ、今回はマスターを最大限サポートするはずの私のミスです。』

「レイジングハートの言うとおりだよ。

誰かの役に立とうと必死になるということは簡単なことじゃないんだ。

その難しいことを精一杯しているなのはさんは十分立派だよ。

でも、無理はダメ。怪我をして悲しむのは家族、友人、僕たちだつてそうなんだ。」

「その通りだよ。本当なら、このことは僕一人で片付けなくちやいけなかつたんだ。

でも、なのはは僕のいきなりの助けにもちゃんと答えてくれた。

だから、なのはにはとても感謝しているし、僕もなのはのサポートをするから」

みんなの言葉で、私の中に、一つの決意が生まれました。

「オーツーさん、ユーノ君……私、決めた！

誰かに指図されるんじゃなくて自分の意思でみんなを守るためにジユエルシードを集める！」

「強いね、なのはは……僕も決めたよ。どんなヤツからも絶対なのはを守る。」

「僕も、なのはを助ける。」

『私も同じです。マスター』

「みんな……ぐすつ……あ……ありがとう……うう……」

泣きそうになっていると、オーツーさんが優しく抱きしめて頭を撫でてくれた……

その後、私は大きな声で泣き続けた。

泣いている間もオーツーさんは優しく抱きしめて頭を撫で続けてくれた。

泣き終わった時、私はすつきりした気持ちになり、新しい始まりを

感じました。

## Memory 17 襲撃

ある夜、今日のはなが夜の捜索には出られないと言うことで僕と、今日担当の09、10と共にジュエルシードを探していた。「うーん。ないな・・・もうそろそろでこの町一体を捜索し終えるころだから、

範囲を変更しないといけないのかな」

と、今後の捜索範囲のことを考えながら道、側溝、建物の影などくまなく探していると、

一緒に捜索している10から通信が入った。

『こちら10。ジュエルシードを発見した』

「了解。封印ケースは09が持つてるから合流して」

『こちら09。今10と合流する。封印したら今日はもう終わろう』

「了解。」

しばらく待っていると、再び09、10から通信が入った。

『こちら10。封印作業が完了した。こ・・・れよ・・・き・・・か・・・』

「ん?どうしました!? 応答を!」

『こち・・・0・・・何・・・しゅう・・・』

う・・・ああ・・・ああああ・・・!!』

『・・・10・・・きゅ・・・をもと・・・く・・・』

す・・・きゅう・・・きゅ・・・ああああああ!!』

「09、10! 応答を! オペレーター! 何がありましたか!？」

突然、通信が途絶えたのと救援を求めている内容だったのでオペレーターに急ぎ聞いた。

『こちらオペレーター! 09、10との通信及びシグナルロスト! 彼らがいいた場所一帯が通信不能!』

「00、現場に急行します!」

『オペレーター了解! なお、第一班に緊急出動が発令されました。全隊員がそちらに急行します!』

僕はオペレーターの言葉を聞きながら、09、10のもとへ急いだ



現場にて

「なっ！」

現場についた瞬間、背筋が凍りついた。道に二人が倒れていた。

血まみれで

「09、10！しっかりしてください！」

二人を抱き起こしたが反応が無い。脈はあるので、死んでいないことに安堵した。

「装甲がズタズタにされている。この切り口は……鋭利な刃物？……違う、焼き切られたに近い」

ふたりのMMAは無残にも切り裂かれてボロボロだった。

MMAは魔導士のバリアジャケットに装甲を取り付けたもので、防御性能ならバリアジャケットより上のはず……

「な！何だこれは!？」

声が出たので、振り向くと01たちが到着したみたいで、みんな啞然としていた。

「01！二人を！」

「ああ！09、10を急いで基地に運べ！オペレーター、緊急手術の用意を！」

09、10が負傷！二人とも意識不明の重体！」

01の指示に、みんなは素早く行動し、二人に応急処置をして持つて来た担架に乗せ、

全速力でグライディングホイールを回転させて走り去っていった。  
残った人たちはMMAの破片、犯人の証拠品探しを始めた

「01！これを見てくれ！」

02の声がして、駆け寄ってみると、粉々にされた何かがあった  
「なんだこれは？」

「これ、封印ケースです！」

「何だと！MMAの装甲と同じ装甲板で出来ていたはずだ！なのに、  
粉々だと！」

02が見つけたのは粉々にされた封印ケースだった。

「00！ジュエルシードは!？」

「既に封印されてそのなかに……犯人は、ジュエルシード狙っ  
たみたいですよ……」

「くそっ！一個でも危険なものなのに奪われたとなると……」

「一先ず帰還しよう。MMAを簡単に破壊できる奴が犯人です。ここ  
に留まるのは危険です」

「00……そうだな。総員、撤退だ！急げ！」

結界の中で攻撃されたようで 周りの建物や壁に損害が無く撤退  
はスムーズに済んだが、

何か大きな闇があることは誰の目にも明らかだった。

基地にて

「……」

09と10を救出し、基地に撤退した僕たちは食堂に集まってい  
た。

今は、MMAに残されている映像データの解析と二人の緊急手術が  
終わるのを待っている。

みんな、ショックを隠しきれないみたいで、誰も何も話さずにMM  
Aは装備したまま

HMDを外して椅子に座っていたりウロウロ歩いたりしていた。

「――」  
小声で喋っているのが聞こえて、声のする方を見ると03が聖書を片手に祈りを捧げていた。

「……………ちくしょおつー！」  
ガタン！と大きな音がすると、06が机を叩いて怒りを露わにしていた

「誰だ！誰なんだ!?!10を……………アニスをやったのは!?!」

「落ち着けフーバー。戦友を傷つけられて怒るのは分かるが、今はアニスとジェフの無事を祈れ。」

事はそれからだ」

06……………フーバーさんを02……………アシュレイさんが宥めている。  
フーバーさんとアニスさんは二人ともアメリカ軍の訓練学校時代からの友人で、

同じ海軍特殊部隊に所属していたんだっけ……………

「そうだぞフーバー。俺だってジェフをやられて悲しいんだ。」

だが、今俺たちがすることは二人の無事と、解析を待つことだ」

そう言っつて、大柄な黒人……………04ことダグさんが落ち着いた声で言っつた。

ダグさんとジェフさんは人種は違うけど同じ国出身ということ、配属時からの友人らしい。

「そう……………だな……………すまん」

フーバーさんが謝って、椅子に座りなおすと再び沈黙が訪れた。

数分経ったころ、ドアが開き、研究員が着る白衣を着たいつもの格好の母さんが入ってきた。

「リーネさん！二人は!?!」

01……………新島さんが母さんに聞くと、母さんは首を横に振った。  
「……………まだよ。あと、2、3時間掛かるらしいわ。それと、解析が終わったけど、どうする?」  
新島さんは少し考えると、

「……………今すぐお願いします。」

「そう………。では、至急、会議室に集合して。」  
そう言つて、母さんは会議室に向かい、僕たちもぞろぞろと会議室  
に向かった。

## Memory 18 襲撃者の正体

「集まったわね?.....これから見せるのは09と10のHMDの映像よ。」

つらい光景を見るかもしれないけど、堪えて頂戴」

会議室に集まり、映像を見せる前に母さんが注意を言った。

相当、酷い映像が映っていたのだろう。

「.....はい。お願いします」

新島さんが言うと、母さんは機械を操作し、空中にディスプレイを出現させて映像を流し始めた。

### 映像

『こちら10。封印作業が完了した。これより帰還する.....ん? 何だ、通信が繋がらない?』

映像は、通信が途絶したあたりから始まった。

どうやら、途絶した時にはまだ犯人と出会っていなかったみたいだ。

『どうした10?』

『通信が繋がらないんだ。どうなってるんだ?』

『俺たちはメカニックじゃないんだ。分かるわけないだろ? ゲートの場所は覚えてるからさっさと帰ろうぜ』

『そうだな。さっさと帰るか.....ん?』

『今度はどうしたんだ?』

何かに気付いた10が道の先を指差していた。

『あそこ、道の真ん中に誰がいる』

『道の真ん中?.....あつーいた。誰だアイツ?』

『.....少なくとも、一般人じゃないのは明らかだな』

二人の視線の先にいたのは、

真っ黒の衣装とマント、金色の髪、赤い瞳をした少女だった。

『一応、聞いてみるか。こちらは世界次元防衛機構、WDDOだ。そちらの所属、名前、目的を言ってください』

10が少女に質問をしたが、少女は黙ったままだった。

『おーい。聞こえてるか？もう一度言うぞ。君の名前、所属、目的を言ってください』

『………』

『おいおい、無視するなよ。君は一体………』

09が呆れて近づこうとした時、

『………あなた達に用はありません。………消えてください』

無表情に冷たく、少女が呟いた途端、姿が消えた。

『は？何を………グアツ!!』

映像が揺らぐと、10の視点になり、09が脇腹のあたりを切り裂かれていたことに気付いた。

『なっ！』

10が驚いて後ろを見ると、少女がいつの間にか大きな金色の刃を持った鎌を持っていた。

『は、速いー！いつの間にもー！』  
『どうやら、ジュエルシールドはその箱の中のようなですね。渡しなさい。  
でなければ……』

死にますよ？』

少女が非情に宣言すると、09と10は全速力で少女から逃げていた。

『こちら09！襲撃された！う、うわあああああああああああああああああああ  
あああああ!!』

『こちら10！至急、救援を求めろ！繰り返す、救援を、あつ、あああ：  
ああああああ……あああああああああああああああああ!!』

突然、09と10の横に金色の閃光が走り、目の前に少女が現れた。  
『逃げましたね。なら……』

少女は、狂気めいたゾツとする笑みを浮かべ、  
『死んでくださいね？』

そのからは一方的な虐殺だった。

明らかに、少女のスピードは二人の反応速度を超えており、姿が消えるたびに二人のうちどちらかが斬られていた。

まず、二人の脚部装甲が斬られ、動けなくなった。

そして、一撃離脱を繰り返して二人をズタズタに切り裂いていった。

『アハハハハハハハッ！キャハハハハハハハハハハハハッ!!!』

狂気の笑い声を響かせながら、二人を少しずつ、確実に切り裂いていった。

少女は二人を切り刻んだあと、転がっていた封印ケースを拾おうとした時、

『グッ……それは……渡せ……ない……』  
『……ふ、封印……ケースには……指一本……触れ……させな……いぞ』

二人が少女の足とマントを掴んで最後の抵抗をしていた

『フフッ……そんなに殺されたいんだあ……』  
なら殺してあげるよッ！』

少女は、09と10の手を払い、二人を空中に投げ何回も切り裂いて、地面へと叩き落したところで映像が途切れた。



## Memory 19 リーネの決断

「.....」

映像が終わっても、誰一人として言葉を発することは無かった。

酷すぎる.....ここまで残忍なことを笑いながら出来るなんて.....狂ってる.....

でも、何か変だ.....本能なのか直感なのかは分からないけど、そう思う。

「.....ここ.....これでは、一方的な虐殺行為だ！こんなことが許されるはずが無い!!」

「リーネさん！至急、この子に対する交戦許可を!!」

「市街地での重武装の使用許可を!!」

すると、シヨックから回復した01、02以外の隊員たちが次々に交戦許可を求め始めた。

「.....」

でも、母さんは目を瞑って黙ったままだ。

「「リーネさん!」」

みんなが大きな声で呼ぶと、母さんは目を開けて、

「交戦は.....」

「許可しないわ」

はつきりと宣言した。

「何故です！これは明らかに虐殺行為です！」

「そうですよ！このような狂気の沙汰、普通は出来ませんか!？」

みんなは明らかに怒りにとらわれて目先のことしか考えていない、  
こうなったら………。

僕は空気を思いつきり吸い込み、

「うるせえぞオオオオオオオオオツ!!」

部屋全体が揺れていると錯覚するくらいの大音量で叫んだ

「「ツ!!!」」

みんなが耳を押さえ、驚きながら僕を見てきた

「ふう……。ごめんなさい。でも、頭は冷えましたか？」

僕が一拍おいて言うと、新島さんが僕と隊員たちの間に立つように  
身体を滑り込ませた。

「みんな、クロヤ君の言うとおりで。頭を冷やせ。第一、いくら重武装  
をしたところで勝てるのか？」

「しかも、その時にこの子が周りの施設や民間人に危害を加えないと  
断言できるのか？」

それに、重武装なんか使ったら被害を加えるかもしれないのは俺た  
ちになるんだぞ？」

「……………」

新島さんの言ったことにアシユレイさんが援護射撃をし、みんなは黙ってしまった。

「それに、少し気になることがあったの」

母さんはいくつか操作をして、映像を一部分のみ再生した

ちやうど、金色の少女が二人に止めを差そうとしたところだった。

「はいよ」

さらに一部分を再生すると、僕の直感が確信になった

「この瞬間、一瞬だけだけど身体の一部が変わっているの。ここと、ここ」

指差したのは少女の長いツインテールと腕の部分だった

「まず、髪の毛が短くなって白色に、腕の部分にうつすらと何かの紋様が浮き出ているの。」

多分、この姿は変身魔法を使った偽装。

なぜこんなことをしたのか分からないけど、恐らく誰かに罪を擦り付けるためね。」

「(白い・・・紋様のある体・・・まさかアイツ?・・・・・・・・)」

母さんをチラリと見ると小さく頷いていた。

やっぱり、母さんも同じ考えに辿り着いたみたいだった。

「それにしても・・・・・・・・この子、誰かに似ているような・・・・・・・・?」

「(コンコン) 失礼します」

母さんが別のことで悩んでいると、ノックの音がした。扉が開くと、この基地の医師が入ってきた

「無事、手術が終わりました。設備のお陰もあって二人とも峠は越えました。」

二ヶ月もすれば完治するでしょう」

「ツ!!ありがとう。お疲れ様でした。みんな、聞いた?」

「二!!いよっしやっあああああああつ!!」

手術の終わりと二人の無事を聞くと、みんな嬉しさのあまり抱き合ったり、泣いている人もいた。

「でも、楽観はできないわ。今日はもう休んで。明日からの搜索の際は必ず二人で離れず行動すること。」

「じゃあ、解散!」

みんなが解散した後も、僕は会議室に残り椅子に座って考え込んでいた。

「何をしているのクロ君?」

「あ、母さん。いや、あいつのことを考えていたんだ。」

「・・・夢で出てきたって言う白いクロ君のこと?」

「うん。もしかしたら、あいつは生物兵器・・・Ωかもしれない」

「Ω?」

「異世界『ロンデニオン』と言う世界で造られた、僕のクローンの。それを兵器にしたのがΩ。」

「正確には、Ωだったもの」

「どういうこと?」

「あいつは、調整ミスと実験事故で暴走して、ただひたすら破壊と殺戮の為に生きる怪物だよ。」

「しかも、あいつは僕のクローンだから、僕の一部を受け継いでいる。」

「多分、ほぼ僕と同じくらいの力はある。」

「さらに最悪なことにあれば、『ロンデニオン』を破壊する際に」

「軍の中枢コンピュータからありとあらゆる知識を得ているんだ。」

「だから、かなり頭が良い。ただ暴れまわって破壊の限りをするときもあれば、」

「裏で暗躍して大きな戦乱を引き起こさせることもある」

「最悪ね・・・。破壊と殺戮が生きがいで、しかも頭も良くて強い。史上最悪の犯罪者・・・いいえ、」

「もう犯罪者っていう枠を超えているわ。」

「あいつは僕を狙う。『ロンデニオン』で戦った時、手傷を負わせたんだ。でも、逃げられた。」

それ以来、僕に異常な執着を持っている。

近いうちに必ず出てくる。もし、Ωが出てきたら、僕はあれを倒す。皆を守るために」

「……………クロ君」

僕の決意を聞いた母さんは、そつと僕を抱きしめてきた。

「クロ君の思いは聞いたわ。母さんは止めない。でも、一つだけ約束して、必ず帰ってくるよ」

「うん。」

母さんと約束した後、僕は母さんと一緒に家に戻った。

????にて

「ただいま戻りましたよー」

「……………回収したものは？」

地球とは別の次元のある場所で、軽い調子の声が響いた。

声の主……………金色の少女は部屋の奥に設置された椅子に座る女性に近づき、持っていた物を渡した。

「ほい。ジュエルシード一個、回収。いやー、町の中に紛れていると思っていたけど、

まさか向こうの組織が回収しているとはね。

回収するのは楽だったけどそいつら弱いこと弱いこと、もっと抵抗して楽しませろっての。」

「……………」

女性は無言で少女の言葉を聞いていると、不意に指を少女に向けた

ズバアツ！

「ひひっ！」

向けた瞬間、指先から電撃が走り、少女のいたところに当たるが、少女は既にジャンプでその場から飛び退き、離れたところに着地した。

しかし、姿は少女ではなく、白い髪で全身に紅い線の入った少年に変わっていた。

「……………なぜ、あの子の姿に変身したの？」

女性は怒りを露わにしながら立ち上がり、少年に険しい口調で聞いた。

「だってさー、どっちにしたってあの子はさっき言った組織と交戦するだろうから

印象付けておいてもいいかなーって」

「馬鹿にしないで！二度とあの子に変身しないで！うっ……………ゴホツゴホツ……………！」

激しく怒っていた女性は突然、咳き込み片膝を付いた。

女性は吐血しており、手は血で真っ赤だった。

「あーあ。あんまり無理するからだよ。無闇に魔法なんて使ったら寿命を縮めるだけだよ？」

「……………くっ……………!!」

女性は少年を睨みつけた。

しかし、少年は怯まずむしろ面白そうに笑った。

「おーおー。怖い怖い。でもさー、あんまり凶に乗るとあの方法、教えてあげないよ？」

「!!!」

少年の言葉を聞いた女性はひどく怯えた表情になった。

「ひひっ！冗談冗談。それじゃ、僕はまた探しに行くからね。」

あと、あの子に今度会いに行くから。それじゃ、バイバイ！

少年はそう言って、部屋から出て行った。

「くっ……………ごめんなさい……………アリシア、フエイト……………うう……………」

部屋には、残された女性の嗚咽が響いていた。

# Memory 20      なのはの必殺技と二人の来訪者

襲撃から3日後、海鳴市の公園にて

「なのはさん！そっちに行った！」

「うん！任せて！」

今、僕たちは公園の木に埋め込まれたジュエルシールドの暴走体とユーノ君が展開した結界内で戦闘している。

ちなみに他のみんなには、とある理由で休んでもらった。

驚いたのは、なのはさんの戦い方が以前とは全くと言っていいほど良くなっていることだった。

ユーノ君に聞いたところ、時間を見つけては魔法の練習をしているらしい。

また無茶をすることも出来ないと思ったが、ユーノ君とレイジングハートがしっかりと

コンディションを把握しているらしいので度を過ぎた魔法の練習はさせていないとのことだった。

なのは自身も分かっているみたいなので、心配はなさそうだと  
言うか……

「何か、倒せる気がしないな……木なだけに……」  
「冗談言ってる場合じゃないと思うけど……」

思いついた洒落を言ったら近くにいたユーノ君に呆れられてしまった。

それもそのはず、コイツは根っこを鞭のようにして攻撃してくるんだだけ

い。斬っても撃つてもその部分から超速再生してしまうのでキリがない。

こういうタイプとは何回か戦ったことはあるけど……面倒なところは共通しているんだよね……



これには一撃必殺の強力な技が効果的なんだけど……  
「何か、一発で決めれるのがあればいいけど……」  
「うーん……。あつ、そうだ、なのは！この前から練習してたあの技を試してみて！」

「ええ!?でも、あれまだ上手く出来る自信ないんだけど……」  
「どうやら、練習中の新技があるらしい。」

今は四の五の言ってもらえないので、僕がフォローするしかない。

「なのはさん、僕がフォローするから自信持つて！」

「うん！」

なのはが頷くと、レイジングハートを構え、魔力をチャージし始めた。

だが、敵がその隙を見逃すはずも無く、なのはに攻撃しようとした  
「邪魔はさせない！」

「オーツーさん！足止めを！」

僕が牽制し、ユーノ君の拘束魔法で動きを止めた時、なのはの射線上から退くと、

「いくよ！デイバインバスター！」

物凄い魔力の砲撃が撃ち出され、敵を呑み込んだ

「うう……。きやあつ！」

しかし、激しい砲撃の威力に耐え切れず、なのはが後ろに吹っ飛ばされてしまった。

「よつと……。大丈夫？」

何とか後ろに回りこんで飛ばされたなのはをキャッチした。

「う、うん。ありがとう」

「どういたしまして。それにしても……」

僕は砲撃の跡を見て呆れていた。

「物凄い威力だね……。地面が抉れて大変なことになってる……」

「にやはは……。でも、失敗。」

まだ上手く制御できないからこうやって吹っ飛ばされちゃうんだよ。  
あと、これを撃った後ね……」

すると、なのはが光に包まれた。

光が収まると、バリアジャケットではなく私服のなのが現れた。

「こんな風に魔力切れを起して、しばらく戦えないんだよ。」

しかも、チャージが必要だし撃つのに時間も掛かっちゃうから、まだまだ未完成なんだよね」

一体、この子はどれだけの才能を持っているんだ………  
僕が戦慄していると、ジュエルシードを持って走ってくるユーノ君が見えた。

「お疲れなのは。ジュエルシードを持ってきたから封印を、と言いた  
いけど

今は無理だから今日は帰って休もう」

「うん。あ、オーツーさん。ジュエルシードを預かってもらえるかな  
？」

「いいよ。じゃあ、これは僕が責任を持って預かるよ。それじゃ、気を  
付けて帰ってね」

「うん。じゃあね」

ジュエルシードを預かると、なのはは少しふらつきながらも家に  
帰っていった。

さして

「もう出てきてもいいじゃないかな、そこに隠れているお二人さん？」  
僕が背後の茂みに向かって言うと、茂みがガサガサと揺れ二人組みの人物が現れた。

ひとりは……犬耳？ちがうな、オレンジの狼耳と尻尾を持ったお姉さん。

もう一人は……金色のツインテールに、赤い瞳、黒いバリア  
ジャケツト……

以前、09と10を襲った奴が変身していた少女だった。

## Memory 21 金色の少女との出会い

「……………いつから気が付いてたの？」

「最初からだよ、で、何の用かな？」

「分かってるくせに。あなたの持っているジュエルシードを渡してもらおうとも言えいいかな？」

まあ、分かっていたけど。それにしても、

「……………ふーん。失礼かもしれないけど、君ってクローンだよな？」

そっちの狼耳の人はその子の使い魔だよな？」

「!!!」

やっぱり、

「ど、どうしてそれを?!」

「うーん。なんていうか、クローンって人工的に産み出されるから体から出る命の波長が

きつちりしすぎてるんだよ。普通は少し乱れているから分かりやすいんだよ。

使い魔のあなたからは、その子と全く同じ魔力波長を感じたから一目で分かりましたよ。

ついでに言うなら、あなた、変身できますよね？この波長からすると……………

1メートルから2メートル弱くらいの狼系かな、それと近接格闘、補助魔法が得意ですよな？」

「そんなに詳しく……………あんた一体何者なんだい!?!」

「世界次元防衛機構、WDDO行動隊所属、オーツ曹長。とでも、名乗っておくよ。」

さて、さっきの答えなんだけど……………このジュエルシードは渡せないね」

「……………どうしてもですか？」

「うん。」

「なら、力づくで奪ってやる!」

再度拒否すると、オレンジの使い魔が狼に変身し飛び掛ってきた  
「はあ……言葉の綾って難しいね。ファーストリミッター解  
除」

僕は一瞬だけ最初のリミッターを解除し後ろに回りこんだ。

使い魔を通り越し、金色の少女の後ろに

「え!？」

「は、速い!こいつ、フェイトより速い!」

クローンの子はフェイトって言うんだ。

この波長からすると……高速戦闘が得意で魔力属性は電気、手数  
の多さで勝負してくるみたい

ま、典型的な高速戦闘のスタイルだね。

「まだ話は終わってないよ。『この』って言ったでしょ?でも、こっちは  
あげてもいいよ。」

但し、条件があるけどね」

そう言っつて、いつもなら予備の変換装置を着けている所に装着して  
おいた小さな袋から、

以前回収したジュエルシードを取り出した。

「……何が目的なの?」

「フェイトダメだよ!あんな怪しい奴と取引なんかしたら何されるか  
分かったもんじゃないよ!」

フェイトという少女は明らかに疑念を抱きながら聞いてきたが、  
使い魔はそれを拒否するように言ってる。

でも、向こうはジュエルシードがほしい。さあ、どう出るかな?  
「でも……できれば戦わずに手に入りたい。」

それに、あの人の実力が分からない以上戦わない方がいいと思う」  
「うう……フェイトがそう言うんだったらいいけど、もしあいつ  
が変なことしたら戦うからね」

どうやら、こっちの交渉に応じるみたい。良かった、話を通じ

て……………

「そちらの条件を言ってください」

「僕の質問に答えてくれればいいよ。もし、答えられないなら言わなくてもいい。それだけだよ」

「……………分

かりました。その条件を飲みます」

よし、じゃあ質問タイムと

「まず、君の名前は？使い魔のあなたも」

「……………フェイトです。下の名前は教えられません」

「あたしはアルフ。あんたの言ったとおりこの子の使い魔だよ」

フェイトさんアルフさんね……………了解了解と

「次、フェイトさんは3日前にこの町に来た？」

「??いいえ。来たのは昨日です。」

……………どうやら、この子は襲撃してないみたいだ。嘘の波長も感じない。本当みたいだ。

「次、あなたの他にジュエルシードを回収している仲間はある？」

「いいや、あたしらだけだよ。」

Ωらしき奴は、この子とは関わってないみたいだ。

「次、何のためにこれを集めてるの？」

「……………言えま

せん、ただ、私の母さんのためと言う事だけは言えます」

目的はお母さんの為ね……………もういいかな？

「うん。ありがとう、これで質問は終わり。はい、お礼のジュエルシード」

「え？」

困惑する二人を他所に、僕はジュエルシードを手渡した。

「ちよ、ちよと待ちな！本当にこれだけでいいのかい!？」

「うん。問題は解決したし、聞きたかったのもそれだけだったし」

「でも、そんな簡単に渡して良いのですか？」

まあ、本当なら渡さないけど、

「僕はフェイトさんが純粹にお母さんのために集めようとしてるのが

分かったから渡したんだ。

フェイトさんからは邪悪な思念を感じない。だから信用出来ると思っただ。」

「……あ、ありがとうございます」

そう言うと、フェイトさんはお礼を言った。

でも、

「でも、さっき一緒に戦っていた女の子の魔導師がいたでしょ？僕はあの子の味方なんだ。」

あの子の子どもちゃんとした理由をもって集めている。僕はそれを応援しているんだ。

だから次にフェイトさんと会うときは敵同士になる」

「……うん」

「近いうち、必ずフェイトさんとあの子は会う。」

その時は、お互いの想いがぶつかり合って戦いになると思う。

けど、それでもいいと思う。自分の想いを貫き通せない奴は物事をする資格はないからね。

でも、

僕は一旦言葉を区切り、言った

『想いは自分の為であって、誰かに伝えるもの』。僕はそう思ってる。

他人に伝えても意味が無い想いは無いと思う。」

「……………」

思い当たる節があるのか、フェイトさんは俯いて黙ってしまった。

「あくまで、これは僕の考え方。どうとるかはフェイトさん次第だよ。

それじゃ、さようなら」

僕はフェイトさんに別れを告げ、公園から出て行った。

## Memory 22 謎の少年（フェイト視点）

フェイトSIDE

「（アルフ、ジュエルシードの反応は？）」

「（無いね。もう少し掛かりそう）」

「（分かった）」

私はアルフと念話で連絡を取りながらこの町に散らばったジュエルシードを探し始めた。

昨日、来て早々に搜索したけど空振りになってしまったので今日こそは探して封印したい。

その時、遠くの方で大きな魔力反応があった

「（アルフ！）」

「（間違いない、ジュエルシードだよ！早速、一個発見だね！）」

「（うん！って、あれ？結界が張られた!? 私たちの他に誰か魔法を使える人がいる!?!）」

「（管理局だったらマズイ！急ごうフェイト！）」

私は急いで反応があった場所に向かった。

公園にて

公園の近くに着くと、結界が張られているのが見えた。

「やっぱり、誰か他に魔導士がいる」

「早く中に入ろう」

私はアルフと一緒に結界を壊さないように中に入った。

中に入ると、白いバリアジャケットを着た女の子と女の子の使い魔みたいな動物と

・・・何あれ？

右肩が紅いのを除いて全身が黒い鎧を纏った女の子と同じくらいの人と一緒に戦っていた。

鎧を着た人は顔をヘルメットで覆っているから男の子なのか女の子なのかは分からない。



「管理局……じゃないっぽいけど、どうするフェイト?」

「まずは様子を見よう。2対3じゃ分が悪い。」

「了解」

茂みの中から様子を伺っていると、女の子がデバイスを構えて魔力をチャージし始めた

「ちょ!何て魔力量?!フェイトと同じくらいあるんじゃないの!」

アルフが驚きながら女の子を見ていた。

「凄いな……私と同じくらいかそれ以上はある……あの子は一体?」

そして、発射された魔力はジュエルシードの暴走体を飲み込んだ。

「凄かった……あ、ジュエルシード!」

砲撃の後を見て、啞然としてるとジュエルシードが女の子の使い魔に持っていかれていた。

「マズイよ!封印される前に奪わなきゃ!」

「ちよつと待って、あれ?あの子、封印しないで行っちゃった……」

「どうも、鎧を着た人に預けて帰っちゃったみたい、今なら、

「さて、もう出てきてもいいじゃないかな、そこに隠れているお二人さん?」

出ようとした瞬間、鎧を着た人に声を掛けられた。

「ば、バレてる!」

私は茂みから出て、鎧を着た人と向かい合った。

「……いつから気が付いてたの?」

「最初からだよ、で、何の用かな?」

「どうやら、この人は男の子みたい。」

用件を聞いているけど、そんなこと分かっているはずなのに、

「分かってくるくせに。あんたの持っているジュエルシードを渡してもらおう……」

「とでも言えばいいかな?」

アルフが私の代わりに言うと、鎧の男の子は予想したとおりと言っ

た感じで小さく頷いた。

そのあと、小さく首をかしげて、

「……………ふーん。失礼かもしれないけど、君ってクローンだよな？」

そっちの狼耳の人はその子の使い魔だよな？」

「!!!」

私とアルフの正体を言い当ててしまった

「ど、どうしてそれを!?!」

自分でも声が震えているのが分かる。

アルフなら分かってても仕方ないけど、私の出生まで分かってしまうなんて……………

「うーん。なんていうか、クローンって人工的に産み出されるから体から出る命の波長がきっちりすぎてるんだよね。

普通は少し乱れているから分かりやすいんだよ。同じ形の波長を続けるのは不自然だからね。

使い魔のあなたからは、その子と全く同じ魔力波長を感じたから一目で分かりましたよ。

ついでに言うなら、使い魔のあなたは変身できますよね?この波長からすると……………

1メートルから2メートル弱くらいの狼系かな?

それと近接格闘、補助魔法が得意ですよな?」

アルフの変身や特徴まで……………この人は一体!?!

「そんなに詳しく……………あんた一体何者なんだい!?!」

「世界次元防衛機構、WDDO行動隊『第1班』所属、オーツ曹長。とでも名乗っておくよ。

さて、さっきの答えなんだけど……………このジュエルシードは渡せないね」

WDDO?管理局……………じゃないみたい。

でも、今はそんなことより、何としてでもジュエルシードを渡してもらわないと……………

「……………どうしてもですか?」

「うん。」

「なら、力づくで奪ってやる!」

少年が拒否すると、アルフが変身して飛び掛った。

「はあ……言葉の綾って難しいね。ファーストリミッター解除」

すると、少年はため息をつき、何かを呟いた後……消えた。消えた瞬間、私の横を何かが通り過ぎたような風を感じ、後ろを振り向くと……

さっきの少年が立っていた。

「え!」

「は、速い……いつ、フェイトより速い!」

アルフが驚いた声を上げていた。

驚いていたのは私も同じ。スピードには自信があったけど、付いていけなかった。

「(物凄いスピード……私よりずっと速い……。何者? W D D Oってどんな組織?)」

「まだ話は終わってないよ。『この』って言ったでしょ?」

でも、こっちはあげてもいいよ。但し、条件があるけどね」

すると、少年は腰の袋からもう一つのジュエルシードを取り出した。

「……何が目的なの?」

「フェイトダメだよ! あんな怪しいやつと取引なんかしたら何されるか分かったもんじゃないよ!」

アルフが取引をしないように言ってるけど……

「でも……できれば戦わずに手に入れたい。」

それに、あの人の実力が分からない以上戦わない方がいいと思う」

それに、もし戦いになったら……勝てない。

あの速度についていけないし、何よりどんな魔法を使ってくるかも分からない。

完全にあの少年に主導権を奪われている……

「うう……フェイトがそう言うんだったらいいけど、も

「しあいつが変なことしたら戦うからね」

「アルフは渋々、引き下がってくれた。」

「少年もどこか、ほっとした様子だった。」

「そちらの条件を言ってください」

「僕が言う質問に答えてくれればいいよ。もし、答えられないなら言わなくてもいい。それだけだよ」

「.....分  
かりました。その条件を飲みます」

「何かとても条件が緩い気がするけど、ジュエルシードの為に私はその条件を呑んだ。」

## Memory 23 なのはとフェイトと破壊魔

「こちら00。01、応答を」

『こちら01。聞いてたぞ。どうやら、彼女は09、10を襲ったやつとは無関係らしいな』

出会った金色の少女・・・フェイトさんのことを伝えたと、通信先の01が少し安堵したような声が聞こえた。

「でも・・・これは僕の予想んだけど、多分、この前襲撃した奴はフェイトさんと関わり合いがあると思う」

『どういうことだ？本人は知らないと言った感じだったし、使い魔もいないって言い切っていたじゃないか』

「正確には、関わり合いを持っているのはフェイトさんのお母さんだと思う。」

多分、ジュエルシードを集めているのに関係していて、襲撃した奴は別ルートで協力している」

僕の推理を聞いた01は『むう・・・』と言って黙り込んでしまった。

しばらくして、01が口を開いた。

『00の予想は一理あると思うが、予想の域を出ない。第一、確認する手段が無い』

「ありますよ。多分・・・いや絶対、襲撃したやつはまた現れる。」

「そいつから力づくで聞き出してやればいい」

『・・・どうしたんだ00？やけに乱暴なやり方だが・・・』  
「すみません。こればかりは譲れませんし、何故そうするのかも教えられません」

Ωのことは母さんと僕だけの秘密だ。

下手に知らせれば、01たちが僕に協力するとか言い出してしま  
う。

そうなれば・・・

01たちには『死』しか待っていない。

それくらい、Ωは強く危険な存在だ。

僕は、何か言いた気な雰囲気を出している01との通信を切って基地に戻った。

基地に戻ると、僕はすぐに家に戻った。

しばらく自分の部屋でゴロゴロしていると、電話が鳴った。

電話に出ると、相手はなのはだった。

「もしもし?」

『もしもし、クロヤ君ですか?』

「うん。そうだけど、どうしたの?」

『実は、明日、すずかちゃんの家でお茶会をするんだけど、クロヤ君もどうかなくて』

「お茶会? 明日? . . . . . うーん . . . . . ごめん、明日家の用事で一日いないんだ。誘ってくれて嬉しいけど、行けないな」

『そうなんだ . . . . . うん、分かった。それじゃ、またねクロヤ君』  
そう言って、なのはは電話を切った。

本当は、嘘だ。用事なんか無い。

でも . . . . .

「(今は、Ωを警戒しないと . . . . . みんなやこの世界を守るために . . . . .)」

窓の外を見ながら、僕はそう心に思った。

次の日の午後あたり、僕は基地に一日中籠って訓練をしていた。

その時、

ビーツ! ビーツ! ビーツ!

緊急事態を知らせる警報が鳴り響き、オペレーターの緊迫した声が基地中に響いた。

『緊急事態発生! 緊急事態発生! 巨大な魔力反応をキャッチ! 識別は . . . . . ジュエルシードです!』

それと同時に結界が展開されました!

現場はポイント\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*です！なお付近に複数の別魔力反応を確認しました！

至急第1班は出動を！」

ポイント\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*—\*\*\*\*\*つて……………  
すずかの家じゃないか!!

……………まさか!

僕は急いでオペレーターにいる司令室に基地内電話を使って連絡を入れた

「00です！第1班の出動は中止！僕一人で行く！」

『何を言っているんですか!?危険過ぎます！許可できません!』

「死人が見たいのですか！下手したら1班皆殺しにされますよ！」

僕は電話の向こうのオペレーターに向かって怒鳴った

すると、電話の向こうでオペレーターの焦った声が聞こえ、別の人の声が聞こえてきた。

『話を聞いたわ00。『奴』なの?』

声の正体は母さんだった。

「分からない…………でも複数の反応って言うのが気になる。もし奴だったら…………」

『……………分かったわ。司令官命令です。00の単独出撃を許可します！1班は基地で待機!』

オペレーターが『何を!』と言っているのが聞こえたが、僕は受話器を乱暴に置き、転送室に急いだ。

転送室から転送され、一番近くのゲートから出た僕は急いで結界に急いだ。

反応があったポイント付近に来ると、かなり大規模な結界が見えた。

「ここか……………なのは、無事でいて！」

僕は結界を壊さないように中に入った。

なのはSIDE

「くっ……」

私は今、かなりピンチです。

始めは、ジュエルシードが発動したのを感じたから反応のあった場所に向かったんだけど、

そこには、すずかちゃんの子猫がジュエルシードで巨大になっていた。

襲う気も無いみたいだから封印しようとした時、どこからか金色の光が飛んできて、

猫に当たった。

飛んできた方向を見ると、

金色の髪して黒いマントを着た女の子と

白い髪をして全身に紅い線の入った……

「え？」

クロヤ君がいた

「へえ……この世界に、こんな素質を持つ子がいたなんて……ビツクリだよ」

白いクロヤ君は私を見て何かを言ったけど、私は目が合った途端、金縛りにあったように動けなくなった。

「(えっ……何?この感じ……背筋が……寒い……)」

こ、怖い……。クロヤ君に似た男の子から、何かよく分からない心配がする……

「まあ、いいや……。フェイトさん、分かってるね?」

「……」。でも、あなたこそ本当なの?あの子を倒せば、ジュエルシードを集めるのを手伝ってくれるの?」

「もちろん!僕は言ったことは必ず守るよ。僕が協力すれば多分2、3日で全部集まっちゃうかもね」

え?ジュエルシードを集める?あの女の子も?私を倒す?



混乱していると、マントを着た女の子がこっちにやって来た

「……………ごめんなさい。あなたに恨みは無いけど、

私に倒されて……………バルディッシュ、お願い……………」

そう言つて、今にも泣き出しそうな顔で持っていた杖を鎌に変えて襲い掛かってきた

「くっ……………」

『Protection』

レイジングハートを前に突き出して何とか防御したけど、バリアが解けた時女の子が消えていた

「え？どっ？…」

『マスター！上ですー！』

レイジングハートの声で上を見ると、鎌を振りかぶつて斬りかかってくる女の子がいた

とっさに私は飛行魔法を使ってその場を離れたけど、女の子は凄いいスピードで向かってきた

「(速い！逃げれない……………)」

追いつかれそうになったとき、

バババババツ!!

銃声が聞こえ、私と女の子の間を薄い緑色の銃弾が通り抜けた視線を地面に向けると、

「どういうつもりなの？フェイトさん……………」

女の子の名前を呼ぶオーツーさんが立っていた。

## Memory 24 始まる悪夢

### オーツ―SIDE

中に入つてすぐに、なのはさんを探すと近くで戦闘を行っている音が聞こえた方に向かうと、

なのはさんがフェイトさんに追い詰められていた。

「あの二人……出会ったのか……ん？」

フェイトさんから並々ならない気負いと覚悟を感じ取った。

今のフェイトさんは人を傷つけてでも何かを成そうとしている……

「一体何が……」

このままでは、両方とも無事じゃすまないので一旦戦いを停止させるためにマシンガンを撃った。

突然の銃撃に二人とも驚いて、一斉にこつちを見た。

「オーツ―(さん)！」

「どういうつもりなの？フェイトさん……」

僕は二人を降ろさせ、話を聞くことにした時

「二人とも一旦降りて……」

「させないよ」

横から誰かの声が聞こえた瞬間、物凄い衝撃を受け吹き飛ばされた。

「うあああつ!!」

僕は派手に木をなぎ倒しながら何とか、バリアを張って踏み止まった。

しかし、あまりの衝撃で左手のバリアは使えなくなってしまった。

「ぐっ……テメエは……やっぱりかΩツ!!」

睨み付けた視線の先にはΩが立っていた。

「へえ……あの一撃を防ぐなんて。正直ビックリ！さすがオリジナル」

驚いたような声色だが、表情では『防げて当然』と言っていた。

「もうちよつと遊びたいけど……今は遊んでる場合じゃないんだよね。」

と言うわけでフェイトさん。

頃合を見て撤退してね。僕はあれを回収して帰るから」

Ωが見ている先には、恐らくジュエルシードの影響で巨大化した猫がいた。

「それじゃあ、回収〜」

「させないー!」

Ωが回収しようと攻撃モーションに入った時、茂みに居たユーノ君が拘束魔法でΩを捕まえた。

「・・・何これ?こんな脆弱な魔法で僕を捕まえられるとでも?」

しかし、Ωがちよつと肩を開く動きをしただけで、拘束魔法は碎け散った。

「えっ!?!」

「邪魔」

そう言つてΩは指先に小さな赤い魔力球を出して、ユーノ君の近くの地面に向けて撃った。

ヒュン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・スト

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
ンツ!!!!

地面が『消えた』

そう表現せざるを得ないほど地面が削り取られていた。

「ユーノ君!!」

ぼくとなのははフェイトさんとΩには目もくれず、ユーノ君の元に急いだ。

「ユーノ君!大丈夫!?しっかりして!」

ユーノ君は攻撃された場所のすぐ手前で倒れていた

「うう・・・ゲホゲホツ!うん大丈夫・・・とっさにバリアで防がず避けて正解だったよ・・・あれを食らっていたら死んでた・・・」

無事を確認して安心したその時、後ろの方で眩しい光が発生した。

「何!?!」

「ジュエルシードが！」

光が収まると、ジュエルシードと猫を抱えたΩが飛んでいた

「こいつはいらない。返す」

Ωは猫をこちらに投げ付けてきた

「えっ!?何を!!」

なのはが投げられた猫を空中でキャッチし、悲惨なことだけは避けられた。

「それじゃ、僕は撤退するよ。フェイトさんは考えて行動してね。それと、協力の件だけど協力してあげるよ。」

君の覚悟は十分に分かったからね」

そう言っつて、Ωは空間転移を使って消えた。

そして、フェイトさんも撤退しようとしたので、僕は大声で呼び止め、叫んだ

「フェイトさん!!アイツと協力しちゃダメだ!!手遅れになると大変なことになる!!今すぐ奴と手を切るんだ!!」

すると、フェイトさんは悲しい顔をして、

「ごめんなさい……………私は…母さんの願いを叶えたい…だから、今は…………手段を選んでられない……………」

そう言っつて、飛び去っつていっつてしまった。

「うう……………くそおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおお!!」

一番恐れていたΩの暗躍を止められなかった僕の悔し紛れの叫びが響いた。

Memory 25 オーツの決意、なのはの思い

「あ、あの・・・オーツ・・・ひう!!」

空気の抜けるような声が聞こえたと思うと、なのはが腰を抜かして座り込んでいた。

ユーノは全身が石になったように固まっていた。

何事と思つてよく自分を見ると、無意識の内にセカンドリミッター・・・

僕自身が大昔から自分にかけている魔力抑制の封印が解け掛かつていて、

漏れ出した魔力の影響で足元が灰のような砂になっていた。

「ごめん・・・。びっくりさせちゃったね・・・」

「う、ううん。それで、オーツさん。今の男の子と女の子は一体誰なの?」

なのはを立ち上がらせるとΩとフェイトさんの事を聞いてきた。

・・・フェイトさんのことは断片的にだけ教えよう。いずれ、また必ず会はずだから・・・

「女の子の名前はフェイトつて言うんだ。なのはさんと同じでジュエルシードを集めている。」

「え!?!あの子もジュエルシードを!?!」

なのはとユーノ君はかなり驚いていた。

「目的は一体何のですか?」

「・・・それは今教えるべき内容じゃない。

ただ、邪悪な事には絶対使わないって断言できるだけだよ

知りたかったら、なのはさん。あなたが聞いてみるしかない。」

「わ、私なの?」

戸惑うなのはに僕は首を縦に振った。

「むしろ、なのはさんじゃないとダメなんです。

あの子・・・フェイトさんも目的があつて集めています。同じジュエルシードを集める者同士、

目的がある者同士。話す権利があるのはなのはさん。あなただけです。

僕は・・・その手助けをするくらいです。『想いは自分の為であつて、誰かに伝えるもの』

フェイトさんにも言った言葉です。話をするかはなのはさん次第です。」

「私は・・・。」

なのはは一度、目を閉じ意を決したように言った

「私は、あの女の子・・・フェイトちゃんと話がしたい・・・。あんなつらそうな目をしていたんだもん、

放つとけないよ」

「分かった。次に会った時、話をしてみてください。僕も全力でバツクアップするから。」

でも、話が出来ないのなら、全力で戦って、自分の想いをぶつけてみてください。

そのときはそれが一番いい方法だから」

「うん」となのはは頷いた。

なのはの意思は固い。必ず、フェイトさんとの対話は成功させて見せる。

「オーツーさん。それで、あの凄まじい力の少年・・・オメガって呼んでましたけど・・・。」

ユーノ君が、さつき自分を殺しかけた奴、Ωについて聞いてきた。

「さつき、ユーノ君を殺しかけたのは、オメガって言うんだ。」

あいつに話は出来ないし、向こうもする気が無いと思う。

あいつは世界を滅ぼすのが愉しみな奴だから」

「え!?!」

「だから警告するよ、絶対に戦っちゃいけない。戦ったら、命の保障は出来ない。」

もし出会ったら、僕に連絡して、あいつは僕が倒さなくちゃいけない」

Ωの凄まじい力を目にしていた一人と一匹は揃って首を縦に振つ

た。

「でも……それ以上に気になることがあるの」

「え?」

なのはが戸惑うような声で聞いてきた

「あのオメガがついていう男の子。何でクロヤ君……あ、クロヤ君っていうのは私の友達なんだけど、

そのクロヤ君にそっくりだったの」

「……っ!」

言葉が詰まった。確かに、Ωは僕のクローンだから似ていても仕方ない。

「……分からない。でも、

その子とは絶対、関係は無いはずだから、

あまり気にする必要はないと思うよ」

我ながら苦しい言い逃れを言ったがなのは「うん」と言って納得してくれたいだった。

「それじゃ、なのはさん。僕は戻ります。なのはさんも速く戻った方がいいですよ」

「うん。それじゃあね」

そう言っつて、なのはと僕は別れた。

「ねえ……ユーノ君。あのオーツーさんの魔力……」

「うん……正直言つて……人の身で出せるようなものじゃない……  
物質が砂になるなんて……聞いたことがないよ……」

「レイジングハート、何か分かる？」

『先程、オーツーから漏れ出た魔力を計測しましたが……途中でか



ら測定不能になりました……

申し訳ありません……』

「ううん。気にしなくていいよ。私なんか腰が抜けちゃったから」

『ただ、漏れ始めた最初のころの魔力で既にマスターの5倍以上ありました。』

濃度は……マスターの砲撃時の2乗倍以上ありました」

「ありえない……なのは持っている魔力の5倍……そんな量なんてもっていたら」

自分の体もたない……それに濃度が2乗倍以上だなんて……」

「オーツーさん……一体何者なの……」

## Memory 26 旅行

なのはとフェイトさんが出会った日からしばらく経った連休の日。僕はなのはたちに温泉旅行に誘われた。保護者同伴と言うことで母さんも一緒に付いて行くことになった。よく考えてみれば、母さんと一緒に出かけるのは初めてのようになる。がする。

一旦、集合場所に車で向かうと、なのはたち高町一家とすずかたち月村一家とアリサがいた。

「はじめまして、私はリーネ・アイリス。クロ君・・・クロヤがいつもお世話になってます。」

母さんがなのはやすずかの家族のみんなと自己紹介も兼ねた話をしている間、

僕はなのは、ありさ、すずがから色々聞かれていた

「あの女の人がクロヤ君のお母さんなの？」

なのはが母さんを指差しながら聞いてきた

「うん。そうだよ」

「綺麗な人ですね。モデルの仕事でもしているのですか？」

「ううん。普通の会社員だよ。モデルとか色んなところからオファーがあつたみたいだけど」

母さん、そういうのは好きじゃないみたいで全部断つたらしいよ？」

すずかの質問には少々困つたが、母さんがこっちに来て実際にあつたことを言ったので

怪しまれることは無かつた

「それにしても、あんまり似てないわね・・・あんたとあんたのお母さん。それとお父さんは？」

アリサが誰でも気付くことを聞いてきた。まあ、これくらいは言ってもいいかな

「そりゃあ、そうだよ。母さん結婚していないし、僕と血は繋がって

ないもん」

「「え!?!」」

「僕は養子なんだ。昔、母さんが外国で彷徨ってた僕を拾ってくれたんだ。」

「だから似てないんだよ」

半分嘘、半分真実を言うところ人は暗い表情になってしまった

「ごめん……そんなこと聞いて」

「別にいいよ。それとそんなに暗くならないですよ。これから楽しくなるのにさ。」

それに、僕は今、母さんやみんなと一緒に居るだけで幸せなんだ。それだけで十分だよ。

『今が大事』でしょ?」

その言葉で3人も、暗い表情から明るい表情になった。

そのあと、親同士の話も終わったみたいで僕たちはそれぞれ車に乗り込み、目的地に向かった。

目的地の旅館に着くと、荷物を預けて温泉に入ることになったのだが、

僕は女子風呂に連れて行かれそうになったユーノ君を確保して男子風呂に入った。

「……きゆう……(た、助かった……偶然にせよ、ありがとうクロヤ)」

「……何かユーノ君が疲れて見えるのは僕だけかな?」

ユーノ君はそんな事を言っていたとか

「ふい……のぼせちゃった……」

長湯をしてしまい、のぼせてきたので温泉から上がって、ユーノ君を連れて

一人ぶらついていると、なのはたちを見つけたが、様子が変だった。

「ん？・・・誰だろう？あの人？」

近くに行くと、どうやら一人の女性に絡まれているらしかった。

「あのー、すみません。何しているんですか？」

「ん？いや、何でもないよ。ただ、知り合いの子と似ていたから、ちよつとからかっただけさ」

そう言つて女性は離れていったが、僕は聞き逃さなかった。

「(あの子の邪魔をするな。邪魔するなら容赦しない・・・か。あの人、アルフさんだな。」

どうりで見覚えがあるはずだよ)」

「もう！何よ今の女の人!!」

アリサはかなり怒っていた。

「いいよアリサちゃん。気にしてないから」

「なのはも！いきなり責められたのよ！気にしないほうが無理よ!!」

今にも暴れだしそうな勢いのアリサ。友達想いもいいけど、少し落ち着いてもらうか

「まあまあ・・・。ここには他のお客さんもいるし、ああいう人もいるんだからさ。」

「ここは落ち着こうよ」

「むうううう・・・・・・」

アリサは納得できないと言つた感じだったが、何とか食い下がってくれた。

その後、僕はユーノ君をなのはに預けた後、こっそり旅館を抜け出した。

「アーマーオン・・・さて、どこかな？」

旅館の近くの森の中。

僕はもしもの時のために持つて来たMMAを纏い、森の中を探していた。

「どこだろうか・・・闇雲に探しても会えるわけないし・・・」

そう愚痴りつつ、目の前の木の枝を払った時、目的の人物とばつたり会つた。

「あ」

突然のことで、奇妙な声を出して僕と目的の人物・・・フェイトさんは固まってしまった。

「やあ、フェイトさん。久しぶりだね。・・・その様子だと、まだΩと手を切っていないね」

「.....」

僕の言葉に、フェイトさんは俯いてしまった

「フェイトさん。あいつは・・・Ωは信用しちやいけない。あいつはとても危険な奴だ。」

「・・・オーツ。これを見て」

そう言うと、フェイトさんは手にしていたデバイスを向けた。すると、

中から封印していたジュエルシードが八つ出てきた

「一つはオーツから貰ったもの、残り七つはΩが探してくれた。Ωは約束を守ってくれてる、

だから・・・」

それでも手を切れ・・・と言いたかったけど、フェイトさんの意志は固い。

曲げることなんて部外者の僕では出来そうに無い・・・

「・・・そっか・・・なら、教えてほしいんだ。フェイトさんのお母さんの願いを」

せめて、これだけは聞かないと。

でも、フェイトさんは首を横に振った

「.....ごめんなさい」

「・・・分かった。これ以上僕が聞くと、フェイトさんにも危険が及ぶ。帰るよ。」

でも、もしΩに何かされそうになったら

「.....」(この波長の念話で僕に連絡して。

それと、あの女の子の魔導士、

この近くに来ているから)」

僕はそう言い残すと、旅館に帰った。



## Memory 27 始まる戦い

「はあ……」

旅館に戻ってきた僕は、ロビーの椅子に座ってため息を付いた  
内心では焦りと不安が渦巻いていた

「(Ω……一体何を考えている。フェイトさんたちを利用してジュエルシードを集めているのは……」

いや、考えるまでも無いか……あいつの望みは破壊と混乱と殺戮だ……

一刻も早くΩを止めなければ……」

「あ、いた！クロヤ君！」

今回の黒幕と見て間違いないであろうΩの撃破を最優先事項と決めた時、呼ぶ声が出て

顔を上げると、なのはたちが手を振りながらこっちにやってきた

「どうしたの？」

「どうしたの？じゃないわよ！一体どこに行ってたの!?探し回ったのよ！」

「まあまあ、アリスちゃん落ち着いて。クロヤ君だって一人静かにしたいときもあるでしょうし」

マズツたな……少し、外に出すぎたのかもしれない……。なんとか誤魔化そう……

「ごめんごめん。今度からは気をつけるよ。それで、何の用？」

「これからみんなで卓球をするから、クロヤ君もどうかなくて？」

卓球ね……。やったことないけど……いい機会だしやろう

「うん。いいよ。僕もするよ」

暗いことを考えていても仕方ない、束の間であつても

今は、なのはたちと過ごすこの時間を大事にしよう。

僕たちは、卓球場に行き、時間を忘れるほど楽しんだ。

ただ、チームに分かれて卓球をしているとき、

僕と同じチームだったのはが浴衣のすそを踏んでしまい、転びそうになったのを僕が支えたら、

僕がなのはを抱き寄せているみたいな格好になってしまい、お互い真っ赤になり

そのあと試合どころではなかったことを記しておこう……あー、恥ずかしかった……

深夜

みんなが寝静まったころ、誰かが部屋を出て行く気配がした。

案の定、なのはだった。少し前に魔力波の乱れを感じたから、その場所に向かったのだろう。

「(さて、出勤しますか)」

僕もなのはが出て行った後、こっそりと後を付けた

なのはSIDE

ジュエルシードの反応があり、私は反応のあった場所に行くと、ちようど池にかかる橋に着きました

そして、その橋の真ん中にはジュエルシードが、そして反対側には……

「フェイトちゃん……」

「……また会ったね」

今、一番会いたくて、話がしたかった女の子、フェイトちゃんがいました。

そして、その隣には今日、旅館で私に警告してきた女の人がいまいた。

「二体、何のためにジュエルシードを集めているんだ！」

「さあね。教える理由が無いね」

ユーノ君の質問を受け流すと、女の人が狼の姿になった

「やっぱり、あいつはあの女の子の使い魔だ！」

「使い魔？」

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命体。製作者の魔力で生きる代わりに、

命と力の全てを掛けて守ってあげるんだ」



そう言って、使い魔さんははっきりと敵意を向けてきた。

「フェイトちゃん、どうしてもジュエルシードを集める理由を教えてください。くれないの……」

「うん……『想いは自分の為であって、誰かに伝えるもの』ってオーツーも言っていたけど、

これだけは別。話すなって言われているから」

「……オメガっていう男の子に？」

フェイトちゃんは無言で俯いた。

話ができないのなら……

「分かったよ。フェイトちゃん、お互いのジュエルシードを賭けて全力で私と戦って。」

私が勝ったら理由を教えてください」

「……いいよ。これでいいの？オーツー？」

フェイトちゃんが言うのと、後ろの茂みが揺れて、オーツーさんが出てきた。

「……うん。話では解決できなかったみたいだね……」

それなら、僕は何も口出ししないし手も出さない。

二人とも、全力でお互いの想いをぶつけ合って。僕は……邪魔が入らないようにするから」

そう言っていると、オーツーさんは銃を下げて、少し離れた場所に行った。

「さて、あたしとあなたは別の場所で戦ってもらおうよ」

「……分かった。なのは、頑張って」

ユーノ君とフェイトちゃんの使い魔は転移魔法を使ってどこかに行ってしまった

「……こっちはじめよう……」

「……うん。それと、こんな時にだけど、私は高町なのは。なのはって呼んでくれればいいよ」

「……私は……フェイト。それじゃ、行くよ」

そう言って、私とフェイトちゃんはお互いにデバイスを構えた……

## Memory 28 勝負の行方

綺麗な夜空の下、桜色と金色の閃光が何回も当たり、弾けている。

「やあっ!!」

「くっ!...はああっ!!」

見上げる僕の目には、スピードを生かした戦術で接近戦が苦手であるのはを

追い込むフェイトさんが見えた。

しかし、なのはもただ押されるだけじゃなく、不利と分かった途端に距離をとった。

「デイベインシューター!!」

牽制に魔力弾を撃つなのは。

フェイトさんは軽く避けるが、追尾機能を持つ弾になのはとの距離を詰められないでいた。

「くっ!...このおっ!!」

避けても埒が明かないと思つたフェイトさんは、追いかけてくる弾を切り裂いた。

その隙に、なのははデバイスをフェイトさんに向け

「デイベインバスター!」

以前、未完成だった技を放った。

以前と違う点は、戦闘継続時間を延ばすため威力を落とし、短い時間で撃てるようにしたところ。

たった数日でここまで進歩できる能力を持つ人を見たのは、久しぶりだし稀だ。

しかし、フェイトさんはその攻撃を読んでいたらしく、さっきよりも速い高速移動魔法を

使つて回避し、反撃してきた

「フォトンランサー!...ファイア!!」

いくつもの金色の魔力弾がなのはに向かって飛来した

「く!...」

とっさにプロテクションで防ぐが、その隙にフェイトさんが再び接

近してきた

「やあああああつ!!」

何とか、フェイトさんの一撃を防いだなのは。

そのまま、再び一進一退の攻防が続いたが、突然、フェイトさんが距離をとった

「はあっ……はあっ……流石だねフェイトちゃん……」

「なのはこそ……あの一撃を防ぐなんて……」

どうやら、フェイトさんの予想以上になのはが耐えるので、体力がなくなってきたらしい。

そんな9歳の女の子がする戦いとは思えないものを見守っていると、

「へえ〜……すごいなああの二人。ここまで出来るなんて」

軽い調子の声が聞こえ、声が出たほうに目を向けると

「Ωツ……」

Ωが楽しそうに空中であぐらを掻いて座っていた。

「やつほ〜。こんばんわ、オリジナル」

「Ω……手出しする気か？手を出すって言うなら、この場で殺す」

Ωを睨みつけながら銃口を向けると、オーバーにのけぞった

「ストップストップ！そんなことしないって。こーんな楽しいゲームをしているんだ、

水差すなんて勿体無い。僕はここで観戦するだけだよ。

それに……今ここで僕と戦ったら、あの二人もこの世界も無事じゃすまないよ?」

「ちっ……」

Ωに尤もなことを言われ、僕は大人しく引き下がった

Ωはどこからか取り出したポップコーンを食べながら、二人の戦いを見ていた。

視線を戻すと、どうやら決着が付きそうだった

二人は、離れた位置に留まり魔力をチャージしていた

「デインバスター!!」

「サンダースマッシュャー!!」

お互いに大技を放ち、撃ち合いの状態になった

「ううっ……」

「え……い!!」

しかし、威力ではなのはの方が上らしく、徐々にフェイトさんが押されてはじめた

その時、

「今!!」

「え?」

フェイトさんは砲撃を止め、高速移動魔法を使いなのはの真上に移動した

突然のことになのはは対応できず、棒立ちの状態になっていた

そして

「……負……け?」

「……私の勝ち……みたいだね」

なのはの首にフェイトさんのデバイスの刃が当てられ、勝負が付いた。

レイジングハートからジュエルシードが出てきて、フェイトさんのデバイスに吸い込まれた。

「んんん……はあゝゝ、楽しかった」

Ωは大きく伸びをして、その場から立ち去ろうとしていた

「珍しいな……何もせずに行くなんて」

「んんん?別にゝ。久々に楽しいものを見せてもらったからさ。でも、いつか二人とも

ズタズタに引き裂きたいなあゝ……」

「クソが!!」

銃口を向けて発射しようとした時、Ωは空間転移で転移寸前だった「実は、もう仕込みは終わっているんだよねゝ。後は、時間が経てば勝手に始めてくれる」

「フェイトさんたちに何をした……！」

「ヒヒツ!! さあくねえ? 自分で考えれば? それじゃ、ばいばい!」

そう言い残して、Ωは転移した。

「(手遅れか……)」

僕の中に、絶望が広がった

でも、

「(諦めてたまるか……。なのはだって、フェイトさんの強さを見ても諦めなかったんだ

ずっと長い時間を生きてきた僕が真っ先に諦めてどうする? 必ず、Ωを止める……)」

なのはたちの戦いや意思を見てきて、まだ希望が消えたわけではなかった。

## Memory 29 暗雲

なのはSIDE

「……………私の勝ち……みたいだね」

フェイトちゃんがそう言うと、レイジングハートからジュエルシードが出てきて

フェイトちゃんのデバイスに吸い込まれていった。

「……………さようなら」

そして、そう言い残してフェイトちゃんは飛び去って行ってしまった

わたしは飛び去っていくフェイトちゃんをただ呆然と見ているしか出来ませんでした。

地上に戻ると、オーツーさんが何も無い空間を睨みつけていた

(ヘルメットを被っているから分からないけど……………)

顔で唯一見える口元は、歯を食いしばっていてまるで、何かに耐えているような

悔しがっているような感じがしました。

わたしに気付いたオーツーさんは、ゆっくりとこっちに向かって歩いてきました

「お疲れ様。いい戦いだったね。負けちゃったのは残念だけど」

「……………ごめんなさいオーツーさん。今まで封印したジュエルシード、全部取られちゃった……………」

流星に怒られると思っていたけど、オーツーさんは優しく頭を撫でてくれた

「気にしなくていいよ。僕たちの基地に1個、なのはさんから預かっているのがあるよ。」

今度はそれを使ってフェイトさんにリベンジすればいいし、見つかってないのを探せばいいのだから、

フェイトさんにリベンジできる機会はまだあるよ」

やっぱり、オーツーさんは優しい……………

何だろう・・・オーツーさんと一緒にいるとドキドキする。  
このドキドキって何なのかな？

「うん。次は絶対勝って、フェイトちゃんの目的を聞いてみる」  
「そうそう。その意気だよ」

意気込んでいると、近くに魔法陣が現れて、その中からユーノ君が出てきた

「お疲れユーノ君。大丈夫？」

「何とかね・・・。ごめん、負けた」

「気にしなくていいよ。なのはさんにも言ったけど、まだチャンスはある。次の機会についてことで」

ユーノくんを連れてくると、オーツーさんは「速く戻った方がいいよ」と言われたので、

わたしとユーノ君は、怪しまれないようにこっそりと、素早く旅館に戻りました。

????

時間を少し巻き戻し、なのはとフェイトが戦う少し前

「やつほく。元気にしてたかな？」

「・・・何の用？」

Ωは以前、訪れた女性の前に再び現れていた

「別に、用事って言うほどの用事じゃないんだけどね、今後のこと言いたいことがあってさ」

「手短かに言いなさい」

Ωは一息置くと、残忍な笑みを浮かべて

「じゃ、お人形になってもらおうかな？」

「何を言ってる・・・うっ・・・!!」

女性が問い詰めようとした時、突然、周りから黒いバインドのよう  
なものが現れ、女性を拘束した

「そろそろなんだよね・・・俺の遊びが始まるのは。あんたとあんたの

娘さんのクローンには

俺の遊び道具になつてもらおうよ」

「くっ……騙したのね……協力してやると言ったのは……」  
「騙してなんかないよ。言ったはずだよ『集めるのに協力してあげる』って。」

俺は集めるのに協力してあげると言ったけどその後のこととかは、何も言っていないよ」

「このっ……!! こんなもの！」

女性は黒いバインドを解除しようとするが

「……解除できない!」

「残念!! それ『影繩』っていうんだ。影に俺の意思を送り込ませて操る技。だから、

その影は俺自身でもあるんだ。まあ、お遊びで使う技だけだね」

「ッ……」

女性はこのとき気が付いた。目の前の少年は、人の皮を被った化物である、

そして自分を遥かに上回る魔導士であると

「それじゃ、お人形になつてもらおうかな」

「くっ……フェイトやアリシアに手を出したら、あなたを殺すわ!!」

「ん〜。そんな状態で言われてもなあ。まさか、自分で洗脳を解除できるとって思ってる？」

無理無理。その影すらまともに解除できないんでしょ？

それに、俺がやろうとしているのは洗脳じゃなくて『意識の書き換え』だよ。

つまり、この次に目が覚めたとき、あなたは姿は同じでも全くの別人になつているんだよ？」

Ωはあきれた風に言った後、女性の額に指を当てた

すると、赤黒い魔法陣が現れ、女性の中に入っていた

「うううう……ああああああああ!!」

女性が苦しむ様子をΩは待ちきれない様子で、楽しそうに見ていた



「(アリ・シア・・・フエイ・ト・・・ごめ・ん・な・・・  
さい・・・・)」

薄れゆく意識の中、女性・プレシア・テストロッサは二人の娘に  
自分の過ちを謝りながら

その意識を書き換えられた

「んく？出来たかな？さあくとと、これからどうしよつかなこれ。娘  
と殺し合わせるのもいいけど、

ここは二人仲良く・・あの白い魔導士とオリジナルに戦ってもら  
おう。ヒヒツ・・楽しくなってきた」

Ωの狂った嗟い声が空間に響いた。

## Memory 30 改修案

旅行から帰ってきた次の日。

いつものように基地に行くと司令室に召集が掛かったので司令室に向かった。

司令室に入ると、母さんと新島さんが既にいて待っていた

「来たわね。さて、始めるわ。今日集まってもらったのは、今後の捜索についてよ。」

実は、もうすぐで今捜索しているこの付近は完全に調べつくしてしまうの。

残っているのは都市部と海、後方の山。

山と都市部は今のままで捜索できるけど……問題は……」

「海……ですよね」

「そう……。MMAは自分で言うのもなんだけど優秀な機械だわ。だけど、実はまだ完全とはいえなくて今はまだ陸上でしか運用できないのよ。」

で、今回の議案なんだけど……水上戦用装備と水中戦用装備を開発するんだけど、  
どうなのがいいかしら？出来れば、構造が簡単なのいいわ。

今、空戦用のエナジーウィングを開発中であまり手が割けないのよ」

水中戦と水上戦の装備か……良いのがあったっけ？

あんまり水中とかは戦う機会がないからな……」

「うーん……」

僕はペラペラと記憶の書を捲りながら条件にあった装備を探していた

「前線に立つ者の意見としては……出来れば、  
グライディングホイール  
G Hを動かすのと連動しているのが良いと思います」

「確かに……複雑になりすぎるのは良くないわね……クロ君、何かあった？」

「……いくつか候補があるけど。条件に合うのは……この二つ

だね」

そう言つて僕は、『LFO』と呼ばれる人型ロボットが使用する『リフボード』と言う

サーフボード状のパーツと水中用MS『アクアジム』が背負っている『ハイドロジェット』を

二人に見せた『リフボード』は空中用の装備だけど、形状が形状だから簡単な改造で水上用に変更できると思う。

「うーん……この二つを一つに集約するのは少し難しいし、時間も掛かつちやうから

別々にした方がいいわね。まず試しに、この『リフボード』って言うのを開発するわ。」

水中は……MMAに防水加工用のデータを近々アップデートするわ」

母さんにリフボードの設計図を見せていると、新島さんが追加でお願いをしてきた

「リーネさん。実は今、班の抱える問題として、戦闘継続時間が短いというのがあるんです」

「あー……やっぱり？元々、こっちの人は魔力が少ないからそろそろ問題になるかなあ〜って思つてはいたけど」

「はい。今、訓練では瞑想などの精神修行を取り入れているのですが……」

精神修行を取り入れさせたのは、僕の意見だけ……

これって数年以上続けないと効果が出ないんだよなあ……

「MMAの消費魔力を減らすための改造も考案中なんだけど……もう少し掛かるわ……」

流石に開発がこうも重なるかね……」

「そこなんですが……自分に一つ案があるんです」

どんな案だろう？

母さんと僕は新島さんの案を聞いてみた

「MMAの武装は自身の魔力が動力源です。」

しかし、MMAのGHやシールド、装甲を維持するのにも魔力が使

われています。

これだと、自分たちの魔力が長持ちしません。これが今、班が抱えている問題です」

「ええ、その通りよ。今の方針は基本的な機能の消費魔力をいかに減らすことなのよ。」

でも、さっきも言ったけど開発が重なってなかなか進んでないけど」

「そこなのですが・・・武装に使う魔力を別のところから供給できれば、と考えたんです。」

例えば、武装にエネルギータンク的な機能を付与させて、使用時はタンク内の魔力を使用し、

タンクが空になったら自身の魔力を使用するというのは？」

あれ？それと似たような機構を知っているぞ？何だったかな？

「それいいわね！画期的だし、構造も簡単だし既製の武装を改造するだけで良いわ！」

「それって、この機構とそっくりだね。MSの武装に採用されていた『Eパック方式』

これを使っては？」

「どれどれ・・・うんうん・・・なるほど・・・へえ・・・うん！バツチリ！」

これなら今日中に出来るわ。二人ともありがとう！

それじゃ、早速取り掛かるからMMAを貸してちょうだい」

僕と新島さんがMMAを渡すと、母さんはすぐに司令室から出て行ってしまった

「相変わらず、研究や新技術に目が無いなリーネさんは」

「ははは・・・母さんは根っからの研究者気質と技術者気質だからね」

その後、僕はMMAが無いので今日は筋トレをするだけにしておいた

## Memory 31 反動

MMAの改修を行ってから数日、僕たちは毎日ジュエルシードを探し回ったが

一つも発見できないでいた。

ユーノ君が言うには『少し探す範囲を広めた方がいいかもしれない』とのことだった。

と言うことで、今、都市部のエリアを捜索中。

今日は久々に01と02のコンビが捜索に参加している。

「01。そっちはどうですか?」

『こちら01。まだ見つかっていない。02、そっちはどうだ?』

『こちら02。同じくですよ隊長。探す範囲が広いから進まないって進まないって・・・』

02の愚痴に僕と01も同感だった。

基地にあるレーダーは捜索魔法と違って大雑把な範囲しか捜索できないうため、

指定された範囲を僕たちがくまなく捜索する必要がある。

「なのはさん。そっちはどうですか?」

『うーん。まだ見つからないよ。ユーノ君が捜索魔法を使っているけど・・・ツ!!』

なのはさんに連絡を取っていると、なのはさんの近くからジュエルシードの反応があった。

『見つけた!オーツーさん、先に行ってるね!』

「了解!僕らもすぐに向かう!」

現場に向かうと結界が張られており、僕たちは結界を破壊しないように慎重に中に侵入した。

結果の中では、またなのはさんとフェイトさんの戦いが始まっていた。

「ディバンシューター!!」

「フォトンランサー!!」

激突しあう閃光。その光を見て01と02は啞然としていた

「凄い・・・あれが子供の・・・女の子のする戦いか？」

「・・・俺たちの数倍以上強い・・・こりやあ、手を出すなんて出来ないな」

二人の言葉に激しく同意した。なのはさんは、さらに強くなっている。

以前よりシューターの操作が鋭く速くなっている。さらに、

「くっ・・・バルディッシュユ！」

フェイトさんがなのはさんが放ったシューターをランサーで迎撃するのを諦め、

バルディッシュユでシューターを破壊したとき

「レイジングハート！」

「え？」

「ディバインバスター！」

以前は使えなかった高速移動を使い、なのはさんがフェイトさんの後方に回り込み一撃入れた。

旅行の後、時間があればずっとユーノ君と特訓していたとは聞いていたけど・・・

なんて成長速度なんだ・・・

しかし、爆風の中から出てきたフェイトさんにはあまりダメージは無いみたいだった。

「やるね・・・以前よりずっと強い」

「特訓したもん。ずっとフェイトちゃんに負けっぱなしだと悔しいからね」

お互いの強さに驚きあい、再びデバイスを構えたとき、異変が起きた。

ドクンツ!!!

「ツ!!」

低い音が聞こえ、音のした方を見るとジュエルシールドが激しい光を

発していた。

『まずい！ジュエルシードがみんなの魔力に反応して活性化している！』

ユーノ君の慌てた声の念話が聞こえた

どうも、目の前で戦っていたなのはさんとフェイトさんの魔力と

ここから少し離れたところで戦っていたユーノ君とアルフさんの魔力に反応して

ジュエルシードが活性化、暴走の一手手前らしい。

「は、早く封印しないと！」

『ダメだよなのは！今、無理に封印しようとするとなのはも巻き込まれて危険だよ！』

「じゃあどうすれば!？」

封印に行こうとしたなのはさんをユーノ君が引き止めた時、

『フェイト！無理だよ！』

アルフさんの叫びが聞こえ、フェイトさんを探すと

「フェイトさん！ダメだ！引き返して!!」

無謀にも、フェイトさんがジュエルシードに向かっていった。

バリバリバリツ!!

フェイトさんに激しい稲妻が襲い掛かる

「くっ・・・あと少し・・・」

稲妻に耐えながら、ジュエルシードに手を伸ばした時、

バチンツ!!

一際強い稲妻がフェイトさんを直撃し、フェイトさんを吹き飛ばした

「キヤアアアアアア!!」

「フェイト（さん）（ちゃん）!!」

吹っ飛んだフェイトさんは、何とか空中にいたなのはさんがキヤツチし、

とんでもないスピードで来たアルフさんに渡していた。

「・・・・・・・・使いたくないけど・・・・・・・・やるしかない・・・・・・・・」

僕は覚悟を決め、腰に付けていたホルダーから『記憶の書』を取り

出した。

「ユーノ君！アルフさん！結界を出来る限り硬くして下さい！」

「何をやる気なんだい!？」

「ジュエルシードを沈静化させます」

「そ、そんなことできるわけないよ!？」

「無理は承知！でも、やるしかない」

僕は記憶の書を右手に持ち、キーワードを言った

『メモリーロード』

すると、記憶の書が独りでに開き、僕が必要としている技の情報が入ってきた

空いている左手にエネルギーが集まっていき、光の球が出来始めた  
「食らえ!!」

光の球が出来た瞬間、左手を前に押し出すと溜まったエネルギーが  
発射され、

ジュエルシードを飲み込み、眩しい光に包まれた

眩しい光が収まると、そこには沈静化したジュエルシードが落ちて  
いた。

「(なんていう技だったっけ？確か・・・かめはめ波だったっけ?)」

片手版とは言え・・・ちよつと加減し損ねたな・・・何て場違いなことを  
思っている・・・

ブシャアア・・・

「ぐっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

使った左手が裂け、血が噴き出してきた。

手の装甲の隙間から血が流れ出てきて地面に赤い水溜りができて  
きた。

記憶の書を使うと、反動として使った技に応じたダメージを受ける  
のは分かっていたが・・・

痛いものは痛いな、やっぱり・・・

「オーツー(さん)!!」

振り向くとなのはさんと回復したらしいフェイトさん、遅れて01  
と02が来た。



「オーツーさん……一体何なの今の？」

「……僕のちよつとした秘密かな？」

「あ……オーツー……その手……」

フェイトさんが僕の左手を指差して青ざめていた。

「反動でね、大げさに見えるだけで何ともないよ。大丈夫。それよりもフェイトさん……」

僕はフェイトさんを見て、きつめの口調で言った

「さっきの、軽症で済んだからいいけど、下手したら死んでたよ？」

「ツ!!」

「集めるのに必死になってるのは分かる。けど、今回は無茶すぎだ。

もう少し自分のことも考えようよ。目的、まだ達成してないんでしょ？」

「……うん……」

「だったら尚更だよ。目的も達成できずに力尽きるなんて後悔はしたくないでしょ？」

「……ごめんなさい」

「分かればよろしい」

フェイトさんが謝ると、僕は落ちていたジュエルシードを拾い、

「これは一旦、僕たちが預かる。今日の勝負は、またいつかしてほしい。今日はお互い退こう」

「うん。フェイトちゃんもそれでいい？」

「……うん」

「それじゃ、また会った時、今日の続きをしようね」

「うん。今度はそう簡単には取らせないよ」

僕の宣言に誰も反対することなく、お互いに言葉を掛け合った後、解散となった。

## Memory 32 接触

ジュエルシードを預かって二日目の夕方、僕となのはさん、ユーノ君は公園にいた。

向かい合うように立っているのは、フェイトさんとアルフさんのコンビだ。

どうしてこうなったかと言うと、

数分前、基地のレーダーに微かなジュエルシードの反応を確認し、なのはさんに連絡して出動。

反応があつたこの公園で、ぼったりフェイトさんと鉢合わせ。

この前の続きをしようという事になり、今に至る。

「また会ったね、フェイトちゃん」

「なのはも・・・こんなに早く会えるなんて思ってたなかった」

向かい合う二人の間には淡く光を発しながら浮かんでいるジュエルシードがあつた。

「二人とも、準備はいいかな？」

「うん」

「こっちはいつでも」

「それじゃ、続きって言うことで。僕は今回も手は出さない。全力で、思う存分戦つて」

僕が離れるのを合図として、二日前の戦いが再開された。

しかし、戦いが始まって数十分もしないうちに異変が起きた。

『転移反応！何か転移されてきます！』

オペレーターの驚いた声が聞こえ、辺りを見回すとなのはさんとフェイトさんが

まさに切り結ぼうした瞬間、二人の間に、一人の少年が割つて入り二人の攻撃を止めた

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！これ以上戦闘を行うなら、そちらを拘束する！」

管理局……！ 面倒なのが……！。

「なのはさん！フェイトさん！離脱して！！07、スモークグレネード！」

「おう！」

僕が叫ぶと、公園の林の中に待機していた今日捜索担当の07と06が現れ、

07がスモークグレネードを発射して三人の周りに煙幕を張り、その間に06が

浮かんでいたジュエルシードを確保して封印ケースの中に入れた。

フェイトさんとアルフさんは、煙に紛れて高速で離脱したが、

なのはは煙を吸い込んでしまい離脱が遅れてしまった。

クロノと名乗った少年が煙を吹き飛ばし、手に持っていたデバイスを

僕たちと合流しようとしているのはに向けた瞬間、

「動くな!!」

鋭い声と共に、基地に待機していた01たちが現れ、クロノに銃口を向けていた。

「こちらはWDDO、この世界の次元防衛隊だ！その少女を拘束、危害を加えるつもりなら敵対の意思があると判断し攻撃する！」

「それはこちらも同じだ！こちらは時空管理局、この世界は管理局の管理下にある！」

これ以上の行動は、敵対行動とみなす！」

「こちらはこの世界の次元防衛に関し、全ての権利を有する！そちらの意思に従う気は無い！」

どちらも一歩も譲らず、険悪な空気になってきたところで、

『両方ともストップ！一旦、武器を下ろしてください』

突然、空中にモニターが現れモニターに映った女性が、この場の空気をクールダウンさせた

「リンディ提督！」

『クロノ君、少しクールダウンして。WDDOでしたね？』

私たちは、そちらと敵対する気はありません』

「……そちらの、この世界に来た理由を答えてもらおう」

『高町なのはさんとユーノ・スクライアさんにジュエルシードについてお話を聞くために』

やってきました。そのため、二人には一度、こちらに来てもらいたいのですが』

「……む……む……」

「01さん。ここは管理局に従ってください。管理局と敵対するのは危険です」

ユーノ君が01にここは折れてもらうように言った。

「……分かった。そちらに二人を行かせよう。しかし、まだそちらを信用していない。」

だから、護衛として一人随伴する」

『分かりました。では、転送しますので護衛も含めて前に出てくださ  
い』

モニターが消えると、地面に魔法陣が現れた。

「00。高町さんの護衛、頼んだぞ」

「了解」

そう言っつて、僕はなのはさんたちとともに転送された。

## Memory 33 管理局

なのはSIDE

えっと……わたしたちはクロノっていう男の子に連れられて転送されました。

転送が終わって見えたのは、映画で出てくる宇宙船のような感じの場所に着きました。

「……この大きさと動力炉の反応からすると……中型の時空巡航艦？」

「その通りだ。ここは時空管理局所属巡航艦『アースラ』の内部だ」

何かオーツーさんとクロノっていう男の子と難しい話をしていきます。

「(ねえねえ、ユーノ君。時空管理局って?)」

「(管理局って言うのは、なのはたちの住む世界を含めた、たくさんの次元世界を管理している

なのはの世界で言う警察とか裁判所が合体したみたいな組織のことだよ。

オーツーたちWDDOと似た役割だね)」

「(たくさんの次元世界?えっと、パラ……何とかって言う感じかな?)」

「(パラレルワールドのこと?うーん、少し違うけど、そんな感じって思ってくればいいよ)」

ユーノ君と念話で話をしてしていると、クロノ君がこつちを振り返りました

「これから艦長とあってもらうんだが、その前に君はいつまで変身してるんだ?」

「あつ、すみません。この姿でいることが多かったから。今、解除します」

すると、ユーノ君が立ち上がって光に包まれました。

そして、光が収まった時そこには……

「ふう。この姿に戻るのは久しぶり……って、なのは?」



そして、オーツーさんはその箱に銃を向けて、  
ドドドドツ!!

使い物にならないくらい壊してしまいました。

「技術を盗まれるわけにはいかない。とりあえず、一番危険なラン  
チャーは破壊した。」

銃にはセーフティを掛けて預ける」

「ああ・・・分かった。(今の銃弾は魔力だった・・・あんなスーツ初め  
て見た。少なくともこの世界の技術じゃない)。一体、どこの誰が開  
発したんだ?)」

クロノ君はオーツーさんから銃と剣を受け取ると、再び歩き出した  
ので後についていきました。

しばらく歩くと、少し大きめの扉の前に来て立ち止まりました

「ここが艦長室だ。失礼の無いように」

わたしたちが頷くと、クロノ君は扉を開けて中に入っていくまし  
た。

後にとくと、わたしは部屋の中を見てビックリしました

何故なら・・・畳、盆栽、あれっってお正月に出てくるものだね?そ

の他 ect ect.....

とにかく、

「日本の文化を一箇所に集めてみましたって感じなの.....」

「・・・筋金入りの日本人なら怒り狂い出しそうだね.....」

「?」

その部屋の真ん中でモニターに出てきた女の人が?を浮かべて正  
座していました。

「『アースラ』にようこそ。私が艦長のリンディ・ハラオウンです」

「改めて、僕は時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ」

あ、同じ名前。親子なんだ

「わたしは高町なのはです」

「僕はユーノ・スクライア」

「WDDO行動隊『第1班』所属、ナンバー00。本名は守秘義務の為

明かせない。階級は曹長。オーツーって呼んでくれればいい」  
自己紹介も終わって、お互いの情報を交換し合いました。

「以上が事の全てです」

「なるほど……。その心意気は立派だけど……」  
「無謀すぎる」

ユーノ君の説明を聞いた後、出てきたのはその言葉でした。  
そして、さらに驚いたのは今、わたしたちが集めているジュエル  
シードの危険さでした。

なんでも、とてつもないエネルギーの結晶体というのがジュエル  
シードの正体で、

わたしたちの世界に大きな被害を起してしまう次元震、さらには  
ユーノ君やクロノ君の世界も

一緒に巻き込んで崩壊させてしまう次元断層を引き起こしてしま  
うかもしれないというものでした

今まで集めていたものがこんなに危険だったなんて……  
わたしはこのことを聞いて、背筋がゾツとしました。

「これより、ジュエルシードの回収は時空管理局が全権を持ちます」  
「君たちは、今回の事から手を引いて普通の生活に戻るべきだ」

「でも！」  
「ユーノ・スクライア。君の一族はこういう事に詳しいはずだ。

尚更、今回のことの重大さは分かるはずだ。それに、報告の中に  
あつたΩという少年。

もし、それが真実なら尚のことだ」  
ユーノ君が反抗したけど、クロノ君にきっぱり断られちゃっ

た……

「まあ急に言われても気持ちの整理も出来ないでしょう。一度家に  
帰って、よく考えてください。それから、もう一度改めてお話し  
しましょう」

そうしますと言おうとした時、

『ふーん。相変わらず汚いと言うか、セコいわね、管理局ってさ』



突然、女の人の声が響きました。

「誰だ！」

すると、部屋の真ん中にモニターが現れました。

モニターには女の人が映って……………

「え？」

モニターに映っていた女の人は、綺麗な銀色の髪で翡翠色の瞳をした、

「クロヤ君のお母さん？」

『はい。久しぶり、高町なのはさん』

人違いじゃない、正真正銘のクロヤ君のお母さん……………リーネさんでした。

## Memory 34 協力

オーツースIDE

突然の母さんの乱入で、今、この場はかなり混乱している。  
なのはなんて、目が点になって唾然としている

「何者だ！」

クロノ君が問いかけると、母さんは少し口元をニツと上げて答えた  
『WDDO司令官、リーネ・アイリスよ。そっちにいる00の上司になるわね。』

いや、プロテクトが簡単で簡単で、数秒で突破できちゃった。

そっちのオペレーターも優秀だけど、このリーネさんに勝つのは  
まだまだだね』

「リーネ・アイリス？まさか……」

母さんの名前を聞いた途端、クロノ君とリンデイさんの表情が変わった。

「もしかして、あなたは……技術開発局とロストログリア研究部の局長  
だった、

リーネ・アイリス一佐ですか？」

「あの、『管理局の天才』の？でも、突然失踪して、現在は行方不明な  
はず……」

『あら？知っているの？そうよ、そのリーネよ。それよりも』

母さんは自分の経歴のことを置いておいて、本題に入った

『相変わらず、することが汚いわね。手を引けつていうなら強制的に  
追い払うものでしょ。』

それなのに、一度よく考えてって……それって遠まわしに協力してつ  
て言っているものじゃない。』

「何を言って……」

『あなたは黙っていて。私は艦長と話をしているの』  
「……………」

反論しようとしていたクロノ君を黙らせ、母さんはリンデイさんを見  
ていた。

リンデイさんは黙っていた

『大方、戦力が足りないから自発的に協力するようにしたかったのでしょうか？』

誘導尋問みたいなものね。ロストログアを封印したり、暴走体と戦うのに戦力が多いことに

越したことは無い。しかも、高町さんは稀に見る高い魔導士としての才能を持っている。

これを管理局としては見逃すはずがないでしょ？』

室内が、とても静かになっていった。

なのはとユーノ君は真剣な表情で聞いており、クロノ君、リンデイさんは真っ直ぐ、

モニターの母さんを見据えていた。

やがて、リンデイさんは短くため息を吐いた。

「ふう……その通りです」

「か、艦長!!」

クロノ君が反論しようとするが、リンデイさんは手で制した

「リーネ一佐の言う通りです。現在、この場にいる人員でジュエルシードの封印が出来るのは

私とクロノしかいません。他にジュエルシードを集めている者が

いる以上、回収及び封印は迅速に行われなければなりません。」

『あれ？やけにあっさりと言ったわね？』

「相手が相手ですし、下手に隠して信用を失うよりはいいですから」

『ふふっ、あなたは管理局の人間では珍しく信用できるわ』

険悪な空気が消え、少しだけ穏やかな空気になった。

どうも、この人は信用できるみたいだ。母さんが言うし、僕もそう思う。

いざとなったら……方法はあるし。

『で、そちらとしてはどうしたいの？』

「こちらとしては、なのはさんやユーノさん、そしてあなた方に協力してもらいたいのですが」

『そう。じゃあ、聞くけど……なのはさんはどうしたいの？』

話をなのはさんに振ると、なのはさんは一瞬戸惑ったけど、はつきりと自分の思いを言った

「わたしは……協力したいです。みんなを守りたいし……フェイトちゃんとの約束もあるから」

『……なのはさんの意思はよく分かったわ……でも』

母さんは一拍おいて、残念そうに言った

『でも、私たちWDDOはあなたたち時空管理局には協力できません』  
『どうしてですか?』

『この組織は、あらゆる国家、企業、宗教、政治から独立することを条件に設立されたの。』

WDDOは一応、国際連合という組織の極秘組織だけど実際のところほぼ独立した組織なの。

そんな組織だし、見ての通り未知の技術の塊。異世界人ってバレたとき提出した技術も全部、

軍事転用出来ないものしか渡してないからその他の技術はみんな喉から手が出るほど欲しい。

その独立性を放棄したら、どうなるか分かるでしょ?』

そう。例外を作ると、それに付け込んで様々な勢力があの手この手で技術や協力を迫ってくる。

そうなれば待っているのは……戦争だ。

母さんはこのことを何より恐れている。だから、協力を申し出ることは絶対にできない。

「そうなのですか……」

「大きすぎる力は、災いの元ということか……」

「そんな……オーツーさんたちは協力できないんですか……」

みんな、落胆の声を上げた。

しかし、母さんが

『でも、抜け道があるの』

「「え?」」

母さんが抜け道について説明した。……というよりどちらかという

と屁理屈だが。

『このWDDOの使命は『私たちの住む世界の人々を次元犯罪から守ること』なの。』

その目的を少し屁理屈気味に解釈して『この世界の住民である高町なのはさんを守る』

っていう名目でなら、なのはさんを挟んで協力することは出来るわ』

「じゃあ……」

『ええ。今言った目的でなのはさんを介して協力します。でも、そちらに指揮権は渡せないし、

こっちの任務が優先だから、そこを気をつけて』

決まったかな。少しセコいかもしれないけど気がしないが一番。

『と、こっちで勝手に進めちゃったけどなのはさんはこれで良い？』

「はい。リンデイさん、クロノ君、オーツーさんよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

「よろしく」

「またよろしく」

まあ……当面の任務に変わりはないさそうだ。

それよりも……フェイトさんたちは無事だろうか……

アースラブリッジにて

「すごいよクロノ君。さっきの戦闘映像から分析したんだけど、なのはちゃんと

黒い魔導士の女の子、二人ともAAAランクだよ。最大出力だとSランクに届くかもしれないよ」

「すごいな……。魔法の概念が無いこの世界にこんな素質を持った人がいるなんて」

ブリッジ担当官の一人のエイミイの分析にクロノは感嘆の声を上げた

「それで……あの装備については？」

「それがね……よく分からなかったの」

クロノの質問にエイミイは申し訳なきように答えた。

コンソールを操作すると、映像が切り替わりオーツーたちWDDOの各隊員の映像に切り替わった

「このワードスーツなんだけど、クロノ君の言ったとおり魔力で動いてるわ。」

でも、バリアジャケットの技術が使われているのは分かるんだけど……

それ以外の構造が全然分からないの。しかも……」

「しかも？」

「このスーツからリンカーコアの反応が出てきたの」

「魔力で動いているんだ。当然だろう？」

クロノの言葉にエイミイは首を振った

「違うの。体からじゃなくて。ワードスーツから検出されたの。」

つまり、この人たちはリンカーコアを持っていない」

「なんだって……。じゃあ、機械がリンカーコアを持っているというのか？」

「ありえないとは思うけどそうとしか言えない。流石『管理局の天才』のリーネ一佐……」

「既存のあらゆるデバイスの性能を30%も上昇させて、今のストレージデバイスの強化理論を

提唱しただけはある……」

天才の一端を目にした二人は、ただ唖るしかなかった。

## Sub Memory 設定&プロフィール

登場用語集

・WDDO

『World Dimension Defense Organization』

世界次元防衛機構の略称。

魔法の概念が存在しない地球における、次元犯罪者が関係する事件全般を担当する組織。

名目上、国連直轄の極秘組織扱いだが、魔法に関する知識やノウハウはないため

実態はリーネ・アイリスが指揮、決定権を持っている。

極秘組織のため、事件が発生し出動する際に各国の機密機関と連携し、カバーストーリーや

世間の事件への関心をそらすといった活動により、各国機密組織とのつながりが深い。

ただし、逮捕権がなく、事件解決後、地球側の人間は該当国の司法機関に引き渡し、

向こう側の人間なら元の世界へ追放するのだが、リーネ曰く、『管理局の前に放り出している』

あらゆる国家、企業、政治、宗教から独立しているため、所属人員の出身、人種、宗教に

制限がなく、様々な人物が集まっている。基本的にはリストアップされた人物から選ばれるが、

中には次元犯罪に巻き込まれたり、目撃した結果、組織に所属することになった人物もいる。

組織は大きく2部隊あり、実際に現場に行き事件を解決する行動隊の『第1班』。

情報収集や調査、行動隊の支援を行う『第2班』に分かれている。

(元ネタはSCP財団とメン・イン・ブラックの組織を足したようなもの)

・MMA

『マジカル・マシーナリー・アーマー』の略称。魔導士のバリアジャケットとクロヤがもたらした異世界のロボット兵器『スコープドッグ』と『モビルスーツ』の技術を合わせたパワードスーツ。

スコープドッグの基本機構であるグライディングホイールを標準装備し、モビルスーツ譲りのジャンプ力、軽い滞空能力を持つ。

地球側の人間は基本的にリンカーコアを持たないため、疑似的にリンカーコアを形成し

魔力を使えるようになる形成機構と増幅変換機構が埋め込まれている。

武装は基本的にスコープドッグ、モビルスーツ両方で使われていた武装を魔力で使用できるよう

改造されたものを使用する。

・リンカーコア

魔法を使う者の魔法の源となる魔法機関。原作では基本的に向こう側の人間にしかなく、

個人によって有無があり、未だ謎の機関というもの。

この物語では、リーネの研究により、リンカーコアの正体は有機魔法結晶体であり、

リンカーコアの有無は結晶体の形成能力の有無によるものということが判明した。

この研究結果から、リンカーコア形成機構及び増幅変換機構の開発につながった。

・記憶の書

クロヤ・アイリスの記憶を纏めた本。

今まで過ごしてきた全異世界の技術、技、記憶が詰め込まれている。クロヤの体の一部ともいえるが、本人が無事な限り壊れることは無



い。

第3者による読み取りを防ぐためなのか、検索機、翻訳装置のように本人を介さないと

そもそも文字を読み取るどころか、量が膨大すぎて必要な情報が手に入らない。

読み取りには魔力を必要とする。

・クロヤ・アイリス。

無限にあらゆる世界を旅する『無限転生者』で実年齢は1万2000歳以上。

転生し海鳴市に来て事故に遭い、WDDOに拾われ司令のリーネ・アイリスの養子になる。

多くの世界を渡り歩いてきたが、ほとんどが争いに満ちた世界だったため、人の死に敏感。

数多くの戦争を経験したため、相手の攻撃といった動きは経験や勘で大抵避けられる上、

機械修理やハッキングなど戦闘に関するスキルが非常に高い。

ある世界で身体を改造され、サイボーグ状態になっている。

その為、目は普段は皮膜で隠して黒い瞳だが、皮膜を解除すると赤い瞳の中に顕微鏡のような

3つの種類の違うレンズ（標準、精密、赤外線）が瞳の中に見えるしまう。

上記のことや、長い年月の蓄積の影響か魔力が膨大な量に達しており、2つのリミッターが掛けられている。

1つは身体リミッター。サイボーグ改造の影響で身体能力が必要以上に上がっているため、

日常生活に不便が出ないようリーネが施した。この影響で、身体能力は3割程度に減少し、

少しスポーツが得意な程度に落ち着いている。

2つ目は魔力リミッター。これはクロヤ自身が大昔にかけたもの

で、転生を重ねて行くたびに

肥大化する魔力を抑える目的でかけている。

現在の魔力はリミッター解放を行うと触れた物質の消滅もしくは物体中の魔力の枯渇をおこし、

灰や砂に似た物体へ変質させてしまうなど危険極まりない。

その魔力を記憶の書、身体強化に迂回させるなどをして制御しているが、

今度は技の威力制御が出来なくなるなど、リミッターなしの生活は不可能となっている。

・リーネ・アイリス

W D D O 司令。時空管理局技術開発部、ロストログリア研究部のトップを務め、

『管理局の天才』と呼ばれていた。しかし、管理局の最高評議会の正体や上層部の腐敗を目にし、

管理局から失踪、以前訪れた地球に移住する。

地球でミッドチルダの技術を使ってしまう、各国家から技術提出を求められ、

一部技術提出とW D D O の設立と引き換えに地球での市民権を得た。

ミッドチルダより劣る科学技術の地球でもその才能を発揮し、M M A を開発する。

## Memory 35 模擬戦

「と言うことで、高町なのはさんの護衛という名目上、管理局と行動を共にすることになります」

リンデイさんたちとの話し合いの翌日、基地では今後の方針を母さんが説明していた。

「なのはさんは今後、管理局に所属する次元航行艦『アースラ』に乗艦します。

そこで、なのはさんに付き添いと言う形で00と一緒に同乗します。

ジュエルシードの回収は管理局と合同で行い、向こうの出勤に合わせてこちらも出撃します。

その際のメンバーはこちらから指名します。

「なお、00はなのはさんの護衛の為、行動を共にしてください」

「了解」

「質問は………なさそうね。それじゃ、解散！」

解散の号令でみんな会議室から出て行ったが、僕はなのはと一緒にアースラに乗艦するため

転送室に向かった。

転送室からアースラに転送されると、先に着ていたなのはさんとクロノ君が待っていた。

僕は二人の前まで来ると、

「WDDO行動隊『第1班』所属、オーツ曹長。高町なのはさんの護衛の為、

次元航行艦『アースラ』に乗艦します」

「了解した。そちらの乗艦を許可する」

クロノ君と職務上の乗艦許可を取り合った。

「と、まあ堅苦しいのはここまでだ。よろしく頼む」

「こちらこそ。しばらくお世話になります」

「よろしく願います」

僕たちはクロノ君の案内の下、艦内の部屋に案内してもらい、今日はそれで終了した。

次の日

「オーツ。ちよつといいか？」

「はい？」

乗艦して二日目。僕は、クロノ君に呼ばれて艦内にあるトレーニングスペースに来た。

「単刀直入に言う。オーツ、君の実力が知りたい」

いきなりのことに僕は言葉に困りました

「えつと……つまり？」

「僕と模擬戦をしてもらいたい」

……面倒な誘いが来た。やり手の魔導士ほど手加減がしにくく、こつちの実力を推測される原因になるから、正直やりたくないが、断る訳にもいかない。

「いいですよ」

「よし。じゃあ、早速始めよう。手加減はするなよ？」

無理な相談だね。

僕とクロノ君が位置に付くと、ブリッジ要員らしい人（エイミイさんって言うらしい）と

なのはの映ったモニターが現れてカウントした

『がんばって二人とも！』

『それでは、クロノ君対オーツの模擬戦……始め！』

合図と共に、グライディングホールG Hを回転させクロノ君から離れロックオンと同時に、

ヘビイマシンガンを連射する

ドガガガガガガッ!!

しかし、クロノ君はすぐさまその場から飛び退き、射撃魔法を飛ばしてきた

「シューター!!」

クロノ君から高速で射撃魔法が撃ち出され、一直線に僕に向かってきた

「おっとー!」

飛んできた弾をヘビイマシンガンで撃ち落とし、クロノ君に急接近する。

素早くヘビイマシンガンをトライブレードと入れ替え、腰にヘビイマシンガンを収め、

両手にトライブレードを構えて斬りかかる

「やああああ!!」

「くっ!」

ガギンツ!!

クロノ君のデバイスとトライブレードがぶつかり火花が散る

そして、ほぼ同時に距離を取り僕は肩のランチャー、クロノ君はデイバインバスターによく似た

砲撃魔法を放ってきた

ドオオオオンツ!!

お互いの攻撃が当たり、一瞬で周りが爆煙に包まれた。

「(……………どこだ)」

センサーには元に位置にはクロノ君がおらず、ロックオンも外れていた。

「ツ!!」

ドウツ!!

突然、真横から砲撃が飛んできたのを直感で避けたが、

バチッ!!

「(しまったた・・・設置型の罠) 迂闊だった・・・」

内心、舌打ちをしていると煙の中からクロノ君が現れ、僕の首筋にデバイスを当てた。

「僕の勝ち・・・と言いたいが」

クロノ君は睨むように僕を見てきた

「・・・僕は手加減するな、といったはずだが？」

「.....」

・・・流石に手を抜きすぎたかな・・・。クロノ君ぐらいの腕になるとやっぱりバレるか。

仕方ない、本当のことを言おう

「.....僕が本気出したらクロノ君、絶対勝てないよ」

「何.....随分、自信があるみたいだが.....」

「試してみる?」

「上等だ!」

と言うことでもうワンラウンドやることになった

位置に着いたクロノ君に僕は警告を発した

「クロノ君、防御が最大に。それから、初撃は格闘攻撃をするから」

「???'」

クロノ君は『?』を浮かべながら僕と向かい合うように立った

『では、クロノ君対オーツー、模擬戦二回目、よーい・・・スタート!』

ドゴオオオンッ!!

『え?』

「あ.....」

開始わずから秒経たず。

見ている人からだど、僕が瞬快移動してクロノ君の目の前に移動したと持ったら、

次の瞬間には吹き飛ばされてクロノ君が壁に叩きつけられたとし

か見えないだろう。

「やりすぎた……」

あっけにとられた二人を見て、そう呟いた。

## Memory 36 異変

「ごめんなさい。やりすぎました」

僕は今、クロノ君にただひたすら頭を下げている。

あの後、クロノ君は医務室連れて行かれ、僕はクロノ君が目覚めるまでどうすればよいか考えて、

考え抜いた結果がこれだった。

「分かったから、そろそろ顔を上げてくれないか・・・こつちが悪いよ  
うな感じになる・・・」

クロノ君が引き気味で言うので、僕は顔を上げるとクロノ君は真剣な顔になって聞いてきた

「一体、あれは何なんだ？いきなり魔力が上がって、身体的な能力が上がったが・・・」

「掛かっていたリミッターの一つを解除したからだよ」

「リミッター？オーツーさんどういうこと？」

あ・・・しまった・・・

「えっと・僕の秘密の一つ。ちよつと、これは機密事項に当たるから話せないな。」

まあ、一種の身体強化ってことだけ言っておくよ」

その後も、何回か聞いてきたが機密事項で教えられないと言い通して何とか諦めてもらった。

### 数日後

アースラに移ってから数日、ジュエルシードの反応があり封印の為に

僕となのはさん、クロノ君、ユーノ君と基地に残っていた隊員たちと迎撃に向かった

『OO！そっちに行つたぞ！』

「僕が足止めをします！」



「ユーノ君頼む！……今だ！食らえ！」

「えーい!!」

「シューター!!」

ドオオオオオオオンツ！

僕たちは鳥のような暴走体を撃破したが、おかしな点に気が付いた  
「変だ……こんなに分かりやすい反応だったのに……」

「うん……やっぱりオーツーさんも？」

なのはさんも同じ意見だった

「フェイト（さん）（ちゃん）が来ない」

そう。フェイトさんが来なかったのである

ジュエルシード集めに必死になっているはずなのに、こんな分かり  
やすい反応を見逃すはずが無い

「フェイト？それは……あの金色の魔導士のことか？」

「うん。フェイトちゃんなら絶対、こんなチャンス見逃さないの  
に……」

「……報告にあったΩと何かあったのかもしれないな」

クロノ君が考え込んでいると、基地から緊急通信が入った

『全一班隊員に通達します！現在、海鳴市の二ヶ所で結界が張られる  
のを確認しました！』

観測の結果、この反応はフェイトさんとアルフさんです！

なお、張られる直前に交戦による発光を確認しました。何者かに襲  
われている模様です！』

「どうしたー！」

「……クロノ君、どうやら君の言っていたことが起きたみたい  
だ……」

「どういうことだ？」

「え？まさか……フェイトちゃんたちが……」

なのはさんが恐る恐る聞いてきた

「……二人が何者かに襲われている」

聞いた瞬間、なのはは超高速で飛行魔法を展開、飛び去ってしまった

「なのは！」

「なのはさん！クロノ君追いましよー！」

「ああ。運がよければ、二人から事情を聞けそうだ」

僕とクロノ君もなのはさんを追いかけた

飛んでいったなのはさんを追いかけていくと、  
結界の前でなのはさんが立ち止まっていた

「なに・・・なんなのこれ・・・?」

「な、なんだこれは!？」

なのはさんとクロノ君が驚きの声を上げた。

それもそのはず、目の前には結界が張られているのだが、

「結界・・・なのか?それにしてもこんな真つ黒の結界は見たことが  
無い」

「これは『空間断絶』?・・・違う、少しアレンジされている・・・。こ  
んな技をできるのは・・・」

「ツ!!フェイトちゃん!!」

なのはさんは、意を決したように中に飛び込んでいった。

「あつ!ダメだなのはさん!迂闊に入っちゃ!!」

「僕たちも急ごう!」

「ユーノ君、こっちは僕らで何とかするから、01たちの支援に向かっ  
てほしい!」

「分かった。気をつけて!」

ユーノ君と別れ、僕とクロノ君はなのはさんを追いかけて中に入っ  
た

「くっ!なんだこの空間は!？」

「この『空間断絶』は自分の有利な空間に書き換えるんだ!」

空間の中は、薄暗く無重力に近い感覚だった。

しかも、その空間には大きささまざまな瓦礫が浮かんでおりフェイト  
さんのような

高速戦法には不向きな場所だ。

僕が纏っているMMAの姿勢制御スラスタは通常空間では飛ぶ  
のに適していないが、

「このような無重力空間ならむしろ好都合だ

「なのはさん！どこですか!？」

「どこにいる・・・つと！くそつ・・・瓦礫が邪魔で思うように飛べない」  
僕たちはなのはさんたちを探すのに手間取っていた。

なのは S I I D E

わたしは黒い結界の中に入ると、すぐにフェイトちゃんを探し始めました

「フェイトちゃん！どこにいるの!？」

暗い結界の中、わたしはフェイトちゃんに聞こえるように声をかけながら探していると

遠くの方から

ドオオン・・・

と、何かが爆発したような音が聞こえました

「あっち!？」

音のしたほうへ、瓦礫の間を飛んでいくと・・・

「フェイトちゃん!」

「え・・・？なのは?」

ボロボロの姿をしたフェイトちゃんが瓦礫の陰に隠れていました  
「フェイトちゃん、大丈夫!？」

「なんとか・・・ツ!!なのは!!」

突然、フェイトちゃんがわたしの手を掴んで飛び退くと、  
さつきまでいたところに砲撃が撃ち込まれ瓦礫が爆発しました。

「見つかった・・・」

砲撃が飛んできた方を見ると・・・

「ロボット?」

右手が剣になっていて、左手が大砲になっている赤い一つ目が光つ

ているロボットが

こつちを見ながら飛んでいました。

見た目だけを見ると、小さい男の子向けのおもちゃみたいでした。

「フェイトちゃん・・・何あれ？」

「あれがこの結果を発生させたの・・・おもちゃみたいで油断したけど・・・あいつかなり強い・・・」

フェイトちゃんがデバイスを構えながら言ってきました。

「・・・新タナ反応ヲ確認・・・該当データ『高町なのは』・・・当初目標ト共ニ排除スル」

ロボットの赤い目が光り、大砲を向けて撃ってきました

わたしたちはその場から飛び退き、フェイトちゃんはデバイスを鎌に変形させて近づき、

わたしはいくつかのダイバインシュータを撃った  
ガギンツ!!

フェイトちゃんとロボットが切り結んでいるところにさつき撃ったシューターが飛んでいった

「・・・危険・・・回避」

ロボットはとつさにフェイトちゃんから離れ、シューターを避けようとするけど逃がさない!

するとロボットは逃げる途中、浮かんでいた瓦礫を一つ蹴飛ばしました。

蹴飛ばされた瓦礫がシューターの目の前に飛んできて、その瓦礫に当たってしまい・・・

ドオオンツ!!

小さくなつた破片が雨のように飛び散って、ロボットを追いかけていたフェイトちゃんと

わたしに降りかかってきました・・・つて!!

「うわわっ！レijingグハート!!」

『Protection』

とつさにレijingグハートがバリヤを張って破片を防いだ瞬間、  
「排除」

目の前にさっきのロボットが現れ、斬りかかってきた

「きゃああ!!」

バリヤは簡単に破られて、吹き飛ばされてしまいました

「排除」

ロボットが剣を振りかぶったところ

「させない!」

フェイトちゃんが後ろからロボットを斬り裂こうと高速魔法を使って移動してきました

「やああっ!!」

「無駄」

ロボットが言うのと、頭がグルリと真後ろを向き、目の部分から砲撃が発射されて、

フェイトちゃんに向かっていき

「ッ!!」

ドオオオオオオンッ!!

命中して、フェイトちゃんが爆発に飲み込まれてしまいました

「フェイトちゃ・・・きゃああ!!」

気をとられていた隙にわたしは、ロボットに投げ飛ばされ瓦礫に押し付けられて、

大砲を突きつけられてしまいました

「排除」

大砲にエネルギーが溜められ、発射されそうになったとき

「はああああああっ!!」

上から聞き覚えのある声が聞こえて

ズバンッ!!

大砲が腕ごと斬り落とされました

「破損、緊急回避」

ロボットが離れると、わたしとロボットの間を割り込むように

「間に合ってよかった・・・大丈夫?」

腕を斬り落とした人、オーツーさんがわたしの前に立っていました

## Memory 38 撃破

間一髪だった……

爆発音を聞きつけ、大急ぎで飛んできてみれば二人とも危機一髪の状況だった。

「間に合ってよかった……。大丈夫？」

「うん……。それよりもフェイトちゃんは？」

「大丈夫だよ。ほら」

先程、フェイトさんがいたところにはバリアを張ってフェイトさんの前に立つクロノ君がいた

「くっ……。凄い威力だ……。強めに張っていなかったら破られるところだった」

「え？え？」

いきなりの乱入にフェイトさんは混乱気味だった  
さして……

「……。おい、人形。大切な人たちを傷つけたんだ……。ぶっ壊してやる」

今、僕は凄く怒っている……。覚悟しやがれ……

「該当データ『オリジナル』ト判明。最優先デテ排除」

ロボットが機械音声で僕をロックした。

僕はトライブレードを両手に構え、向こうは残った右腕の剣を構え、

ほぼ同じタイミングで斬りかかって来た

「はああああっ!!」

ガギンツ!!

火花が飛び散り、鏝迫り合いの状態になるとすぐさま離れ、腕のバルカンを発射

ドガガガガツ!!

「回避」

ロボットは短く言うと、瓦礫を盾にして攻撃を防ぎその瓦礫ごと目からレーザーを放った

「うおっとー！」

それを避けると、ロボットが一気に距離を詰めて再び斬りかかって来た。

そしてまた離れると、今度は瓦礫を避けて飛びながら何回も切り結びあう空中戦になった

ガギンツ!!      ギインツ!!      ガンツ!!

「ちいっー！」

罅が明かないと僕は判断し、少し後退気味になった

もちろん、ロボットがこのチャンスを逃すはずが無く、さらに攻撃の手を強めて押し始めた

そうそう・・・もつと来い。

「排除」

大きく下がった僕に、ロボットが大きく素早く斬りかかって来た時「掛かった!!」

「!!」

ロボットの身体に青色のバインドが巻きついていった。

実はこれ、クロノ君が戦闘音を聞きつけたときに仕掛けておいた罠で、僕がワザと下がったのはこれに引っ掛けるためである

「破壊」

と言うと、バインドにひびが入り始めた。

まあ・・・あのフェイトさんを追い込むんだ、それくらい分かっていたけどね・・・

この少しの時間さえあれば十分!!

「メモリーロード・・・『六杖光牢』！」

記憶の書から技を呼び起こし、ロボットの動きを封じた

『六杖光牢』は六角形の対角線を結ぶように板状の魔(霊)力板を相手の身体に突き刺して相手の動きを封じる非殺傷技

「排除排除排除!!」

動きを封じられたロボットは唯一使える目のレーザーを放とうとしましたが

「やあああああつ!!」



上空から急降下してきたフェイトさんに頭部を斬り飛ばされ、動きを完全に止めるかと思った

が……

「やっぱりか……Ωのやつ……面倒なものを造りやがって……」  
動きを止めるどころかむしろ、動きを封じている六杖光牢を破壊するため激しく抵抗し出した

「なのはさん！クロノ君！今だ!!」

僕が叫ぶと、レイジングハートに魔力をチャージして発射体勢に入ったなのはさんと、同じように発射体勢に入っているクロノ君がロボットの上に現れた。

「デイバイン……バスタアアアア!!」

「ブレイズカノンツツ!!」

二人から極太の砲撃が飛んできて、ロボットを飲み込み、大爆発を起した。

爆発の閃光の後、ロボットは跡形も無く吹き飛んでいた。それと同じに空間断絶も消えた。

「お……終わったの?」

ロボロボのフェイトさんが戸惑い気味に聞いてきた

「うん。そうみたい。空間断絶が消えたから、完全に破壊されたよ」

「そう……はっ!!アルフは!!?」

フェイトさんはアルフさんのことを思い出し、慌てて辺りを見回した。

「オーツーさん。ユーノ君が向かった方はどうなったの?」

「ちよつと待って。01たちから通信が入ったみたい。念話の波長を僕に合わせて」

フェイトさんとなのはさん、クロノ君が波長を合わせたのを確認すると、

01からの通信を聞かせた。

『こちら01。敵ロボットの撃破に成功!それと、アルフさんを保護しました』

「アルフは!アルフは無事なんですか!?!」

『この声は・・・フェイトさんか？重傷だが大丈夫だ、君が無事だと伝えたら気を失ってしまった。今、ユーノ君が回復魔法をかけている』

「そう・・・よか・・・った・・・」

そう言うと、フェイトさんは全身から力が抜けるように崩れ落ちてしまった。

(ちなみにここは近くのビルの屋上)

「フェイトちゃん!」

なのはさんが慌てて抱き止めると、クロノ君が首筋や脈を測った。

「大丈夫。安心して気を失っただけだ」

「そう・・・良かったあ」

「クロノ君、これから二人をどうする?」

「怪我の度合いが酷い。アースラでも一応治療は可能だが・・・」

「なら、僕たちの基地に運ぼう」

「そうだな。よし、案内してくれ」

僕たちはフェイトさん、アルフさんの治療の為WDDOの基地に帰還することになった。

## Memory 39 移動

僕たちは、住宅街の人気の無い裏路地にいた

「オーツー、こんなところで何をするんだ？」

フェイトさんを背負ったクロノ君が尋ねてきた。

「ここはさつきいた場所から一番近い基地への入り口。ここから転送してもらおうんだ」

「え？基地つてどこにあるの？」

えーっと確か……

「海鳴市の地下にあるよ」

「えええっ!?地下にあるの!？」

「うん。流石に空中に造るわけにもいかないしね」

僕は基地に連絡を取り、なのはさん、クロノ君、フェイトさんの転送許可を取ってもらっている

「……はい。了解しました。じゃ、みんな転送するよ」

僕は転送範囲内にみんながいることを確認して転送してもらった。

なのはSIDE

アースラに転送されるのと同じように、魔法陣の上に立つと目の前が眩しく光りました。

光が収まって目を開くと、アースラの中と似たような感じの大きい部屋の中にいました

「ここがオーツーさんたちの基地？」

「うん。ここは転送室って言って、言葉の意味のまま転送するところ。

ここから僕たちは出撃しているんだ」

すると、部屋の扉が開いて、白衣を来たクロヤ君のお母さん……リーネさんがやってきました

「ようこそ、WDDOの本部へ。早速で悪いけど、フェイトさんの治療をするから

みんなは私についてきて」

リーネさんがそう言うと、また扉が開いて今度はお医者さんらしい

人たちが入ってきて

クロノ君がフェイトちゃんを下ろすと、基地のお医者さんたちが素早くベツトに乗せて行ってしまうました。

わたしたちはリーネさんの後につきながら、基地の中を案内されました。

最後に、会議室に案内されてそれぞれ椅子に座りました

部屋には、先に着ていたユーノ君が待っていて、お互いに大きな怪我也無く合流できたことに

喜びました。

「さて、基地案内ツアーご苦労様。何か質問とかあるかしら？出来る範囲でなら答えてあげるわ」

わたしは手を挙げて、ずっと気になっていたことを聞きました

「あの、リーネさん。リーネさんはその・・・クロノ君たちと同じ世界から来たんですね・・・」

「ええ。そうよ」

「クロヤ君はそのことを知っていますのですか？」

「知っているわよ。でも、WDDOのことは知らないわ」

良かった・・・クロヤ君がこの事件に巻き込まれていなくて・・・

「次は僕から」

今度はクロノ君が手を挙げて質問しました

「リーネ一佐は何故、管理局から失踪したのですか？」

ユーノ君やクロノ君、エイミイさんたちから聞いたけど、

リーネさんが管理局で勤めていた技術開発局とロストロギア研究部っていうのは管理局の中でも

かなり重要なところらしくて、その局長だったリーネさんはとても偉かったみたいなの。

そんなところにいたのにどうして辞めちゃったのかな？

「あー・・・それ？管理局にいるのが嫌になったの」

「嫌になった？どういうことですか？」

嫌になって辞めたって、どんな事なんだろう？

「……クロノ君、その質問の理由を聞くと管理局内部の人間から命を狙われるわ。」

私はそれほど事実を知ったの簡単に言うど……管理局の闇を知ってしまった感じかしら」

「管理局の闇……」

……リーネさんの表情がいつもより真剣……なの

クロノ君も何も言わずにそのまま座ってしまいました

「それに関する……についてはあまり詮索しない方がいいわ。闇の部分を知ると消される……」

殺されても事故死と言う風に真実が書き換えられてそれでおしまい。あとは忘れ去られるだけよ。」

事実、こつちに来るまでに何回か狙われたからね」

「……」

クロノ君が深刻な顔をして黙ってしまいました

「あ、あの、リーネさんはジュエルシードのことをどこまで知っていますか？」

ユーノ君がジュエルシードのことについて聞きました

「んー？それって、どんなものかってこと？」

「はい。発掘して移送する前に解析したのですが、膨大な魔力の塊で危険なものぐらいしか

分からなかったの」

「うーん……。その判断は甘いわね。私も完全に分かっているわけじゃないけど、

ジュエルシードは人為的に造られた兵器の一部っばいわ。正確には兵器の動力源。この世界で言う

核兵器のような戦術兵器レベルのね。でも、曲がりにも魔力の結晶体、兵器から抜き取られて

人の手に渡れば、その持ち主の願いを結晶体の中に溜まっている魔力で実現しようとする、

と言うのが私たちの研究の結果よ」

む……難しくてよく分かんない……。

ユーノ君は「なるほど……」って言ってるし、あうゝ……。「なのはさんには少し難しかったかしら？簡単に言うと、ジュエルシールドは危険な兵器の一部で、今は人の願いを間違った方向に向かわせるものって思ってくれればいいわ」

あ、何となく分かったかも。

「他にしつ……(コンコン) ん？どうぞー」

リーネさんが話そうとした時、ドアがノックされて白衣を着た人が入ってきました

「失礼します。先程、フェイトさんとアルフさんの治療が終わりました」

「!!フェイトちゃんは……」

治療が終わったと言ったので、わたしは椅子から立ち上がり、不安で声が震えながら

フェイトちゃんの様子を聞きました。

「大丈夫です。今は魔法の使用による疲労から寝ています。明日あたりには目を覚ますでしょう」

「よ……よかったあ……」

わたしは、ホツとして胸を撫で下ろしました

「そう。ありがとう。それじゃ、フェイトさんも無事に治療が済んだことだし、

今日は一旦解散しましょう。なのはさんも一度、家に帰ったら？」「うん。あ、でも……わたし、何日も家に帰らなかつたからみんな心配しているかも……」

うう……帰ったら絶対怒られる……どうしよう……

「そこはリンディさんに話してみたら？もともと、あの人が連れて行ったみたいなものだし、

その辺も考えてあると思うわ」

「分かりました。一度、リンディさんと話してみます」

わたしたちは、フェイトちゃんをWDDOに預けて一度アースラに戻りました。

## Memory 40 不安

「すう……すう……すう……すう……すう……すう……すう……すう……すう……」  
僕の目の前にはベットの上で規則正しい寝息を立てているフェイトさんがいる。

なのはは一旦家に帰り、恐らくリンディさんからなのはの家族に説明がされている頃だろう。

僕がなぜフェイトさんのいる病室にいるのかというと、極めて単純。護衛だ。

最優先護衛対象はなのはだが、 $\Omega$ のところから逃げてきたフェイトさんは何かしらの情報を

持っているため、 $\Omega$ が直接来てもおかしくない。だから僕は、護衛を買って出た。

「 $\Omega$ ……とうとう自分の欲の為に動き始めたか……最悪だ……向こうには10個近いジュエルシードがあるはずだ。早く取り戻さないよ」

そう思っていると、控えめなノックが聞こえた

部屋はそんなに広くないので銃は使えないから、ブレードに手をかけながら声をかけた

「誰？」

「あ、あたし……アルフだよ」

アルフさんらしく、フェイトさんが心配で部屋に入れてほしいみたいだ

一応、目の中にあるカメラを切り替え、赤外線計測した上で入ってもらった

「ありがと。それでフェイトは大丈夫なのかい？」

アルフさんは眠っているフェイトさんを見て、心配そうに聞いてきた

「峠は越えたみたいですので、もう心配は無いですよ。」

もつとも、 $\Omega$ がやってくるかもしれないと言う最大級の心配はありますけど……」



「ごめん・・・あなたの忠告、もっと早く聞いていればこんなことには・・・」

アルフさんが申し訳なきように俯いてしまった。おまけに頭にある耳も垂れてしまっていた。

「仕方ありませんよ。あいつのやり口は知っていますから。」

人の弱みに付け込んで手を切れなくする。そして、用済みになったら裏切る。

あいつの常套手段です。むしろ奇跡ですよ。生きて逃げ切れるなんて」

「ああ・・・この身でよく分かったよ」

「う・・・うう・・・」

「!!」

アルフさんと話していると、眠っているフェイトさんが小さく呻き始めた

「う・・・ううう・・・さん・・・かあさ・・・かあさん・・・」

悪夢にうなされているらしく、何かに手を伸ばしながら小さく呻いていた

「フェイト、大丈夫、大丈夫だから」

アルフさんが伸ばされた手を握ると、フェイトさんは落ち着き始め、

また規則正しい寝息を立てて眠った。

アルフさんはその後、フェイトさんに付き添うと言ったのでお任せして、

僕は警戒に集中することにした。

「そういえばさ」

すると、アルフさんが思い出したように聞いてきた

「あんた・オメガのことをずいぶん知っているけど、なんか因縁でもあるのかい？」

「・・・ないと言ったらウソになるけど、答えられない」

「あれかい、守秘義務ってやつ？」

「それもあるけど…。あまり深入りしてほしくないんだ。

Ωとの関係はそんなに単純じゃないしね…」

「そうかい…。あんたの正体は謎のままってことか…」

アルフさんは少しムスツとしたが、そこまで気にしている様子ではないようだ

「ところで、あんたオメガに勝てるの？」

「…多分…かな？」

実は…Ωは最後に会った100年前に比べて遥かに強くなっていた

僕自身もそれなりに鍛えてきたから100年前よりは強くなったが、

正直言つて勝率は50%あればいいかもしれない

「まあ、勝つしか選択肢はありませんよ。放っておいたら犠牲が増えるだけですし」

「…そうだね…」

その後、日付が変わってもオメガは襲撃してこなかった。

今日、フェイトさんはまだ眠ったままだったが、警備を01たちに任せ、

学校に久しぶりに行った。なのはが久しぶりに登校するからだ。

久しぶりに教室に入り席に座ると、アリサとさすががやってきた

「あ、二人とも久しぶり」

『久しぶり』じゃないわよ！お母さんの仕事の関係で一緒に付いて行ったのは分かるけど、

連絡くらい頂戴よね！」

あ、僕が学校来ないのでってそう言う理由になっているんだ

「そのせいではやてのことも知らせれなかったじゃない…」

「はやてがどうかしたの？」

さすがが説明してくれた

「はやてちゃん、病状が悪化して入院したの……」

「え？」

まさか、あの黒い魔力が……

「いつ？」

「……クロヤ君が休み始めてから3日くらい後から……」

ちようど、アースラに乗り込み始めたころからだ……

「……ごめん。今日、はやてに会いに行つて来る。あと、なるべく早く連絡手段を作っておくよ」

「うん。そうしてあげてね」

「はやてにちゃんと理由説明しなさいよ」

「おはよー」

その後すぐ、なのはが登校してきた

アリサとすずかはさっきのことを説明をなのはにもしたのだが……

アリサがなのはの腕を掴み、すずかと一緒にどこかに連れて行つてしまった。

追いかけようと思ったが、アリサやすずかから感じた気配は、はっきり言つて

僕のような新参の友人が割つて入つても良いものではなかった。

「(これは……よくないな)」

はやてのことになのはのこと、問題は山積みとなつていった

学校終了後、なのはの護衛をするべきかはやての所に行くべきかの選択を迫られた、

迷つた挙句に出した答えは、一時的になのはの護衛を外れ、はやてのところへ行く。

もし、異常があればすぐさま戻る。だった。我ながら無責任な感じもしたが、

なのは自身にも自分を守る力はあると判断したので、Ωの襲撃で

もある程度なら耐えられると

判断した結果だった。

病院にやってきて、ナースセンターではやての病室を聞き急いで病室に駆け込んだ

「はやてー」

「あー」

はやてはベットで半身を起こしていた。

はやては一瞬嬉しそうな顔をしたものの、すぐにベットに顔を埋めてしまった

「えーっと・・・はやて?」

「ふん・・・いきなり連絡もなしにいなくなるクロヤ君なんて知らんもん・・・」

どうやら、いきなり会えなくなったことにご立腹のようだ・・・

流石に任務だったからって、一言連絡入れるべきだったな・・・

「ごめん。母さんの仕事の都合でいきなりだったんだ」

「・・」

「本当にごめん。・・・何でもは無理だけど、はやてがして欲しいことなら喜んでする」

すると、はやては顔を少しだけ出した

「うちがして欲しい事ならいいんやね?」

「うん。出来る範囲なら何でも」

すると、はやては意外な事を頼んできた

「クロヤ君・・・もうちょっとこっちに来てくれん?」

「? いいよ」

するとはやてはベットから飛び出す勢いで抱きついてきた

「わっ!」

「寂しかったんよ・・・うち、また一人ぼっちになったんかと思っていたん・・・」

「大丈夫。友達を放っておくなんてしない。だから安心して」

「うん・・・うん!」

はやての頭を撫でると、うれしそうに抱きしめる力を強くした。

「「うひゃあっ!!」」

と、当時に扉が勢いよく開き、三人の見知った顔がなだれ込んできた

「いたた・・・アリサちゃんが押すからだよ・・・」

「そういうのはだつて興味津々に乗り出してきたじゃない!」

「ふたりともケンカしないで:」

「でも、覗こうって提案したのはすずかだからね」

「ほうほう、じゃあ、そのままお怒りのはやてにごあいさつしようか三人とも」

「「あ」」

三人の視線の先には顔を真っ赤にしたはやての引きつった笑みがあつた・・・

その後は、入院前と変わらない四人の時間を過ごした。

「(はやての足に纏わり付いている黒い魔力、色が濃くなっていた・・・原因が特定できないから対処も出来ない。これ以上の体調悪化がおきないといいが・・・)」

帰り道、僕の中にあつた不安がジワリと大きくなっていった。

## Memory 41 目的

なのはが学校に復帰してから数日後、基地の医務室で眠っていたフェイトさんに変化があった。

目覚めそうな兆候があるとのこととで基地に急いで戻ってきた。なのはにも伝えたら僕より早くついていて。どうやったの？

「う．．．ううん．．．．．」

小さな呻き声をあげると、フェイトさんは少しずつ目を上げた

「フェイト！フェイト！」

アルフさんが呼びかけると、フェイトさんはぼんやりとしながらアルフさんを見つめた

「アルフ？．．．ここは？」

「えつと．．．．．」

「ここはオーツーさんたちの基地だよ」

答えにくそうなアルフさんに代わり、なのはが答えた。

「あれ：なのは？え、基地．．．？オーツーたちの？」

「うん。襲われたあとフェイトちゃん、気を失ってここに運び込まれたの」

「少しづつ覚醒してきたのか、気を失う前のことを思い出し始めたよ  
うだった。」

「入るわよ。大丈夫？目は覚めたかしら」

頃合をみて、リーネさんとクロノ君、リンデイ提督が部屋に入ってきた。

リーネさんはベッドの脇にしゃがみ、フェイトさんと目線を合わせるようにして話を始めた。

「目が覚めたばかりで悪いけど、あなたのこと、色々聞かせて欲しいな」

「．．．．．」

フェイトさんはチラリとクロノ君たちを見ると口をつぐんで、俯いてしまった

管理局の手前、あまり言いたくない事情なのだろう

「フェイトさん。今回の件に関して、あなたたちを弁護するつもりです」

リンディ提督の言葉にフェイトさん、アルフさんは顔を挙げて驚いた声で聞き返した

「弁護・・・？どうしてですか？私たちは・・・」

「そうだよ！ロストログアの不法所持と使用をしたんだよ。それなのに」

二人の言い分はもつともだ。ふつうならかなり重罪に当たるからね

「確かに、通常なら重罪に当たる。けど、今回の事件の影の首謀者であるオメガの存在を知ると、

話は別だ。オメガに関する情報は管理局には全くない。

WDDOにもあるのはオーツの証言と映像記録のみ。その証拠を鵜呑みにはできないが

それを見積もっても、オメガはこれまでの次元犯罪者とは比べ物にならないほど危険だ。

君たちが協力してくれば、こちらも弁護が容易になる」

「フェイトさん。わたしたちWDDOもあなたのことを助けたいの。

これは私だけでなくなのはさんの強い希望なの。だから、お願い」「なのはの・・・？」

「うん。わたし、フェイトちゃんを助けたいの。フェイトちゃん、いつも悲しい顔してた...」

もうフェイトちゃんの悲しい顔を見たくない。」

みんなの言葉に、フェイトさんはアルフさんに目を配ると

「分かりました。知っている限りの事を話します。その代わり、私だけではなく、

母さんも助けて・・・」

搾り出すような願いに、返す答えはもちろん

「わかったわ。全力であなたの願いを叶える」

なのはSIDE



あのあと、すぐにフェイトちゃんたちに質問が始まった

まず、最初に私が一番聞きたかった質問が来た

「まず、あなたのフルネームを聞かせて欲しいな」

「私の名前は・・・フェイト・・・フェイト・テストロッサです」

すると、リーネさんが驚いたように質問をしました

「テストロッサ？待って・・・もしかして、あなたのお母さんってプレシア・テストロッサ？」

「は、はい。何で知っているんですか？」

リーネさんが頭を抱えてため息をついた。

「オツケー・・・。大体理由は分かった。もう一つ質問。あなた、双子のお姉さんがいる？」

リーネさんの質問を聞いた瞬間、フェイトちゃんとアルフさんがビクリと震えました。

「そ、それは・・・・・・」

「頼む、その質問はやめてくれないか・・・頼む」

二人とも、震えていました・・・。フェイトちゃんのお姉さんと家族に何があつたんだろう・・・。

「いいわ。ごめんね。でも、その反応から大体答えは予測できたから」

「なんか、リーネさんが一人で進めちゃってるから何がなんだから・・・」

「あの、リーネ一佐。話が見えないのですか・・・」

「あ、ごめん。あとでまとめるから」

「フェイトさん、いつ頃からオメガと関係を？」

「オーツーさんがオメガの事を聞いてきた

「大体。2, 3年前から」

意外と、オメガと一緒にだったのは最近みたい

わたしは、いちばん大事な事を聞いてみた

「ジュエルシードを集めて何をするつもりだったの？」

「アルハザードへ行くため・・・」

「おい」

「ひ！」



リーネさんが質問を終わらせると、別の部屋に案内されました。話をまとめるみたい。

## Memory 42 目的2

リーネさんが会議室に入り、みんなが着席するのを待った後、話をまとめた。

・・・というより、フェイトさんのお母さんの名前が出た瞬間に何となく分かったようだった。

「はいはい。ちゅーもーく。さつきは一人で進めてごめんね。話をまとめるわ。」

フェイトさんたちがジュエルシードを回収していた目的は、アルハザードへ行く事。

そこは分かるわね？」

「はい。しかし、なぜ？あるかどうか分からない場所を目指すのが分からないのですが・・・」

クロノ君がもつともな返事をした。確かに、不明確な場所を目指すのは無謀にほかならない

「リーネ一佐は彼女の母親であるプレシア・テスタロッサについて何か知っているようですか？」

リンディ提督が先ほどの会話内でのやり取りについて聞いてきた。

「えーつと・・・知っているっていうか・・・。プレシー・プレシアとは学校の先輩後輩の仲で、

親友だったの。それで、今回の事件の原因は多分・・・あの爆発事故が原因だと思うわ」

「爆発事故？」

「リンディ提督。確か・・・管理番号\*\*\*\*\*の区域で起きた事件の事を調べてもらえるかしら？」

リーネさんが恐らく地域番号を言うと、リンディ提督はアースラへ連絡を入れていた。

数分後、情報が端末に送られてきたらしい

「ありました。技術開発系企業の実験施設での爆発事故ですね。」

死傷者100人以上の大惨事だった事件です」

「その実験主任だったのがプレシーなの。そして、死者のリストに

載っていない子がいるはず・・・

リストの中にアリシアって名前の女の子はいる?」

「アリシア・・・アリシア・・・いません。一体その子とは?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・プレシーの一人娘」

「え?」

リーネさんの発言に場の空気が固まった。

「ど、どういうことなの・・・一人娘って・・・フェイトちゃんは・・・一体・・・」

なのはさんが震えた声で立ち上がって聞いてきた

「実は、00がフェイトさんたちと初めて会ったときに正体を見破ったの」

「なのはさん。フェイトさんはクローンだ。恐らく、アリシアっていう女の子がオリジナル。」

事故で亡くなったんだと思う。そして、アルハザードへ行く目的はアリシアさんの蘇生だ」

「蘇生? そんな事できるの?」

「なのは、さっき言ったでしょ、アルハザードは現代を遥かに上回る技術を持った超文明だって。」

多分、フェイトさんたちは蘇生技術もあると思っているんだと思う」

なのはさんは無言で座った。言葉も出ない様子だ

「どうりで、専攻以外の専門書を読み漁っていると思っただわ。私がかつちに来るちよつと前、

偶然、向こうで会ったの。別人のようにやつれていたわ。そして、私の専門の魔法技術系の事とか

生物学、バイオテクノロジー系のや研究結果を聞いてきたの。

プレシーはどっちかというと機械工学系なんだけど」

「リーネさん、クローンってそんなに簡単に出来ちゃうものなんですか？」

ユーノ君が質問してきた。

「…できない事はないけど、オリジナルと完全に同じというのはかなり難しいわ……。」

人の人格形成に関しては未知の部分が多すぎるから…」

「……命の冒険じゃないのですか？」

「ユーノ君、それは目的によるよ。家族を失って取り戻すならなんだってする、してしまうのが親って奴さ。少なくとも、望まれずに生まれて来たわけじゃない。」

それに、フェイトさんは愛情をもって大切育てられてきたんだ、歪んだ教育を受けて成長してないだけでもずっとマシだよ。」

「お、オーツー？」

おっと、いけない。

「あ、あのー！」

突然、無言になっていたなのはさんが大きな声を出した

「わたし、フェイトちゃんやフェイトちゃんのお母さんを絶対助けたいー！」

どんなこととしてでも助けたい！」

どうやら、改めて…いや、強い決心が出来たみたいだった

「なのはさん。それは僕たちも同じ。リーネさんもそれでいいですよね？」

「もちろん。異論はないわ。あなたたちは？」

「管理局…いえ、これは私個人としても協力するわ」

「同じく」

「僕も、大した事は出来ないかもしれませんが、同じ気持ちです」

「みんな……。」

なのはさんは驚いた顔でみんなを見た

「大丈夫。みんな同じさ。だから、みんなでやろう」

「うん！」

とりあえず、やる事は決まった。あとは実行するだけ

オメガ、舐めんなよ。意志の強い奴は実力差もひっくり返すぞ。今  
に見ている

## Memory 43 休息

フェイトさんたちの目的を知り、今後の行動が決まったが、向こうの動きが分からない以上、やる事は今までと変わらない。

しかし、ここ最近はジュエルシードが確認されていない上、レーダーにも全く反応がなく

動きようがない。しかも、残っているものも海の中の可能性が高くMMAでの活動が出来ない。

そのため、今できる事はただ待つことしかない。

一応なのはたちなら水中での活動は可能らしいが、空中とは勝手が違うらしく、

クロノ君曰くきちんとした指導がないと危険とのことではばらく休みという事になった。

フェイトさんも大分回復し、今日はリハビリを兼ねて町に行くことになった。

もつとも、Ωの襲撃を警戒して周りには1班の人と、管理局が警戒する事になっているが・・・

僕も護衛メンバーに参加するはずだったが、新島さんたちに「今日は休め」の一言で

外されているので、ありがたく休ませてもらう事になった。

「なのはたちも町にいるだろうし、町のほうへ遊びに行っているか・・・」

なのはSIDE

私は今、フェイトちゃんのリハビリを兼ねた街の案内をしています。

フェイトちゃんとアルフさんはこの街に来てもジュエルシード探しばつかりだったらしく、

街を見て回っていないなかつたみたいで、色んな場所に行っています。

「あれ？なのは？」

「あ、アリサちゃんとすずかちゃん」

偶然、街でアリサちゃんとすずかちゃんに会いました。



すると、アリサちゃんがアルフさんを見て顔をしかめました。

「げ．．．なんで一緒にいるのよ。ていうか、その子は？」

「出会って早々それはないでしょ．．．」

「まあまあ、アリサちゃんそんなに不機嫌にならないで」

「えつと．．．この子はフェイトちゃん。それと従姉妹のアルフさん。

フェイトちゃんとはさつき知り合って、今街案内しているの。フェイトちゃん、

私の友達のアリサちゃんとすずかちゃん」

「よ、よろしく」

「よろしくフェイトさん」

「よろしくね」

「ま、あたしとはまた会ったってことだけど、よろしく」

ふう．．．なんとか誤魔化せた。アリサちゃん、すずかちゃん、ごめん！

心の中で二人に謝っておきつつ、二人の事を紹介しました。

「あと、二人友達がいるんだけど、片方は男友達なんだけどまだ携帯作ってないみたいで、

今どこにいるか分からないのよもう一人の友達は、今ちよつと病気で入院中なんだよね」

「へえ．．．意外に友達が多いんだね、二人の名前は？」

「クロヤ君とはやてちゃんっていうんです。転校生で、私たちとは最近友達になったのですけど、

とても仲がいいんですよ。はやてちゃんはクロヤ君繋がりで仲良くなっただんです」

クロヤ君のこととかはやてちゃんのこと、学校での事とか色んなことを話しつつ、

街案内をアリサちゃんとすずかちゃんを加えて再会しました。

クロヤSIDE

「うーん．．．休みだけど．．．」

ぶつちやけ、休日を平穩に過ごした事が少ないため何をしたらいい

のか分からない。

何か買いたいものがあるわけでもないし、食べたいという欲求もない。

累積とはいえ長い間生きているとそういった欲求が薄れてしまう。  
：干からびて干物だよ僕。

「(帰って寝よ・・・)」

適当に本屋を見ていた僕は、特に何も買うことなく家に帰ろうとした途端、

「あれ？クロヤ君？」

「ん？あ、なのは・・・って、みんなと誰？」

なのはとフェイトさんが外出しているのは知っていたが、アリサと  
すずかが一緒なのに驚いた。

あと、表向きはフェイトさんとは初対面なので、知らないふりをした。

「紹介するね、この子はフェイトちゃん。街案内をしてあげているの。  
こっちはアルフさん、フェイトちゃんの従姉妹だよ」

「よろしく。僕はクロヤ・アイリス。クロヤって呼び捨てでいいよ」

「よろしく、クロヤ」

「よろしく・・・ん？」

アルフさんが首をかしげて、僕を見てきた

「ねえ・・・あんた、最近、会ったことない？」

流石にドキリとした。僕についている微弱な魔力を感じ取ったみたいだ

「それはないんじゃないかな。最後に会ったのって旅館が最後だし」

「まー、それもそうか」

とりあえず、上手くかわせたみたいだ。

「そうそう。ちょうどいいわ！クロヤ！携帯買いに行くわよ！」

「はっ」

アリサの突然の宣言に固まった。いきなり何言ってるの？

「いやいや。携帯買うって、僕そんなに持ち合わせないよ？」

「あたしが出す！いい加減連絡手段作りなさいよ！はやてですら携帯

持っているのよ」

「お嬢様とはいえそれは流石に悪いよ。母さんに買ってもらえば……」

「先延ばししそうな雰囲気があるので……わたしもアリサちゃんに賛成かな」

「ええ……それだったらフェイトさんたちも」

「ごめん、もう持ってる」

「……」

抵抗するもむなしく、僕は携帯ショップに連行された。

携帯を手に入れたが、契約その他もろもろは流石に未成年だけでは出来ないため、

母さんとまた今度と思ったが、なぜか買えてしまった……。

(後日、なのはが念話で母さんに連絡、先に根回ししていた事が判明)

しかも、買わされたと同時に全員の連絡先を入れられた。女子の行

動方ってすごいな……

## Memory 44 記憶処理

フェイトさんが基地にやってきて数週間。

ここ最近は特に目立った動きも無くいたって平穏な日々を送っている。

フェイトさんたちは基地に住み込みみたいな状態だが結構な割合で外出しており、

なのは以外にもアリサやすずか、はやてたちとの仲も深めている。

調査のほうは、実は現在ほぼ手詰まり状態になってしまっている。

理由としては、残りのジュエルシードが海中にあることは確定したが、

MMAの海上海中用装備の開発が遅れに遅れている。

どうもリフボードを自在に操る点で個人的な技量差もある上、なによりサーフボードより

やや大きいぐらいの装置に推進系エネルギー系機体制御系を組み込むとなると、

とてもじゃないが水の上で浮かばない。軽量化に失敗している。

そのため現在海上装備のリフボードは一旦凍結し、飛行装備であるエナジーウイングの開発に

集中しているがこれも上手く行っていない。

エネルギー効率や姿勢制御、安定性に不安が残り実戦投入は無理と判断されているからである。

特にエネルギー効率の問題は深刻で新島さんが装着して試験飛行したところ10分持たずに

新島さんの魔力が尽き墜落してしまった。

他の隊員のみならず同じで最高11分ぎりぎりという状態である。などなど、装備開発が進まないため第1班は現在開店休業状態である。

「やあっ！」

「くっ・・・たあっ！」

今はなのはとフェイトさんの模擬戦をモニターしている。

二人とも時間があるときは基地のトレーニング施設を利用しお互いに切磋琢磨している。

「すごいね。昨日と比べて動きがまた良くなってる」

「あのなのはって子もすごいけど、フェイトも動きが前とは段違いだよ」

一緒にモニターしているユーノ君とアルフさんも関心して見入っている

驚くのも無理は無い、明らかに動きが良くなっている。

「驚いているのはこっちだよ。この成長速度は今までの世界でもトップクラスの速度だ。

まだまだ伸びるな・・・この二人は」

「ふう・・・お疲れフェイトちゃん」

「なのはも。お疲れ」

今日の模擬戦はなのはの勝ちで終わった。

「すごいねフェイトちゃんの魔法！」

「なのはも最近から魔法を習い始めたって聞いているけど私と変わらないくらいだよ」

二人は今日の模擬戦の話や魔法について色々話している。

「そういえばフェイトちゃんって誰から魔法を教えたもらったの？」

「えっとそれは・・・母さんとアルフ・・・と・・・(♪♪!!?) @ @) かな?」  
!?!?!

「そ。あたしは主に強化型。基礎はプレシアと(♪@@!!^。、?..) くらいかな?」

二人が言葉に引っかけた瞬間、僕の背筋に悪寒が走った。

「二人とも、動かないで」

「え?」

「ど、どうしたんだい!」

驚いた二人を尻目にフェイトさんの頭に手を添えて目を瞑った

「ユーノ君、アルフさんの記憶か頭部に念入りに探查魔法をかけて」

「ええ!? どうして?」

「今すぐに」

ユーノ君にも手伝ってもらい探査をするとユーノ君が異変に気付いた

「ん? なにこれ? 魔法... かな? 全く知らない術式の何か掛かっている」

「.....え?」

アルフさんが目を丸くして固まった

「オーツ... もしかして...」

「うん。フェイトさんも同じのがある。これは...Ωの記憶処理のパターン配列と同じものだね

Ωに記憶処理をされている」

記憶処理されているという事は何かΩにとって不都合な記憶があるということ、

それを暴くために僕は二人の記憶処理魔法を解除した

「うっ.....」

解除した途端、二人は頭を抱えて蹲ってしまった

「フェイトちゃん! アルフさん!」

なのはさんが心配して駆け寄ると、ゆっくりと立ち上がり、引つかかっていた事があふれ出てきたらしく震えた声で話し始めた

「そ... そうだ、私に魔法を覚えてくれたのは母さんと... リニスだ!」

「リニスだ... あたしはリニスから何もかもを学んだんだ... 何で... なんてこんな大事な事を忘れていたんだ!!」

「リニス?」

新たに出てきた人物の名前に二人を除くみんなが? を浮かべた

「リニスは母さんの使い魔で、私たちに魔法や普段の勉強とか、母さんの助手をしながら私たちの先生でもあったんだ」

「フェイトの魔法の基礎、あたしのサポート魔法、今使っている魔法のほとんどはリニスが基礎を教えてくれた」

落ち着いた二人は、リニスという人物について話してくれた

「でも、突然いなくなつた」

「?いなくなつた?」

「プレシアも突然回路が弱くなつたのに驚いて、あちこち探したんだけど見つからなかつた」

「どうやら、リニスという人はいきなり失踪したらしく、未だに見つかっていないとのこと」

「僕は気になつたことを聞いてみた」

「それいつ?それとその時、すでにΩと手を組んでいた?」

「2・3年ほど前かな?あと、私たちは知らなかつたけど・・・多分、母さんとはもう・・・」

「フエイトさんの答えを聞いて何となく予想が付いた」

「オーツ・・・なんか分かつたのかい?」

「魔法回路が切れていないということは生きているとは思ふ。多分、リニスさんは何か見たんだ。Ωが何かをしている事を」

「口封じつてこと?でも、なんで記憶処理を?」

「ユーノ君の言うとおり普通だったら記憶は消したほうがいい。だけど、記憶を消すつていうのは結構難しいんだ。ちよつとしたきつかけで思い出す可能性があるからね」

「だから、消すんじゃないかって思い出せないように記憶を曖昧にするほうが効果的なんだ。」

「思い出したけど思い出す手がかりがない。だからどうしようもない。」

「そうすると一旦放置するしかなくなる。すると、だんだん「思い出せないのが普通」という風に」

「慣れちゃうんだ。そうして思い出さなくなっていく。というのがさっきの魔法の正体」

「えつと・・・つまりいきなり消すんじゃないかって、少しずつ思い出せないようにしていくということ?」

「そういうこと。スパツと切るんじゃないやなくて徐々に消えてくようにするから違和感も少ない。」

大方、寝ている時や一瞬の間を使ってかけたんだろう」  
「リニス是一体どこに行ったの……」  
フェイトさんの、悲しげで寂しさが混じった声が響いた



## Memory 45 調査

ある日、おかしな反応があるということで会議室に部隊全員となのはさん、

ユーノ君、フェイトさん、アルフさんそれとアースラからクロノ君がやってきた

「みんないるわね。じゃ、状況を説明すわ。

ジュエルシードとはちよつと異なった反応が確認されたの。

場所は海鳴市と隣の町の境目近くの山の中。ここにはそれなりの大きさの湖があつて、

その付近から反応があつたわ」

「では、早速、部隊を派遣しましょう」

新島さんが部隊の派遣を提案すると、母さんは首を横に振った

「んー。そうしたいのだけど、ここは近くにハイキングコースがあつて割と人が来るの。

見つかると厄介だから今すぐの派遣はリスクすぎる」

「では、日暮れに?」

「そう言うことになるわね。部隊も少人数に絞るわ。とりあえず誰を向かわせるか01に一任する

それとなのはさんたちはどうする?」

「もちろん行きます!」

「私も」

「僕も同意だ。センサーに引つかかるほどの強力な反応を見逃すわけには行かない」

全員参加が決定し、日没を待ってから出発という流れになった

日没後

「よし、みんないるな」

人数を確認しているのは01と思いきや02だ。参加メンバーは魔道士組プラス02、

リハビリを兼ねた09、10だ

「しかし、隊長のMMAが動作不調を起すなんてな。あれだけ酷使すれば仕方ないとはいえ」

「まあ、これが作られていきなりこんな大きな事件が起きるなんて予想できんからな。」

俺たちの怪我もだが」

10の言葉通り、この二人は以前にフェイトさんに化けたΩの襲撃を受け重傷を負い、

ずっと基地の医務室生活だった。完全復帰とはいかないものの、一応、ある程度の戦闘には

耐えられると判断されたため今回の任務に選ばれたそうだ。

「反応のあった地点は、ここから森の中に入ったところだ。暗いから暗視装置を使え。」

ライトは使うな、目撃されたり、謎の発光物として噂にされたくないからな」

「了解」

普段ならハイキングにもってこいの場所なのだろうが、今は日が落ち、あたりは薄暗く、

完全に真っ暗になるのも時間の問題と思われる。

すると、妙に固まっている二人がいた

「どうしたの？なのはさんにフェイトとさん？」

「うえ!? な、なな、なんでもないよ！ ね、ねえ、フェイトちゃん！」

「う。うん。なんでもないよお、オーツー」

「(なのはって、暗いところだめなんだなあ……)」

「(ビビってるなあ。フェイトって、この手の雰囲気、大嫌いだったの忘れてた)」

ユーノ君とアルフさんの心配そうな表情を見て分かった。

「(この二人、暗い場所とお化けとかダメなタイプだ)」

「あー……二人とも、怖いなら無理しなくてもいいぞ」

「だ、大丈夫です！」

「大丈夫！頑張ります！」

「お、おう……」

02が心配して代わりに言ってくれたが、大丈夫の一点張り。時間も迫っているのです、とりあえず現場へ向かう事にした。

数十分後、現場にて

「さて、現場に着いたのだが……これはなんだ？」

02が目の前にあるものを見て素直な感想を言った

「こんな山の中になんでこんながあるんだ？」

「不釣合いだな。こんな場所にこんなもの作ってたってどうしようもないだろうに」

09と10の二人も同じような感想を言った。誰から見たってそう言と思う。

「ね……ねえ、オーツさん、これって、廃墟……だよな？」

「うん。見た感じそうだね。それもかなり大きい、廃ホテル？洋館？かな」

今、僕たちの目の前には巨大な廃墟、恐らくホテルと思わしき建物が不気味な雰囲気で

暗闇の中に佇んでいた。

「司令、現場に廃墟があるんだが？この建物に関する情報はありますか？」

『ちよつと待ってね……あつたわ。その建物は数十年前にあつた、この辺のリゾート開発の際に

建てられたものらしいわ。ただ、建設会社の汚職とか、リゾート開発事業の費用問題で、

完成間際で中止になってそのまま閉鎖されたみたい』  
「どうやら、かつての開発の遺構らしい。」

「ていうかこんな規模のものを放置するなんてもったいないといふかなんと言うか」

「リーネさん……その、場所、間違ってますんか……？」

『残念だけど、その建物からね。中か外かは分からないけど……』

大丈夫、フェイトさん？声震えているけど？」

「ぜつ、全然問題ありません！ありがとうございます！」

フェイトさんはそう言っつて、慌てて通信をきってしまった。

「とにかく、内部を探索しないと始まらないな。よし、行くぞ」

02が先頭になって、ホテルの正面ゲートから入ろうとした瞬間、白い稲妻が走った

「うわああああ!!」

02が白い稲妻に撃たれるのと同時に吹っ飛ばされた

「大丈夫ですか!？」

「ああ……。一体なんだ？」

見た目は派手に飛ばされたものの02には目立ったダメージは無いよう、

普通に起き上がることが出来るくらい無事だった

「バリア？見た感じは何も無いが……」

「……槍の先で突いてみたがなにも手ごたえは無いな。人にしか反応しないのか？」

09が槍の先端を門に近づけたり、門を潜らせてみたりしたが全く反応が無い。

「……僕が行って見ます」

「……分かった。気をつけろよ」

今度は僕が門に近づき、門をくぐってみた

「……なんとも無いですね」

「うーん……条件はなんだ？」

あっさりとくぐれてしまった。あまりにあっさりだったので拍子抜けしてしまった

「……なのはさん。ちょっと門をくぐってみてください」

「う、うん」

なのはがゆっくり門に近づき、目を瞑って一気に駆け抜けた。

やはり何も起こらない

「もしかしたら、リンカーコアの反応の有無が条件の可能性があるの

かも」

その後も、フェイトさん、アルフさん、ユーノ君、クロノ君といったコアを持っている人は

あつさりと通り抜けられたが、コアを持たない02、09、10は弾かれてしまった。

「やっぱり、コアの有無みたいだ。どうする？彼らには外で待機したほうがいいと思う。」

無理に入ろうとして、何かしらの罠が作動する可能性もある」

「クロノさんの言う通りだな。……仕方ない、我々は外周を調べてみる。」

内部はそちらで頼む、気をつけるよ」

「了解、そちらも気を付けて」

僕たちは、内部に入れる人と入れない人で別れて調査することになった。

門をくぐれた僕たちは建物内部に入る前に感じたのは違和感だった。

特にアルフさんが強く感じていた。

「な、なんか……妙に体が重く感じるんだけど……ほかのみんなは何にも感じない？」

「いや？特には感じないけど……」

「ん……気のせいかな、それとも疲れているのかな？」

アルフさんが首をかしげていた。しかし、その後、その違和感の正体に気づくことになった

建物内部は、完全に真っ暗で、夜目が効いても足元が危ういくらいだった。

MM Aには暗視装置が標準搭載されているため、建物に入ったときに作動させている。

そのおかげか僕は大丈夫だったが、魔導士組に問題が発生した。

「暗いな。みんな、光源を発生させる魔法を展開してくれ」

クロノ君の指示で、光源を発生させようとしたが、

「ん？魔法陣が構築できない？」

「あれ？なんだろう、うまくいかない・・・」

「私も」

「僕もだ、どうなっているのだろうか？」

その原因は、レジングハートがなのは魔法陣構築の際に気づいた。

『マスター、マスターが魔方陣を構築しようとした際に微かですが、構築を妨害する』

正体不明の波長のようなものが観測されました。しかし、発生源がわかりません』

「え？妨害？」

「もしかして、アルフが感じていたのって、これのこと？」

「少し調べてみよう。『スキルロード』」

探査魔法をかけて周辺を調べてみた。

記憶の書が使える時点で、この妨害魔法は異世界系のものであることが分かった。

そして、この建物全体に妨害魔法がかかっていた。

しかも、この魔法はなのはやフェイトさん、クロノ君たちが使うこの世界のものではない、

全く違う系統の魔法だった。

「どうやら、妨害魔法がかかっている。しかも、これはΩのものっぽいな。・・・いてて」

反動でひどい頭痛が来ているが、気にしていられない。

「一度戻ろう。この暗闇を明かりなしで探索するのは危険すぎる」

クロノ君が戻ることを提案した。それもそのはず、僕はMMAのおかげでまだ見えるが

ほかのみんなは肝心の魔法が使えず、足元すら見えていないだろう。

「クロノ君に賛成だね。しかもΩが関わっているとすると、装備や対策をしっかりとしないと」

「そ、そうだね！一度戻って、ちゃんと準備してからまた調査しよ」

「わ、私もそれがいいと思うな」

「早くここから出たいんだな、この二人」  
「なのはとフェイトさんも『強く』賛成したため、僕たちは一度出直すことにしようとした…」

その瞬間、突然、建物入り口が黒い壁に阻まれ出られなくなった。「え!?これって!?!」

「空間断絶!しまった!」

Ωの魔法の一つで『空間断絶』が発動していた。さらに、「ん?うわっ!」

一番後ろにいたユーノ君が驚いた声を上げた。一斉に後ろを振り返ると、

そこには真っ黒い穴が出現しており、轟音とともにすべてを吸い込み始めていた。

「くツ:吸い込まれ...うわっ!!」

「ユーノ!!...つかま...うわあっ!」

吸い込まれそうになったユーノ君を助けようと、クロノ君が手を伸ばしたが、

「うわああああああああああああああああ!!」

二人とも、足が宙に浮いてしまい、一瞬で吸い込まれてしまった。

「ユーノ君、クロノ君!!」

「なのはさん!だめだ!」

なのはさんが吸い込まれた二人に気を取られてしまった瞬間

「え!きやああ!!」

「なのは!!」

足が宙に浮き、吸われそうになった。僕はなのはの手を片手でつかみ

もう片方はブレードを床に刺し、ターンピックで床に脚部を固定し、何とか留まっていたが

「(引きずり込まれている!)」

ズリズリと少しずつではあるが穴のほうに吸い込まれて行っていた

「し、しまっ!うわあっ!」

「アルフ！ダメ、捕まって！」

後ろにいた、アルフさんが足を取られ、吸い込まれそうになった。フェイトさんがバルディッシュを床に刺し、踏ん張ったが

「しまっ！きやああ!!」

「え？（ゴスツ！）うおっ！わああああああああああ!!」

「きやああああああああああああああ!!」

バルディッシュが床から抜け、そのまま後方にいた僕に激突してしまった。

そのため、僕自身もブレードから手が離れしまった上に、最悪なことに二人分の衝撃に

ターンピックが耐えられず、パキンツという金属音とともに折れてしまい

みんなまとめて黒い穴に吸い込まれてしまった。



# Memory 46 迷宮 00side

『本体ダメージ・・・無 神経伝達異常・・・無 戦闘行動・・・可

周囲の敵性反応・・・無

意識覚醒、起動』

「う・・・うう・・・くそ、相変わらず嫌な目覚めだ」

頭に響く機械音声と目を閉じているはずなのに、映り込む文字列と周囲の状況。

NIS計画で改造された際の影響で、気絶など意識を失った場合、一部機械化された脳が

自動的に周囲の状況と自分の体の状況を分析して、意識の覚醒を促すようになっている。

便利といえば便利だが、気持ちの良いものではない。

「みんなは・・・ここは・・・」

意識が覚醒して初めに目に入ったのは、無機質な壁と天井：通路だった。

しかも薄暗く圧迫感に襲われる感じがする。過去の経験からすぐにこの場所が何か分かった。

「迷宮か・・・面倒な。コアルームを探さない」と

コアルーム・・・この迷宮を制御する部屋を探すため僕はこの迷宮を進んでいくことにした。

壁に手を当て、迷宮を構成する魔法回路を読み取り、不自然な箇所を探す。

これを繰り返していくとコアルームにたどり着くはず

曲がり角を10回ほど曲がったとき、今いる通路と別の通路との合流点の奥から、

かすかに誰かの足音が聞こえて来た。

強化された聴覚で聞き取れたものだから、おそらく相手はこっちの足音が聞こえていない。

「(誰だ?)」

僕は壁に張り付き、相手が来るのを待つてみることにした。

1，2分後、足音が近くなってきた。人数は一人。

「……ん？この歩き方は……」

何回も転生を繰り返して、長い時間を生きていたせいかな、裏切りなども数多く経験しているため、

かかわった人物のクセなどを記憶しておくことが習慣になってしまっている。

そのせいかもしれないがおかげか、歩いてくる人物が特定できた。

コツンコツンコツン…

徐々に足音が近づいてきた。

僕は足音の主がこちらの通路との合流点に近づいた瞬間、相手の目の前にブレードを突き出した

ビュッ！

「うあっ！」

風を切る音といきなり現れた切っ先に相手が驚き、尻餅をつく音が聞こえ、

反対の手で銃を構えながら僕は姿を現した

銃口の先にいたのは

「お、オーツー!?!」

「やっぱりクロノ君か。ごめん、確信がなかったからこうするしかなかったんだ」

やはりクロノ君だった。当の本人は知っている人物で安心したのか安堵したような表情をした。

もつとも、いきなり切っ先や銃を突きつけられて驚いたことのほうが大きいみたいだけど。

「こんな場所だから仕方ないが、心臓に悪い…」

「一応の警戒だからね」

クロノ君に手を貸して起き上がらせると、クロノ君が状況を聞いてきた

「オーツー、ここはどこなんだ？あの黒い穴に吸い込まれた後気が付いたらここに…」

「ここは迷宮だと思う。おそらくΩが侵入者を閉じ込めるために張った罠にかかったんだ」

迷宮という聞き覚えのないワードにクロノ君は首を傾げた。

「迷宮？ゲームでよく出てくるダンジョンというものか？」

「まあ、確かによく似ているけど、ゲームと違って大きな違いはここには明確なゴールはない。」

というより出口や正解のルートはない。入った人を永遠に彷徨わせるための場所だよ」

「出口がない!?じゃあ僕たちはここから出られないということなのか？」

「普通に道をたどっているだけじゃ永遠に出られない。だから抜け道を探す必要がある」

「抜け道？」

僕は壁に手を当て、この迷宮を構築している魔法の術式回路を浮かび上がらせた

「壁とか床、天井にこんな魔法回路があるから、これを読み取って自然な部分を探すんだ。」

見つけたら、強い衝撃を与えると抜け道が現れる。これを繰り返して、この迷宮の中枢を目指す。

中枢についたら、この迷宮を構築している魔力の元、動力源ともいえばいいかな、それを止める。

そうすればこの迷宮が消滅して出られるはず」

「管理局の人間、特に執務官クラスはロストログアの暴走に巻き込まれた時の対処法を学ぶが・・・」

オーツー、君は一体、どこで対処法を学んだんだ？」

というより、なぜこの場所の対処法を知っているんだ？」

「・・・そんなことより、みんなを見つけて早く脱出するのが優先じゃないかな？」

「・・・そうだな。早く脱出しよう」

クロノ君は腑に落ちない表情を浮かべたが、本当に優先すべきことが分かっているため、

それ以上聞いてくることはなかった。

僕たち二人は、抜け道を探しながら中枢を目指すため、迷宮を歩き始めた

# Memory 47 迷宮 なのは&フェイト ユー ノ&アルフside

「ん……ん。いたたた。……ここはどこ?」

なのはが目を覚ますと、見覚えのない通路のような空間に倒れていた。

「ここは一体……みんなは?みんなはどこ?」

起き上がろうと手をつくとき、ムニユリ、と何か柔らかいものも感触を感じた。

さらに、自分はその柔らかいものの上にいることに気が付いた。

「なっ!?!」

慌てて手をどかすとそこには自分と同じように倒れているフェイトの姿があった。

「フェ、フェイトちゃん!大丈夫?」

「う……ペしゃんにされるかと思った」

「ご、ごめん!フェイトちゃん、私気づかなくて」

「ま、まあ、私もなのはに押し潰されるまで気を失っていたから大丈夫だよ。でも、それより」

フェイトは周りの空間を見渡し、ここが一体何なのか見当もつかない様子だった

「とにかく移動しようよ。もしかしたら、みんなもどこかにいるかもしれないし」

「そうだね、ここにいるても仕方ないみたい。それにΩが関係しているんだったらオーツーさんと

合流したほうがいいかもしれないし」

二人は、同じように飲み込まれた四人を探しつつ出口を探し始めた。

しばらく通路に沿って歩き続けたものの、出口どころか分かれ道まで現れ始め、

なのはとフェイトは困惑し、少しずつ焦りが見え始めた。

「ねえ、フェイトちゃん。これってさつきと同じパターンじゃないよね？」

「えっと・・・その可能性はあるかも。さつき通ったような気がする」  
しかし、行けども行けども全く同じ風景が続き、二人はどこを通ったのか通ってないのかが

完全に分からなくなっていた。さらに、狭くもないが広くもなく、暗くもなければ明るくもない

不気味な雰囲気は二人の焦りや恐怖心を駆り立てており、変な圧迫感を感じていた。

「ね、ねえ：なのは。驚かすわけじゃないんだけど、後ろから誰かついてきている感覚ない？」

「え？や、やめてよフェイトちゃん。私、お、お化けとか苦手なんだから」

「わ、私だって：に、苦手なの。とにかく移動しよう。ここ、不気味すぎる」

しかし、移動し続けても全く変わらない空間に、二人はどうとうへたり込んでしまった。

「もうだめだー！」

「落ち着いてなのは！まだ諦めるのは早いよ」

そう言いつつもフェイトにも余裕はなくなってきたようだった。

その時、今まで一言も話さず、点滅を繰り返していたレイジングハートとバルデッシュが

持ち主である二人に話しかけて来た。

『マスター。失礼します、この場所に関してですが先ほどからバルデッシュと共に調べた結果。壁の一部に不自然な個所を発見しました』

『そのまま、まっすぐの壁を叩いてください』

フェイトはバルデッシュに指示された箇所を叩くと、壁の一部が消え、今までとは違う

細く、暗い通路が出てきた

「これって？今までの通路とは何か違うみたいだけど」

「もしかして出口まで繋がっている？」

二人は不安はありつつも、同じ道を延々と歩くくらいならと、発見した隠し通路を辿っていった。

「・・・あれ？行き止まりかな？」

しかし、いくら歩いても一向に外へ出られる気配がなく、次第に二人の表情は曇り始めていた。

『ストップです。その横の壁を叩いてください』

「わかった。えい！」

今度はなのはが軽く叩くと、同じように壁の一部が消え、先ほどと似たような通路に出た。

「あれ？またさつき見たいなところに出たような・・・」

「う、うん。あ、もしかして、今みたいに隠し通路を探して辿ってけば出口につけるんじゃない？」

『恐らくは。私とバルディッシュでこの迷宮を構築している魔法回路を解読してみました、

見たこともない回路のため出口までの道を探すことは不可能です。

力不足で申し訳ありません』

レイジングハートとバルディッシュは申し訳なさそうに、現状できることを伝えた。

「そんなことないよ！二人のおかげで少しだけ希望が持てるもん。ありがとうね」

「そうだね。とりあえずここから出てみんなと合流しないとね」

「うん。まずはこの迷路を攻略しようか」

こうして二人は隠し通路を探しつつ、再び歩き出した。

—————

「ねえ、ユーノ・・・。ここさつきも通った気がしない？」

「・・・間違いない。さつき付けた目印がある。ループ構造になっているみたい」

ユーノは冷静に状況を分析し、この迷宮を攻略しようと頑張ってい

た。

二人とも、目が覚めたら、なのはたちと同じ通路の迷宮に倒れていることに気が付いた。

ユーノたちもみんなと合流するため、出口を探して迷宮を歩き回っていたのだった。

その時、ユーノは自身の経験をフル活用し、この不気味な迷宮の規則性を推理していた。

「え?ということは同じところグルグル回っているという事?」

「というより、間違った道を通った時点で戻されるんじゃないかな?・・・確認はないけど」

「フェイトは大丈夫かな・・・」

アルフの心配そうな表情が迷宮に響いた。

二人は体感で2, 3時間ぐらい歩いたのだろうか、時間を知る方法がないため感覚を頼りにするしかなかったが、明らかに疲労が溜まってきた。

さらには、景色に全く変化はなく、無限に廊下や部屋が続いているだけだ。

「……これ本当に出口ってあるのかな……?」

「…一応、目印をつけながら来てるけど……僕も心配になってきた……」

アルフの言葉に、流石にユーノも自信がなくなってきた。

すでに、かなりの距離を歩いているはずなのに何も変化がないからだった。

「……くそっ!」

アルフが悪態をついて壁を殴った。すると、

「へ!?うわあっ!」

「アルフ!」

壁の一部が消え、その中にアルフが落ちてしまった。

「大丈夫!」

「いたた……。何が起こった……なんだい?」

アルフは困惑しながら立ち上がった。



ユーノもアルフが立ち上がるのと同時に現れた謎の通路に降り立った。

「これは……？隠し通路かな？もしかしたら、今までの通路のどこかにも同じような場所があったのかも。もしかしたらこの道が本当の道なのかな？」

「じゃあ、脱出できるってこと!?!」

「それか、いくつかの隠し通路を経由していく感じかもしれない」

「でも、それだと全部の壁を叩く羽目になるよ。そんなことしたらこつちが先に参っちゃう……」

うーん、と悩んでいると、ユーノが壁に手を添えると、壁から魔法回路が出現した。

「あ……このタイプなんだ。それなら、回路を読み取ればなんとかなるんだけど……」

見たこともない文字と方式……完全に読み取るの不可能だ……でも、ヒントにはなりそう……。

うん大丈夫、隠し通路のほうは僕に任せて。何とか見つけられるかもしれない」

「本当!?!じゃあ、そつちのほうは頼りにしてるよ。壁を壊すのは任しといて!」

そう言つて、二人は現れた隠し通路を進んでいった。

## Memory 48 リニス

「オーツー、この部分か？」

「…そうだね。合ってる。すごいな、少し教えただけなのに、もう見分けることができるなんて」

オーツーとクロノのコンビは、この場所のことを知っているオーツーの指示に従い、

迷宮の隠し通路を辿り、中央にあるコアルームと呼ばれる場所に向かっていった。

「しかし、さっきは上に向かったと思ったら、今度は下っている…。一体、この迷宮はどんな構造をしているんだ？」

「コアルームに着けば全体像が分かるよ。それから、上に行ったりしたに行ったりしてるのは構造が入れ替わった影響だと思う」

「構造が入れ替わる？…いったいどういう事だ？」

「それももうすぐ分かるよ。…そろそろ終点かな？」

すると、今まで通ってきた隠し通路とは雰囲気が変わり、通路全体にエネルギーの通り道のような光る線が現れ始めた。そして、その線が二人が歩いている先から走って来ているのが分かった。

二人がその線を辿っていくと、非常に明るい大部屋にたどり着いた。

その部屋は、今入ってきた通路以外の入り口がなく、部屋の中央に端末がポツンあるだけだか、

その端末から先ほど辿ってきた光る線が出ているため、何かの制御端末という事だけは分かった。

「オーツー…ここは？」

「ここがコアルーム。この迷宮の中央で制御システムが全部詰まっている」

そういうと、オーツーは慣れた手つきで部屋中央の端末を操作し始めた。

すると、空中にこの迷宮の全体図が映し出された。

迷宮はまさにルービックキューブという形と構造をしていた。

「これが、この迷宮の全体図なのか……。まるでルービツクキューブだ」

「その通りだよ。この区画一つ一つに、あの通路しかない場所が詰まっているんだ。」

それが3×3の9つで一面を形成している。そして、この迷宮に取り込まれたものが違う区画に

移動した瞬間、移動先やその周辺が、全く違う場所の区画と入れ替わる。

これがこの迷宮の迷う原因。踏破済みや未踏破の場所がランダムで入れ替わるから

「マップニングもかなり難しいよ」

「しかし、そのパターンだといずれは行ったことのある場所だらけになる上、僕たちみたいに隠し通路を見つける可能性もあるんじゃないか?」

「隠し通路も一緒に移動しているし、全部の隠し通路がここに繋がっているわけじゃない。」

正解の道は一つだけ。それに、ある程度踏破されると、この迷宮は区画をリセットして

新しく書き換えるから、行ったことのある場所しかないっていう状況には絶対にならないよ」

「なんて高度なシステムなんだ……。ロストロギア級に危険な存在じゃないか」

クロノはこの迷宮の仕組みを聞かされると頭を抱えた。

執務官という仕事上、ロストロギア関係に関わったことがあるため、

この場所の危険性が余計に分かってしまったためだった。

オーツーが話しながら端末を操作していると、迷宮の全体図に4つの赤い点が現れた。

「みんなの居場所が分かったよ。どうやら、みんな隠し通路の存在には気が付いたみたいだ。」

でも、流石に隠し通路まで入れ替わっていることには気が付いてい

ないみたい。

みんな、めちやくちやな方向に行ったり来たりしてる。みんなをここに集合させないと……」

オーツーはさらに端末を操作すると、二つの光る扉が左右に出現した。

「今度はなんだ？」

「みんなの目の前に、ここに繋がる扉を出現させたんだ。ここに集まってから脱出しないと、

バラバラな位置に飛ばされる可能性があるからね。

僕はなのはたちを迎えに行くから、クロノ君はユーノ君たちを迎えに行つてあげて」

「分かった」

オーツーとクロノはそれぞれ、扉に入り、仲間を迎えに行つた。

—————

「え……いきなり目の前に何か出て来たんだけど……」

「フェ、フェイトちゃん……なんだと思う……?」

なのはとフェイトはいきなり目の前に現れた、光る扉に戸惑っていた。

この場所は魔法が使えないため、もし敵が現れるとどうしようもないからだった。

すると、その扉の先から見知った姿が現れた。

「二人とも、大丈夫？」

「あ、オーツーさん！良かったあ……敵かと思っちゃった……」

「オーツー!?良かった……敵じゃなかった……」

二人は同じような反応をして、その場にへたり込んだ。

「ケガはないようだね。もう大丈夫だよ。この先でみんな待つてるから、着いてきて」

「え!?みんな?アルフたちがこの先に?」

「うん。ユーノ君とアルフさんはクロノ君が迎えに行っているから、さ、早く」

「分かった。行こ、なのは！」

「あ、ま、待ってよおー！」

二人がオーツの後に続いて光の扉に入ると、コアルームに着き、二人の到着と同時にクロノがユーノとアルフを連れて戻ってきていた。

四人は無事な再会を喜び合っている中、クロノはクロヤに真面目な声で質問した。

「それで、これからどうやって脱出するんだ？」

「この迷宮を構成しているエネルギー炉を停止させる。そうすれば、この迷宮は自然消滅して、

僕たちは元の場所に戻されるはず」

オーツはそういうと、再び端末を操作し出してエネルギー炉の停止作業を始めた。

みんなが見守る中、作業を進めっていると奇妙な点を見つけた。

「ん？この反応……。基地が拾った反応と同じものだ……。エネルギー炉に何かあるな……」

オーツは端末を操作し、エネルギー炉を露出させた。

すると、部屋中央の床が円状に沈むとその穴から、円柱状のエネルギー炉がせせり出てきた。

「オーツさん、これは？」

「この迷宮のエネルギー炉。これが生み出すエネルギーでこの迷宮を維持しているんだ」

『膨大なエネルギーです。この量は『アースラ』のエンジン出力よりも大きいです』

「アースラよりもか!?とんでもないエネルギーだ……」

レイジングハートの計測を聞いたクロノは、エネルギー炉の生み出す量に驚きの声を発した。

オーツは、エネルギー炉本体に取り付けられているパネルを操作していた。

その様子をなのはとフェイトとユーノが興味津々という感じで見ている。

「オーツー。何をしてるの？」

「エネルギー炉の中身：エネルギー源を取り出そうとしているんだ」

「このエネルギー炉の元はジュエルシードじゃないのですか？」

ユーノが質問すると、オーツーは首を横に振った。

「いや違う。ジュエルシードより魔力が低い……。何か別のものを入れて無理やり魔力を吸い出して増幅させているっぽいな」

操作が終了したらしく、エネルギー炉の正面扉が蒸気を吐き出しながらゆっくりと開いた。

その中には、何やら人間サイズの結晶状の物体が入っているのが分かった。

しかも、中には何かが入っている……というより閉じ込められていた。

その中身の正体が見えた途端、とんでもない金切声が上がった。

「ぎゃあああああああああああああああああああああ!!」

金切り声の主はフェイトだった。

結晶の中に閉じ込められていたのはアルフのような獣耳に尻尾の生えた女性……

フェイトやアルフに教育や魔法を教え、母親のプレシアの使い魔、リニスその人だった。

フェイトはあまりの衝撃に、完全に力が抜けその場にへたり込んでしまっていた。

「う、うわあああああああああああああああああああああ!!」

アルフは半狂乱になってリニスが閉じ込められている結晶に殴り掛かっていた。

「ダメだアルフさん！衝撃を与えたらエネルギー炉が暴走する！止める!!」

オーツーは、結晶に殴り掛かろうとしたアルフの足を引っ掛け転ば

せると、

目にも止まらないスピードでアルフを組み伏せた。

「離せ！離してくれ！リニスを手助けなくちゃ!!離せッ!!」

アルフは何とか拘束から逃れようと必死に藻掻いたが、フェイトやなのはとそんなに変わらない身長のおーツーの拘束はビクともしなかつた。

あまりの暴れっぷりに、流石に危機を感じたクロノがアルフにデバイスを向けると、

アルフはガクンと意識を失った。

「睡眠魔法をかけた。しばらくは起きない。」

「ありがとう。フェイトさんは……」

おーツーがフェイトの方を見ると、なのはがショック状態のフェイトを抱きしめていた。

フェイトはショックのあまり虚脱状態だった。

おーツーは二人を任せると、炉内部のリニスが閉じ込められた結晶を自分の身長よりも大きいものにも関わらず、ゆつくりとスムーズに取り出した。

すると、エネルギー源を失った迷宮が眩い光を発し、その場にいた全員がその光に飲まれた。

## Memory 49 崩落

一方、迷宮に飲み込まれた直後、謎のバリアに阻まれ周囲の探査と別の入り口を探していた

02, 09, 10は中に入った全員の反応がセンサーから消失し、連絡が付かなくなったことを

基地に連絡していた。

「こちら02！中に入った全員の反応が消えた、連絡もつかない！そっちではどうだ!？」

『こちらでも同じく反応が消失しました。どうにか中に入れませんか？』

基地からの問いかけに、02は周囲の壁を乗り越えようとしている09と10に聞いた。

「どうだ、入れそうか?」

「越えられそ・・・(バチンッ!) うおあっ!」

「痛って…クソッ! 02、ダメだ。周囲一帯入れそうもない。どこもかしこもこんな感じだ」

09と10が壁を乗り越えようとした瞬間、やはり入り口と同じようにバリアに阻まれ、

白い稲妻に撃たれ弾かれていた。

「…無理そうだ。他に案は…」

「02、あれは何だ!？」

10が慌てた様子で廃墟を指さした、02が振り返ると廃墟の内部が見えていた場所全てが黒い何かによって一瞬覆われ、すぐに消滅していた。

「今のは、以前報告があった『空間断絶』…。内部探査組が危険だ！何としても中に入るぞ!」

「しかしどうやって!？」

「…この柵を吹き飛ばす」

02はメイン武装であるソリッドシューターを柵に向かって構え、トリガーを引いた。



砲口から砲弾の形に形成された魔力が発射され、柵に向かって一直線に飛んでいった。

02はバリアに阻まれ、砲弾が掻き消さるかと思っていたが、何と、砲弾は柵に命中し、

爆発音が響き渡り噴煙が上がった。噴煙が収まると、壁が粉々に吹き飛ばされ大穴が開いていた。

「バリアがない?」

「今のうちに突入しましょう!」

「こちら02。攻撃してみたらバリアが消滅していることが判明。これより内部に突入する」

『こちら基地、了解しました。気をつけて突入して下さい。それと、攻撃の際は必ず許可を』

取ってください。周囲に知られる可能性があります』

基地のオペレーターはチクリと言いつつも、02たちの突入を許可した。

02たちはグライディングホイールG Hの擦過音を響かせながらホテルの廃墟内部に突入していった。

—————

内部に突入した3人は、搭載されている暗視装置と熱源探査装置を使い周囲を見渡したが、

中に入った全員の反応はやはりなかった。

「こちら02。内部に突入したが、00を含む全員の反応がやはりない。そちらではどうか?」

『こちら基地。こちらのリーダーでも同様です。しれ(ゴホン)：リーネさんによると、

場所移動の罫が作動して建物のどこかに飛ばされた可能性があるとのことです。

建物内部に何かしらの痕跡がある可能性が高いため、その痕跡を探してください』

「了解した。これより搜索を開始する」

そう言って、02は通信を切り、搜索のプランを練った。

「どうする、手分けして探すか？」

「それはダメだ。さっきの空間断絶から、オメガが関わっているのは確実だ。」

下手にばらけると各個撃破されかねん」

「しかし、密集しても一撃で吹き飛ばされる可能性もあるぞ？」

09、10からの指摘を聞いた02は搜索の際の指示を言った。

「罨や襲撃を警戒して、間隔を広めにとって搜索を行おう。ただし、開けすぎるとな。」

付かず離れずの距離を保ちつつ一階から搜索を始める。搜索の際は細心の注意を払うように」

「了解」

02たちは、指示通りの距離を保ちながら一回から搜索を開始した。

――――

「行くぞ……。3・・・2・・・1・・・GO！」

部屋の入り口の壁に張り付いた02と10がタイミングを合わせると、ランサーを構えた09が一気に部屋に押し入り、その後02、10が続いた。

「……何もないか……」

「くそ。ここもはずれだな…手がかりが一つもない」

09と10が悪態をついた。搜索を開始してすでに1時間が経過しているのにも関わらず、

手がかりが全く見つかっていなかった。

「この部屋で一階は最後だな…。次は2階になるな……。」

02が不安げに言った。02の言う通り、今突入した部屋で一階はすべて探索したことになり、

次は2階に探索の場を移さなければならなくなった。

「2階か…。この建物は崩壊が進んでいる…。もし、何かの罨が2階にあった場合、

全員瓦礫の下敷きだ。気をつけろ」

02がそう言って、一階最後の部屋を出ようとしたとき、突然、セ

ンサーに反応が現れ、

基地から緊急通信が入った。

『こちら基地！正面エントランス付近に00はじめとする複数の反応が現れました！』

至急向かってくださいー！」

「了解！こちらのセンサーでも捉えた。すぐに向かう！」

02たちはGグライディングホールHを全速力で回転させると現場に急行した。

現場に急行すると、眩く光る球体が浮かんでおり、しばらく経つと光が収まった。

光が収まると、その場には00たちとリニスの閉じ込められた結晶体が現れた。

02たちが駆け寄ると、フェイトやアルフの様子がおかしいことや結晶体のことについて聞いた。

「大丈夫か？何があった？その結晶体は一体？それに、フェイトさんやアルフさんの様子も……」

「すみません。説明するには時間がかかります。詳しいことは基地でお願いします」

00の声のトーンが暗いことに気が付いた02は09と10に結晶体を支える指示を出し、

撤退の指示を出そうとした瞬間、突然、廃墟が崩壊し出した。

「撤退だー！急げ！！下敷きになるぞ！！」

02が大声を上げて撤退を指示すると、全員、全速力で駆け出し廃墟から脱出した。

脱出した全員が振り返るときつきまであったホテルの廃墟は、ただの瓦礫の山に変わっていた。

02が全員いることを確認し、結晶体に異変がないことも確認すると、崩壊の轟音を聞きつけた周囲の住民に気付かれる前に急いで基地に帰還した。

## Memory 50 再契約

基地に帰還した00たちは魔法で眠っているアルフを医務室に預けると、

リニスが閉じ込められた結晶を訓練スペースに運び入れた。

そのあと、リーネも合流し結晶の調査を始めた。

「オーツー、リニスは助かるの!？」

「フェイトさん落ち着いて。少なくとも生命反応はあるから生きているよ。」

とにかくこの結晶から出さない」と

オーツーはリニスの入った結晶に手を当てると、結晶の正体について調べ始めた。

「オーツー、何だか分かるか？」

「うん。・・・何だこれ?なんて雑な封印魔法なんだ・・・。」

クロノが聞くと、オーツーが首を傾げた。

「雑?どういう事?」

ユーノが?を浮かべながら聞いてきた。

「Ωがやったのは確実なんだけど、慌てて封印した感じなんだ。」

詳しく言うと、一番初めに掛けた魔法の上から何重にも封印魔法をかけてあるんだけど

その封印魔法全部継ぎ接ぎなんだ。しかも、その継ぎ接ぎも雑すぎて隙間だらけ・・・

「いったい何を考えてこんなことをしたんだか・・・」

オーツーが解除を試みると、5分程度で解除が終わったらしく、結晶に変化が起きた。

眩い光を発したかと思うと、結晶体にひびが入り、ガラスの割れるような音と共に砕け散った。

「おっと・・・」

オーツーは支えを失ったりリニスを支え、床に寝かせた。

しかし、オーツーはリニスを寝かした後、片膝について頭を押さえていた。

よく見ると、顎を伝い血が流れ落ちていた。

「血が！オーツーさん、大丈夫ですか!？」

流れ落ちる血を見たのはが慌てて駆け寄った。

「だ、大丈夫……。なんとか……。」

「大丈夫なわけないでしょ。00は休みなさい。あとは私がするわ」

立ち上がろうとするオーツーをリーネが制止すると、オーツーに変わり、

リーネがリニスの状態をチェックし始めた。すると、とんでもないことが判明した

「まずいわ。魔力回路が切れている」

「え!?魔力回路が切れているって、なんで……。」

「ど、どういうことですか?」

フェイトは信じられないという顔をして、使い魔の知識がないのはは、

どういう状況か分からずおろおろしていた。

そんなのはにクロノが説明した

「使い魔は魔導士と契約した際に、魔導士と魔法回路を繋いで魔力を供給してもらうんだ。

そして、使い魔は魔導士の魔力を消費してその存在を維持している。

その魔法回路が切れているということは、使い魔との契約を切った

つまり、契約主である魔導士がいらないと判断したことになる」

「そ、それじゃあ、フェイトちゃんのお母さんが!？」

「いいえ、プレシーは何かを使い捨てにするような性格じゃないわ。恐らく、何かあったのね。

それより、早く新しい回路を繋がないと。このままじゃ消滅するわ」

「じゃあ、私に繋いで下さい!リニスが消えるなんて嫌!」

リニスが消滅する危険があるとリーネが告げると、フェイトがすぐに回路を繋ぐように言った。

しかし、リーネは首を横に振った

「ダメよ。フェイトさんは既にアルフと契約しているわ。」

二人も使い魔を使役するのは今のフェイトさんじゃ無理よ」

「じゃあ、私が・・・」

「なのはさんでも無理ね。というより、今、ここにいる魔導士組の負担を増やしたくないの。」

ジュエルシードの封印や戦闘になった時、どうしても中心になるのはあなたたちなの・・・」

すると、リーネはリニスを中心に魔法陣を展開した。

「だから、代わりに私が契約するわ。私なら、この子の消費魔力を十分補えるし、

不測の事態にも対応できるわ」

「で、でも、リーネさんって魔導士としての経験は・・・」

「リーネ一佐は、管理局の天才と言われるほどの研究者だが、実は管理局でも指折りの実力を持つ

魔導士なんだ。おそらく、ここにいる4人全員よりもずっと魔力的にも技量的にも上だ」

「「えっ？」」

クロノの言葉に3人は驚きの言葉を上げた。

「もう、買い被りすぎよ。研究の方が重要だったから、魔力なんて宝の持ち腐れだったけど、

今は感謝してるわ」

リーネは話しながら契約の術式を組み立てていき、3分ほどで完成させると魔法陣を解除した。

「ふう。終わった。私が新しい契約主になったからこれでこの子が消えることは無くなったわ。」

それと、契約の際に今までの記憶や経験もそっくりそのまま引き継ぐようにしたから

目が覚めたら別人ってこともないわ」

「あ、ありがとうございます！」

リニスの消滅が回避され、フェイトは涙目になりながらリーネに深

く感謝していた。

「流石、管理局の天才と言われただけはある……。」

使い魔の契約をあんな短時間でデバイスなしにするなんて……」

クロノの言葉になのはが頭に「？」を浮かべ、ユーノが説明した。

「なのは、普通、使い魔の契約はデバイスを介して複雑な術式を展開してするものなんだよ。」

使い魔の能力の高さによって術式の難易度や消費魔力は上がるから優秀な使い魔を持つ事は優秀な魔導師である事の証明にもなるんだ。しかも、今回は他人との契約が切れた使い魔を自身の使い魔として再契約した上に記憶や経験まで引き継ぐっていう、とんでもない離れ業をしたんだ。」

「ええ!? そんなすごいことをデバイスなしでやつちやったの!?!」

「もう、恥ずかしいわ。でも、こんなに複雑術式を組んだのは久しぶりだから流石に堪えたわ。」

リーネは顔を赤くしつつも、少し疲れた様子で言った。

「とりあえず、私の魔力が循環するまで時間がかかるから、しばらくは起きないわ。」

この子も医務室に送るわね。それと、00、少し張り切りすぎよ。

心配する人たちがいることを忘れないように」

「……了解」

リーネがリニスを抱え、いつの間にか回復していた00に釘をさすように言うと、

訓練スペースを出ていった。

残った5人もそれぞれ解散することになった。

## Memory 51 新装備

リニスの救助とリーネによる再契約を行った次の日。

今日はクロノの希望で、WDDOにおける訓練風景の見学を行っていた。

クロノの視線の先では、ホログラムで映し出された障害物や高い段差だらけの広い空間で

01をはじめとするWDDOの第1班の隊員が先程配備されたばかりの新装備である

ジャンプブースターの習熟訓練を行っていた。

この装備はMMAのジャンプ力強化のために開発された、背中に背負うユニットである。

MMAには元からある程度のホバリング機能とホバリングを活用した滑空が可能であるが、

滑空距離や滞空時間の問題を抱えていた。

今回開発されたジャンプブースターはその問題の解消と、将来的に空中からの奇襲や出撃、

3次元戦闘を行うことも視野に入れて開発された。

しかし、着地時の衝撃吸収のため脚部にスラストを増設した影響で、姿勢制御が難しくなり、

特に着地の際の姿勢制御が難しいという欠点を抱えている。

その制御の難しさを克服するため、01たちは配備直後から猛訓練を行っていた。

グライディングホイール  
G Hの擦過音を響かせ、隊員たちは指示されたコースを走っていた。

しかし、ただコースを走るわけではなく、隊員の被るH ヘッドアップディスプレイ U Dには標的がランダムで映し出され、射撃もしくは近接攻撃を行う必要があった。

標的は固定タイプ、移動タイプのほかに、遠距離近距離、おまけに攻撃タイプ、シールドを展開、防御を取るタイプなどバラエティに富んでいた。



実際には攻撃が飛んできていないわけではないが、もし、標的からの攻撃を受けるとMMAに衝撃が走り、一定時間行動不能になるという凝った仕組みだった。

そんな標的とジャンプブースターを使用した高台への移動も混ぜられた訓練が行われていた。

「ツとお!!」

先頭を走行していた01がジャンプブースターを使い高台へ移動したのに続き、

次々と後続の隊員たちもジャンプブースターを使い移動していった。

「ん・う・おあつ!しまった、バランスが!」

すると、降下中に03がバランスを崩し、地面に激突してしまった。

ドゴンツ!という鈍く大きな音が響き、他の隊員が駆け寄った。

「03!大丈夫か!」

「あ、ああ、何とか…。いてて、しかし、あの高さから落ちても無傷でいられるなんてな…」

「気をつける。訓練とはいえ気を抜くなよ」

01に注意され、03が返事をする、訓練が再開された。

「すごい性能だ…。魔法を使えない人間が一般魔導士と同じくらいの戦闘力を得ている…」

管理局が欲しがりそうな装備だな…」

その訓練や事故で無傷な場面を見て、クロノがMMAの性能に感嘆の声を漏らしていた。

『本当にそうね。こっちでも送られてくる映像を見ているけど、みんな見たこともない装備に』

興味津々で映像に釘付けだよ』

クロノのデバイスを介して、アースラのオペレーターであるエイミイの声が聞こえて来た。

クロノはデバイスを通じてWDDOの訓練風景をアースラに中継

していたのだった。

「改めて分析してみて何かわかったことは？」

『やっぱり、バリアジャケットの技術が一部使われていることはわかるんだけど……』

詳細まではさっぱり……」

「そうか。やはり、リーネ一佐の技術を解析することは一筋縄じゃ行かないか……」

『うん、そうみたい。あつ、それから、こつちもすごいよ！』

エイミイが思い出したように声を上げると、逆にクロノのデバイスに映像を送ってきた。

実は、クロノを除く魔導士組はアースラの訓練スペースにいた。

目的は自分たちの訓練……ではなく、なのはを護衛するという目的で一緒に行動している00の

新装備の習熟訓練に付き合うためだった。

場所が変わってアースラの訓練スペース

なのはたち魔導士組は、アースラの訓練スペースで飛行魔法を使って空中に浮かんでいた。

その下では00が新装備である『エナジーウイング』を展開して、ヘッドアップディスプレイ

H U Dに表示される

数値のチェックをしていた。

エナジーウイングとは、新開発の飛行ユニットで翼状に魔力を形成、放出することで魔導士と

同じように高速飛行を可能とした新装備だった。

ただし、魔法で飛ぶ魔導士と違い、脚部や肩部に姿勢制御や方向転換用スラスターの設置、

墜落防止や姿勢安定用のジャイロが搭載されているなど、機械的サポートを受けながら飛ぶため、

非常にデリケートな操作を要求される代物であった。

「00さん。大丈夫ですか？」

「……姿勢制御。よし。ジャイロ数値……正常。よし……！」

00が数値のチェックを完了すると少しずつ上昇し、なのはたちと同じ高さまでやってきた。

「すごい……。本当に飛べるんだね・ソレ」

アルフが率直な感想を言った。

「うん。自分でも驚いている。この装備の開発にかなりの時間がかかっていたからね。」

正直、上手く作動するか心配だったんだ」

「じゃあ、始めよっか！」

なのはが訓練の開始を告げると魔導士組は飛行魔法を駆使し、一気に加速した。

00はエナジーウィングを操作すると魔導士組の後を追い始めた。

「00、ついて来てる？」

「大丈夫。追いつけるよ」

「よし、じゃあ、急旋回！」

先頭を飛ぶなのはが急旋回を行うと魔導士組も続いて急旋回を行った。

続いて00も急旋回を行ったが、旋回半径が大きくなり大きく外側に膨らみ、

壁に激突するコースを取っていた。

「00、危ない！」

一番後ろにいたユーノが00が壁側に大きく膨らんだのを見て叫んだ。

「くっ……このお!!」

00が壁際ぎりぎりの位置で脚部のスラスターを吹かし、壁を蹴るような恰好で無理やり方向転換を行い何とか壁に激突せずに済み、コースに復帰することができた。

「ふう……」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫。少し、反応が遅れただけ。装備も体にも異常はないよ。さ、訓練を再開しようか」

00が無事なことを言うと、訓練を再開した。

訓練を始めておおよそ1時間くらいが経った頃、休憩のために全員が地面に降りて来た。

「ふう、こんなものかな。みんなありがとう。わざわざ訓練に付き合ってもらって」

「ううん。気にしなくていいよ。それより、新しい装備はどうですか？」

「うん。だいぶん慣れたよ。あとは実際の戦闘で使ってみてみないとって感じだね」

「でも、改めてすごい装備だね。多分、ミッドチルダの方でも作るの難しいと思うよ」

ユーノの言葉になのはや00が不思議そうな顔をした。

「え？ユーノ君やフェイトちゃんたちの世界の方でも難しいの？」

「うん、恐らくね。魔法や次元関連以外の技術はこっちの世界とあんまり変わらないんだ。」

だから、魔力を使っているとはいえ機械の力で魔導士のように自由自在に飛べることで体がすごいことなんだよ」

「へえ……。向こうはこっちとあまり変わらないんだ……。意外だね」

「と、言うより、00のいるWDDO自体がすごい組織なんだけどね……」

「そういえば、その装備は00だけしか渡されなかったよね？どうして？」

ユーノがもつともな質問を投げかけた。

「この装備、滅茶苦茶魔力を消費するんだ。試しに01とか他のみんなに装備してもらったけど、

1分持たなかったうえに、その後の戦闘継続が不可能なほど疲れ切っちゃったんだ」

「1分持たないって……。どんだけ燃費悪いんだい、その装備……」

アルフが呆れたように言った。

「まあ、それだけ空を飛ぶっていう事が難しい証拠だよ」

00やなのはたちはミッドチルダのことやWDDOのことで話が盛り上がっていると、

けたたましく警報音が鳴り響いた。

『緊急事態発生！緊急事態発生！至急ブリッジに集まってください！  
繰り返します！』

至急ブリッジに集まってください！』

00たちは急いでブリッジに向かった。

ブリッジにつくと、オペレーターのエイミイが慌てた声で言った。

「今、WDDOから緊急通信が入ったの！これを見て！」

そう言って、コンソールを操作すると、目の前に空中投影された映像が映った。

そこに移っていたのは、天気崩れ少し荒れた空模様になっている海鳴市の映像だった。

「海鳴市？」

「今日はすこし天気が悪いって予報されていたけど…？」

なのはと00が？を浮かべながら映像を見ていると、映像がズームし海上上空を映した。

すると、上空に何かがいるのが分かった。

「Ωだ！」

00の言葉通り、映像には海上上空で飛行魔法を展開し浮遊しているΩが映っていた。

「な、何をやる気なの…？」

なのはが不安げな声を上げたとき、Ωに向かって空から雷が落ちて来た。

カツ!!とモニターが雷による白く激しい光に包まれた。光はすぐに収まったが、

そこにΩの姿は映っていなかった。

その代わりに…

「え!?な、なにあれ!？」

「た、竜巻!？」

映っていたのは、海から海水を巻き上げ、グネグネと伸びる3つの巨大な竜巻だった。

「Ωは何をしたの!？」

映像を見ている全員が混乱していると、警報が鳴り響きエイミーが慌てて確認した。

「な、何!?…え! ジュエルシードの反応!？」

すると、00が深刻な声で言った。

「Ωのやつ、雷を呼び寄せて自分の魔力を込めて海に向けて撃つんだ。」

その影響で、海中に沈んでいたジュエルシードが反応して暴走している」

「急いで戻らないと! このままじゃ街が!」

事態の深刻さが判明するや否や、ブリッジにいた魔導士組全員と00は転送装置に向かい、

大急ぎで海鳴市に戻った。

—————

海鳴市に戻ってきた5人は、リーネから現在の状況が伝えられた。『現在、海鳴市にはカバーストリー』『爆弾低気圧』が実施されているわ。

特に沿岸部には避難指示が発令されているから、派手に魔法を使っても大丈夫よ。

一応、目撃を防ぐために地域一帯には電子ジャミング及び記録装置へのハッキングを行える準備も完了しているわ。

発生した竜巻は、ゆっくりだけど確実に街に向かっていている。

街につく前にジュエルシードを鎮静化して』

「分かりました!」

『それと、今回、00以外のWDDO隊員は海上に出られないから後方待機しているわ。』

ごめんなさい…』

リーネが申し訳なさそうに言った。WDDO隊員は00を除く全員が空を飛べないため、

今回のような海上などへの対処は魔導士頼りになってしまうのが現状だった。

「大丈夫です! みんなの分も頑張ります!」

なのはが元気よく返事をする、『ありがとう』とリーネが感謝し、通信を切った。

5人は海上に向かって飛行中、クロノが気になったことを聞いてきた。

「00、カバーストーリーとは何なんだ？」

「カバーストーリーは僕たちWDDOが魔法関連の事件に対処する際に流す偽情報の事だよ。」

僕たちや魔法のことを知られたり、不審に思われるのを防ぐために、それっぽい嘘情報を流して

事件そのものを覆い隠すってという意味からカバーストーリーって呼ばれてる」

「なるほど。魔法と言う存在がないこの世界に余計な混乱を防ぐための仕方ない嘘という訳か。」

存在を知られないようにするのは何とも大変なんだな…」

クロノは魔法が一般的に知られていない世界で魔法を知られないようにするという、

管理局では絶対に味わうことのない苦勞を知り何とも言えない気持ちになった。

そして、5人は海上で猛烈な勢いでゆっくりと街に近づいていく、ジュエルシードの暴走体である竜巻に向かってさらに速度を上げて向かって行った。